



Title	人々による地域文脈の形成と継承のあり方に関する研究 -ガーナ・アクラLa市域 非正規市街地の土着コミュニティと「あこう絵マップコンクール」参加者による地域文脈形成を対象として-
Author(s)	江端, 木環
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91958
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

博士学位論文

人々による地域文脈の形成と継承のあり方に関する研究

-ガーナ・アクラ La 市域 非正規市街地の土着コミュニティと
「あこう絵マップコンクール」参加者による地域文脈形成を対象として-

江端 木環

2022 年 12 月

大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻 建築工学コース

目次

第1章 序章	
はじめに	2
1.1 研究の背景	4
1.2 研究の目的	5
1.3 本研究の位置付け	5
第2章 ガーナ・アクラの非正規市街地における地域文脈の解読	
2.1 本章の目的と位置付け	9
2.1.1 目的	9
2.1.2 既往研究と研究の位置づけ	10
2.2 対象地の概要	11
2.2.1 ガーナ・アクラにおける「非正規市街地」	11
2.2.2 対象地 Abese 地区	13
2.2.3 Abese 地区の選定理由	14
2.3 水・衛生環境からみる土着コミュニティによる地域マネジメントの仕組み	16
2.3.1 クランの概要・合意形成の仕組み	16
(1) 構成と役割について	16
(2) クランによる3つの会議について	17
(3) 3つの会議の関係性	22
2.3.2 Abese 地区における水・衛生環境の整備実態	23
(1) 下水処理の仕組み	23
(2) 上水供給の仕組み	24
2.3.3 水・衛生環境の分布について	26
(1) 下水道	26
(2) トイレ	26
(3) 浴室	26
(4) 水栓	27
(5) ウォータータンク	27
2.3.4 分析：北・南街区の整備状況の違い	29
(1) 汚水処理方法とトイレの整備状況	30

(2) 雑排水処理方法と浴室等の整備状況	30
(3) 上水供給と水栓・ウォータータンクの整備状況	30
(4) 本項のまとめ	30
2.3.5 Abese 地区における水・衛生環境の整備プロセス・維持管理	31
(1) 汚水処理施設の整備プロセスと維持管理	31
(2) 雑排水処理施設の整備プロセスと維持管理	32
(3) 上水施設の整備プロセスと維持管理	33
2.3.6 水・衛生環境における地域マネジメント	35
(1) 分析：水・衛生環境における地域マネジメントの類型化	35
(2) 分析結果：マネジメントタイプによる北・南街区の比較	37
2.4 子どもの戸外行動調査と描画テストによる環境イメージ把握の試み	38
2.4.1 本節の目的	38
2.4.2 調査・分析方法	39
2.4.3 描画テストの調査結果	40
2.4.4 戸外行動調査の調査結果	43
2.4.5 分析結果	45
2.5 本章のまとめ	46
2.6 考察	46
注	48

第3章 絵地図の制作過程からみる人と地域との文脈形成に関して（兵庫県赤穂市） 51

3.1 本章の目的と構成	52
3.1.1 目的	52
3.1.2 既往研究と研究の位置付け	52
3.1.3 3章の構成	53
3.2 あこう絵マップコンクールの概要と選定理由	54
3.2.1 研究対象地：赤穂市の概要	54
3.2.2 あこう絵マップコンクールの概要	55
3.2.3 あこう絵マップコンクール実行委員会」の概要	56
3.3 調査方法と対象作品	56
3.3.1 対象作品	56
3.3.2 対象作品の選定理由	60
3.4 テーマ設定及び描かれた範囲の分析	62
3.4.1 テーマの分類（分類1）	62

3.4.2	中心的に描かれた場所の分布とその範囲（分類2）	62
3.4.3	各作者のテーマ及び描かれた場所の分布・範囲	63
	（1）作者Kの特徴	63
	（2）作者Cの特徴	63
	（3）作者Hの特徴	64
3.4.4	テーマ設定及び描かれた範囲の分析	64
	（1）テーマの大別とその特徴	64
	（2）テーマ設定と地域性の関連性	65
	（3）同じ場所への調査・表現	65
3.4.5	まとめ	65
3.5	絵マップ制作の変遷	66
3.5.1	本節の目的と分析方法	66
	（1）本節の目的	66
	（2）分析の方法：制作プロセスの構造化	66
3.5.2	分析	67
	（1）作者Kの作品分析	68
	（2）作者Cの作品分析	69
	（3）作者Hの作品分析	70
3.5.3	作品の性質	75
3.5.4	学びの蓄積	78
3.6	本章のまとめ	81
3.7	考察	83
	注	86

第4章 考察・まとめ 87

4.1	ガーナ・アクラの非正規市街地における地域文脈の継承のあり方	88
4.2	絵地図制作による「人と地域との文脈形成」を通じた地域文脈の継承のあり方	89
4.3	まとめ	90

参考文献	92
------	----

謝辞	97
----	----

第1章 序章

はじめに

本論ではまちづくりの視点、地域を捉える視点として「地域文脈」をテーマとして扱う。「地域文脈」というワードは、どんな地域においてもまちづくりを考える際にとっても重要だと考えているが、本論に入る前に、このテーマを扱うきっかけを述べたい。

私自身のまちづくりの興味・関心への背景には、本論中でも扱う「あこう絵マップコンクール」がある。まちを歩き、発見したこと調べたことを「絵マップ」を描いたこと、またそれらの運営をする人々の姿を見てまちづくりに触れてきたという幼少期の経験は、「まちづくり」の原体験として大きく影響を受けてきた。絵マップテーマソングに「このまちのことをたくさん知ると このまちのことがたくさん好きに」「このまちの人をたくさん知ると このまちのことがたくさん好きになる」というフレーズにあるのだが、住民が自分の地域を肯定的に捉えること（郷土愛・愛着）がまちづくりの重要なことだという考えは、絵マップコンクールというまちづくり活動への参加・関わりを通して感覚的に私自身のものさしとなっており、今後もそうあり続けると思う。また、生まれ育った兵庫県赤穂市は、忠臣蔵をはじめとする伝統・歴史をもつ地域であり、私自身地元としての赤穂が好きで、周りの友人や地域の方も郷土愛を感覚として持っている人が多いように感じてきた。

研究室に所属して以来、様々な地域・集落と「まちづくり」に関わらせていただいた。

大阪府岬町では、交通の利便性や海や山などの豊かな自然、民家や石塀などの魅力的な地域資源が現存していたが、私が関わり始めた当時、地元住民のまちづくり意識の低いことや地域組織があまり機能してなかったことから、「まちづくり」のきっかけがなかった。また尾鷲市九鬼町などの集落空間は、地形と素材、そこに住む人の慣習・営みががづくりだす魅力的な風景や空間がそこにはあるにも関わらず、交通や利便性の悪さや過疎化により、空き家や地域の担い手不足などの問題に直面していた。

また、ガーナ・アクラのアベセ地区に訪れると、そこで生活する人々の創り出す暮らしの風景には、経済論理とは異なる豊かさがあった。居住環境やその背景に様々な問題を含みながらも、路地で料理・洗濯・娯楽・おしゃべりを外で行う人々の姿や生活空間、慣習・文化がそこにはあった。しかし、その背景には「非正規市街地」というレッテルから行政サービスが受けられないこと、また除却や再開発などの都市開発によりコミュニティの破壊を招きかねないという状況にある。これまで肯定的に捉えられてきた「非正規市街地」というフィールドにおい

て地域の要素をつぶさに捉え、慣習・暮らしを尊重する自律的な地域更新のあり方への手がかかりを見出す必要があると感じた。

これらの経験や先行研究を通して、まちづくりには、キーパーソンや地域組織の重要性、地域の担い手や専門家、地域外に住む人（ヨソモノ）の役割など、汎用性のある仕組みがあることもわかってきたと同時に、各々の地域にはそれぞれの「地域文脈」があり、魅力や課題、そして「まちづくり」のあるべき姿は個別解であるべきだと実感した。また少子高齢化社会、ライフスタイルの変化により地域の担い手が多様化する今、住民や子ども一人一人の地域社会に対する意識や価値観の醸成という、まちづくりの「まちづくり意識」の育成も重要なのではないかと感じている。

この博士論文を通して、研究視点としての地域文脈の解釈からアイデア・提案を導き出すこと、さらに地域環境（まち・ひと）を育てるまちづくり活動を社会に実践できる形で提案することを目指し、「地域文脈」について問いと思う。

1.1 研究の背景

『「地域文脈」とは、私たちが生きる物的環境において、過去から現在、さらに未来への発展的なプロセスの中に見出される何らかの継承的な構造であり、“価値”である。そして都市や地域が継承してきた“価値”をいかに読み取り、それらの断絶を防ぎ、どのように未来へと発展的に継承していくのかを論じる知的体系を「地域文脈論」とする…（後略）』

『地域文脈デザイン-まちの過去・現在・未来をつなぐ思想と方法』（2022年、日本建築学会編）では、「地域文脈」を上記のように定義している¹⁾。日本建築学会都市計画委員会は、都市形成・計画史小委員会（1999年）を起点とし「地域文脈」に関する議論を継続し知見を蓄積してきた。本書では、「地域文脈」の読解と定着のための新たな論理の構築を行った上で、開発規模の肥大化や計画都市の解体と成熟、大災害からの復興など、現代の都市、地域に新たに生じる課題に対する戦略的な地域文脈デザインの方向性を提示している。従来の「地域文脈論」の論理では解けない課題を分析し、解決の糸口を見出しうる新たな枠組みを得ようとするものである。

地域文脈の読解の「視点」は、①検証：これまでに明らかになっている地域文脈を見直し、新しい価値を見出す、②変遷過程：変化していく都市構造や街並みを記録しつつその文脈を検討する、③再評価・再解釈：技術や計画の中で克服すべき対象としてみなされ時代の流れの中で見逃されたものを見直す、という3つの視点で行われてきたと述べられている。

また地域文脈の解読主体に着目すると、従来は主に研究者などの専門家であり、専門家は地域文脈を客観的に評価する役割があり、重要伝統的建造物保存地区の指定などを例とする価値づけ、権威づけを行ってきた。一方で、地域の当事者である社会組織や住民は、従来、地域文脈解読の対象として扱われることが多かったが、近年は地域の当事者としての住民や地域組織が地域文脈を解読する主体として参加・関与していくことに重点が置かれて始めている。住民や社会組織は、地域の担い手・主体であり、地域文脈の継承や更新に向けて不可欠な主体であり、持続可能性を担保するには、地域文脈を多くの住民が認識し、地域のあるべき方向性を共有することも重要な観点であると考えられる。

これまで行われてきた地域文脈の議論を都市・建築、社会構造に生かすためには、解読された地域文脈の継承・更新、さらには「地域文脈」を解読できる人材の育成が求められている。

1.2 研究の目的

本研究は①アフリカ・ガーナにおける非正規市街地の地域文脈の解読（観点①：コミュニティ）、②兵庫県赤穂市における絵地図づくりを通じた人と地域との文脈形成（観点②：市民）という2つの観点から、「地域文脈」の継承に向けて考察することを目的とする。

観点①では、アフリカ・ガーナの「非正規市街地」を対象に水・衛生環境をはじめとする空間組織の実態と整備プロセス・維持管理の仕組みを把握することで、土着コミュニティを核とする地域マネジメントの仕組みを明らかにすることを目的とする。また、地域住民の一員として「子ども」に着目し、描画テスト及び戸外行動調査を通して、子どもの認識する地域の姿（環境イメージ）を把握する試みも併せて行う。

観点②では、地図制作を通じた子どもの郷土愛やまちづくり意識の醸成を目的とし、市民主体で

19年間継続されてきたまちづくり活動「あこう絵マップコンクール（兵庫県赤穂市、以下絵マップコンクールと略す）」に着目する。当該コンクールを通じた子どもの絵地図づくりのプロセスに着目し、子どもが地域から何を「学び」、地域とどのような繋がりを形成していくのか、その過程を明らかにする。さらに、当該コンクールの継続的な取り組みが「地域文脈」の継承と更新においてどのような貢献をしているか考察を行う。

異なる観点①、②から、地域文脈の解読主体（地域住民・専門家）に着目し、それぞれの観点と解読主体から継承に向けたアクションに必要な要素を整理し、図解化を試みながら地域文脈の継承に向けた考察を行う。

1.3 本研究の位置付け

地域文脈の「継承」に関しては、田村ら²⁾の研究がある。ここでは、「地域の文脈」は、①コミュニティ、②まちづくり資源、③まちづくりの課題・目標、④まちづくり計画情報、及びその集合体で構成されるとし、阪神淡路大震災の被災地を対象に、震災前のまちづくりと震災後の復興土地区画整理の策定経過や内容を比較し、震災前後において4要素がどのように再認識

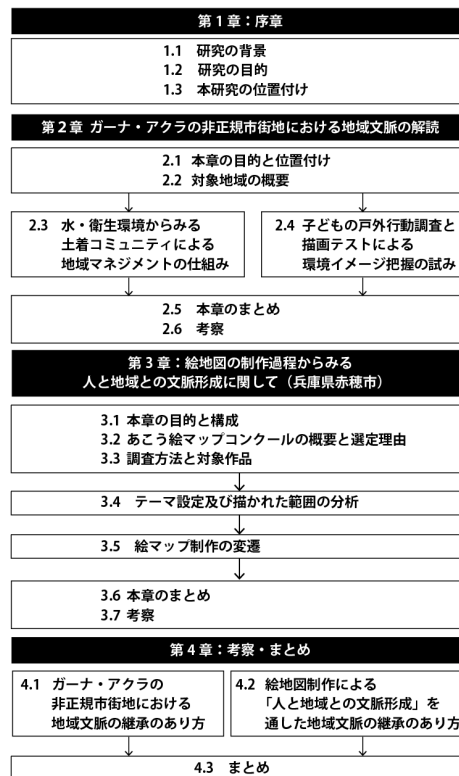


Fig.1.2 研究の構成（出典：筆者作成）

されたかを分析している。「地域文脈の継承」という視点でまちづくりを行うことの有効性を示している点で類似する内容ではあるが、当該研究の対象は被災地である。大災害を受けた地域において従来の「地域性」を地域文脈の観点から捉え、新しいまちづくりに生かす試みや震災復興土地区画整理事業にどう反映されたか明らかにしている点は、本論で扱う対象地である「非正規市街地」とは前提が大きく異なる。

地域文脈の解釈に関する論文について、下田ら³⁾は、宮城県女川町の漁村集落を対象に集落群が相互の共同関係を形成しながら、漁場・神社・行事などの空間的・社会的資源を維持・管理・運用方法を把握し、「共生の仕組み」の地域文脈を明らかにしている。また、永井・木多ら⁴⁾は千里ニュータウン開発前後の旧集落と耕作域に着目し、ため池から水田への送水の仕組みやため池の維持管理に関する役割分担を把握し、耕作空間の背後にある地域文脈を解釈した。これらは、社会的・空間的資源を維持・管理・運用する仕組みを地域文脈として捉えた点は、本論の観点①において地域の社会（土着コミュニティ）・空間構造（水・衛生環境）から地域マネジメントの仕組みを解釈するという点で、参考にすべき内容である。

以上の既往研究を基に、当該研究を観点①、②を位置づける。

観点①：アフリカ・ガーナにおける非正規市街地の「地域文脈の解釈」

先述したように、「地域文脈論」について長年議論がなされ体系化されつつあるが、世界に数多く存在する「非正規市街地」を対象とした地域文脈の解釈については、研究蓄積が少ない。また、前述した『地域文脈デザイン』における読解の3つの視点において、「③再評価・再解釈」に位置付けられると考えられる。

非正規市街地は、従来から行政からインフラ・サービス提供の枠外とされ、未確定な土地権利や、道路・上下水道等の基本的な生活インフラが未整備であるなど、問題を抱えている地域が多く、このような地域は不良市街地として除却・再開発が前提に進められてきた。

しかし、近年は非正規市街地・スラムの社会や空間の柔軟性・多様性を評価する流れがみられ⁵⁾、居住改善手法もトップダウンからボトムアップ的手法へシフトしつつあり⁶⁾、Seth・木多は非正規市街地を肯定的に捉え、新たな改善的整備手法の可能性を示している。

これらの流れを踏まえ、本論では、除却・再開発されるべきと見なされてきた「非正規市街地」に焦点をあて「再解釈・再評価[3]」を行う。土着コミュニティを核として独自の地域マネジメントが行われてきたアフリカ・ガーナの非正規市街地の「地域文脈」の解釈を通して、従来の都市開発のあり方にかわる新たな改善的整備手法に向けた新たな糸口を考えたい。また、これまで地域文脈の解釈となっていない「非正規市街地」を対象とすることは、当該研究分野における新規性として位置付ける事ができる。

観点②：絵地図制作を通じた人と地域との文脈形成（対象：あこう絵マップコンクール）

「地域文脈論」において、一般市民（住民や子ども）は、専門家によって解読された「地域文脈」を一般化や簡略化により情報共有される対象として扱われていることが多いが、持続可能性を担保するには、地域文脈を多くの市民が認識し、読み取り、人と自然、人と人、人と社会との繋がりを再構築し、地域のあるべき方向性の共有することも重要な観点である⁷⁾。ここでは、人々が自らの興味・関心から主体的に「地域文脈」への認識や学びに繋がるまちづくりの取り組みとして「絵地図づくり」を取り上げる。能動的に地域や場所を知り、発見する喜びや楽しい経験などの記憶により、場所や地域が好意的に意味付けられることで個人の内面には地域への肯定的なイメージや地域環境への理解、当事者意識の醸成などが形成されると考えられる。地図制作を通じた子どもの郷土愛やまちづくり意識の醸成を目的とし、市民主体で19年間継続されてきたまちづくり活動「あこう絵マップコンクール（兵庫県赤穂市、以下絵マップコンクールと略す）」に着目する。「絵マップ」とは、子どもが自分のまちを調査し、発見したことや魅力を地図や絵で表現した絵地図のことである。子どもは、絵地図制作のためのフィールドワークや聞き取りなどを通じ、自分の住むまちの仕組みや住民の存在などについて、多様な「学び」を得ていると考えられる。また、子どもの疑問や興味に基づき、実体験を伴って「お気に入りの場所」、「発見したこと」などを地図に表現することで、場所や地域が好意的に意味づけられ、子どもの内面に自分なりの文脈が形成（人と地域との文脈形成）がなされ、地域への愛着や関心に繋がることも考えられる。

なお、本論のテーマである「地域文脈」は、建築・都市に関わる計画系・歴史系の分野で使われる用語であり、先駆的には田村ら²⁾が住民によるまちの「資源、組織」の認識の仕方、まちづくりの考え方として扱っている。また、木多⁸⁾は、千里ニュータウンにおいて住環境運営を積み重ねてきた人々の間に見出せる共通の考え方、あるいは、プラハ都心部における建物の所有者、管理者、建築家に継承されてきた街区形成の仕方を地域文脈として捉えた。

これらを踏まえ、杉田・木多^{9,10)}は「地域文脈」その用語の意味や概念をより詳細に示している。地域づくり・まちづくりに関わる人々が課題解決の仕方を「発展的に」持続させていく連鎖の質や価値を「連鎖的文脈」、地域や都市における社会組織や空間組織に備わる形成原理であるという「組織的文脈」という2つに区分をしている。

以上の考え方を参照し、組織的文脈と連鎖的文脈を区別した際、観点①においては、社会・空間構造の特徴を肯定的に読解し、当該地区及び非正規市街地の改善的整備手法に有意義な知見を得るため、組織的文脈の解読に取り組むものである。

第2章 ガーナ・アクラの非正規市街地における地域文脈の解読

2.1 本章の目的と位置付け

2.1.1 目的

本章では、ガーナ・アクラの非正規市街地内に存在する、土着コミュニティにより良好に運営されているLa地域Abese地区を対象とする。

非正規市街地の「地域文脈」を解説することで、改善的整備手法の糸口として、同地区の社会・空間構造を把握し、ガーナ・アクラ

の非正規市街地を良好に維持・改善するための知見を得ること、さらに同地区が抱える問題や課題の抽出を行い、持続性を担保する仕組みとして改善案を提案することを目標とする。

本章では、下記2つの観点を明らかにすることを目的とする (Fig.2.1.1)。

①水・衛生環境からみる土着コミュニティによる地域マネジメントの仕組み (2.3節)

Seth・木多¹⁾はAbese地区における居住者の基礎情報、土着コミュニティ・クランの概要を明らかにした。しかし本先行研究は、社会学的アプローチからの情報収集に留まったため、本章では建築学的な視点から、空間的特徴や習慣・慣習の解説を行う。

本節では、Abese地区の水・衛生環境に着目し、その実態と整備・維持管理から、土着コミュニティを核とする地域マネジメントの仕組みを明らかにすることを目的とする。なお本論における「地域マネジメント」は、住環境の向上や問題解決に向けて、住民で目標を設定・計画し整備・改善を行うこと、また、維持管理・運用についてルールを決め実践することと定義した。

②子どもの戸外行動調査と描画テストによる環境イメージ把握の試み (2.4節)

地域の当事者であり担い手である住民の地域に対する認識、潜在的な環境イメージを捉えることは重要である。本節では、「子ども」に着目し、ワークショップ(描画テスト)を通して子どもの認識する地域の姿を把握する試みも併せて行う。子どもを対象とすること、また海外での調査による言葉の壁という点から、言語を用いず潜在的な子どもの環境イメージ(地域認識)を捉える有効な手段としての「描画テスト」と、実際の住民や子どもの居場所や行為を把握する戸外行動調査(フィールドワーク)の2つの調査を行い、分析、比較を行い子どもの地域認識(環境イメージ)に関して考察を行う。

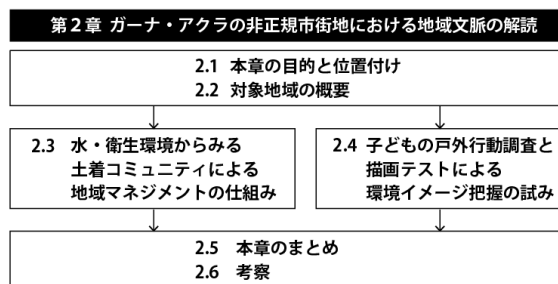


Fig. 2.1.1 2章の構成 (出典：筆者作成)

2.1.2 既往研究と研究の位置づけ

アフリカの非正規市街地に関する建築学分野における研究は、非正規^{注1)}な開発形態の特質、さらには土地配分プロセスと土地所有メカニズムの実態を明らかにし、土地配分と所有に関する制度がガバナンス構造と開発形態と密接な関係を明らかにした小野ら²³⁾の研究がある。

途上国の非正規市街地・スラムにおける居住改善手法については、都市計画分野において複数の事例⁴⁵⁾に関して論じられている。また、ボトムアップ的手法として、インドネシアのカンポン改善事業¹²⁾が有名であるが、当該事例からも地域固有の慣習に則った仕組みづくり・手法が有効であることは明らかである。さらに、近年重要性が指摘されているコミュニティの強化を図る手法として、パキスタンのオランギー・パイロット・プロジェクト^{注2)}のような住民の組織化が行われている事例が見られる。一方で、アフリカにおける改善手法に関しては、国際協力機構によるザンビア共和国ルカサ市居住改善事業が挙げられるが、事例は多くない。

以上より地域文脈の解読において、研究の蓄積の少ないガーナないしアフリカの非正規市街地において、改善的整備に向けた考察を行うことに意義を有する。一口に非正規市街地といっても、その形成過程は異なり、それに対応して課題は様々であるため、ガーナないしアフリカ固有の慣習に基づく仕組みづくりが必要であると考え。さらに、土着コミュニティによる地域マネジメントに着目することに意義があり、これは非正規市街地の改善的整備において、既存のコミュニティを核としたボトムアップ型整備が有効であるという考え⁶⁾に基づく。

当該研究の対象地である La 地域 Abese 地区については、筆者の所属研究室において長年研究を継続している。過年度の研究では、平岡美由紀(2016) は、および田頭佑子(2017) は、それぞれ Abese 地区および Kowe 地区 (Abese 地区の西側に隣接する地区) の居住環境における社会・空間的調査を行った。そこから、クランという地域の伝統的な組織を核としたマネジメントによって、地区改善を比較的良好な環境が実現されていることを明らかにした。さらに、岡田まどか(2018) は、当該地区における土地取引形態に着目し、自律的なコミュニティが形成する地域の持続性を担保する仕組みを明らかにした。一方で、地域住民 (子ども含む) からみる地域構造の把握などの調査は行われていない。

以上を踏まえ、本章では Abese 地区における過年度までの研究・調査結果を踏まえ、「水・衛生環境」からみる土着コミュニティを核とした地域マネジメントの仕組みを明らかにし、さらに地域の未来の担い手である「子ども」の地域に対する認識の把握を試みる点に新規性及び意義を有する。

2.2 対象地の概要

2.2.1 ガーナ・アクラにおける「非正規市街地」

アクラの面積 17,320ha のうち、2,718ha が非正規市街地として認識されており、航空写真、人口密度、収入によって定義された 78 もの非正規市街地があるとされている⁷⁾。非正規市街地は人口密度が高く、アクラ市では 250 人/ha であるのに対し、非正規市街地では 607.8 人/ha である。以下の情報は『PARTICIPATORY SLUM UPGRADING AND PREVENTION』(UN Habitat, 2011 年)をもとに示す。

アクラで非正規市街地が生まれた背景には、植民地化が大きく影響している。英国の導入した近代都市計画と土着の慣習的な仕組みという二重構造に起因すると考えられ、その形成プロセスは一様ではない。

一つは (a) Indigenous Settlement : 先住民居住地であり、植民地時代、土着コミュニティ・慣習的な仕組みが根強い地域は、支配・都市計画の枠外にされてきた。時代変化や人口増加に伴い、住環境が悪化している。次に、(b) Migrant Settlement : 移民・不法占拠者居住地であり、急激な人口増加や都市計画による大規模開発に伴い、農村から都市への不法占拠が拡大し市街化した地域である。また (c) Squatter Settlement : (a) と (b) の混在した地域も存在し、特に生活インフラが未整備な地域である (Fig.2.2.1)。

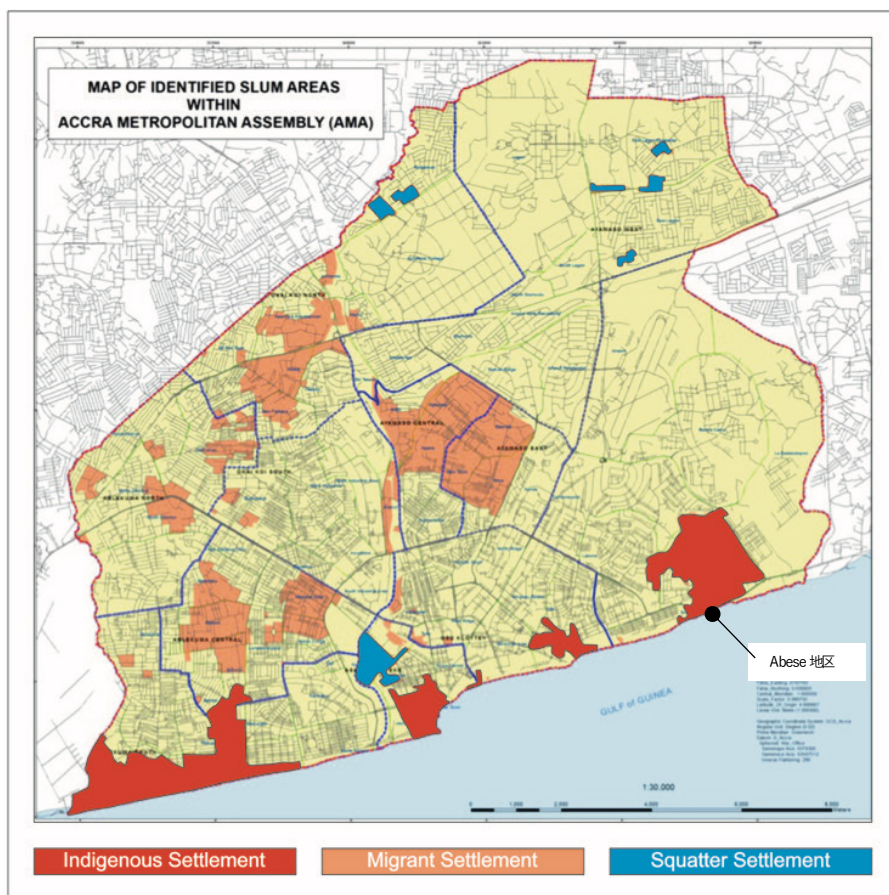


Fig. 1.2.1-1 ガーナ・アクラにおける非正規市街地（着色部分）

(出典：Improvement Program; Accra Metropolitan Assembly: Accra, Ghana(2011)より)

このような状況に対し、ガーナ政府は2010年代以降、スラム・非正規市街地の改善を最重要課題として掲げている^{注3)}。アクラ市当局は、ガイドラインの策定⁸⁾と非正規市街地対策担当省を開設し、専属の大臣の監督のもと非正規市街地の改善を推進する体制を整えたところである^{注4)}。その方針では、スラムの改善と新たなスラム形成の防止に向けて、コミュニティ自らインフラの整備・点検・維持管理できるような能力開発の必要性等が説かれているが⁹⁾、具体的な成果は報告されておらず実践の方法を模索している状況である。

2.2.2 対象地 Abese 地区

本研究はガーナの首都アクラの La Municipal Assembly(La 市域)・Abese 地区を対象とする (Fig.2.2.2-1)。La Municipal Assembly(La 市域)は行政区域であり、ガーナの首都であるグレート・アクラ首都圏 (GAMA) の南西にあり、もともと La 族が居住する地域周辺を含む。

本論文では、La Municipal Assembly を La 市域、La 族が約500年前に定住化を始めたと言われる地域を La 地域と呼ぶ。La 地域は、主に La 族が住んでおり、本研究の対象地である Abese の他に、Kowe, Dzrase, Leshi, Kannada, Abafum, Nmati を加えた7つのコミュニティ (地区) が存在する。

ここで、Abese 地区の航空写真及び地図を Fig.2.2.2-2, Fig.2.2.2-3 に示した。Abese 地区には、血縁関係による土着コミュニティ「クラン」という自治組織が存在し、定住化から現在に至るまで「クラン」とその慣習的リーダーである「チーフ」を中心として、住民主体の地域マネジメントが行われてきた。

Abese 地区には 15 のクランが存在し^{注5)}、各々がクランハウス^{注6)}とよばれる集会所をもつ。同地区は大通りを介し、従来からの居住域である北街区と、人口増加により拡張された南街区に区分される^{注7)}。北街区には、クランハウスが集結して分布しており、クランハウスが立ち並び通りは当該地区の主要街路となっている (以下、主要街路とする)。一方、南街区にクランハウスは存在しない。

【地方行政機関 LaDMA】

Abese 地区は行政区 La Municipal Assembly(以下、La 市域)に属する。La 市域は 2012 年に国の地方分権事業の一環で設立された地方行政組織 LaDMA を持つ。市町村・地方議会を管理可能な規模にすることでボトムアップ的な整備・改善を行うという政府の目的に沿ったものである。LaDMA は、法・制度¹⁰⁾において、クランやチーフの権限や役割について、明確な位置づけをしていない。しかし「チーフ、土地所有者、一般市民が関与する土地利用、計画、管理に対する地方分権型の取り組みを試みる」と示していることから、土着コミュニティのリーダーであるチーフの存在を軽視していないことが推測できる^{注8)}。

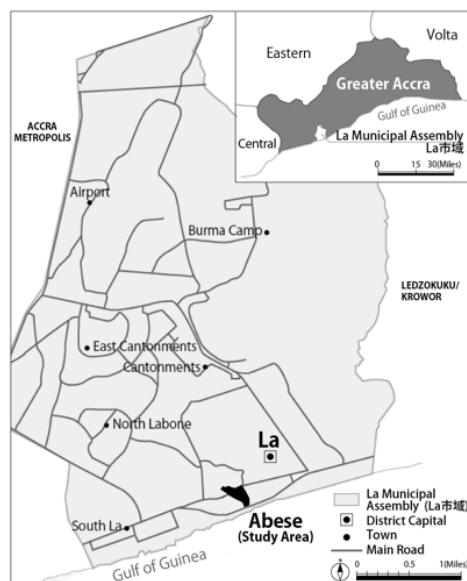


Fig.2.2.2-1 Abese 地区の位置
(出典：筆者作成)

2.2.3 Abese 地区の選定理由

ガーナの首都アクラに数ある非正規市街地の中から、Abese 地区を研究対象地として選定した理由は2つある。

第一に、それはガーナ・アクラにおいて、La 市域は、最も重要な市域の一つであることである。La 市域には、高級住宅エリア、商業および文化施設（アクラモール）、国際空港、大使館および外交官邸など、重要な施設が集まっている。そのような環境から程近くに「非正規市街地」と呼ばれる Abese 地区がある。「非正規市街地」とそうでない地区が混在していることが将来的な改善におけるポテンシャルの一つと考えた。

第二に、GAMA の他の非正規市街地（Ga Mashie, Agbobloshie, Nima など）は、これまで経済的および空間的な観点から研究されている一方、Abese 地区は、まだ研究されていない。

第三に、過年度の研究より、以下のことが明らかになっている。

- ・ Ga 族の定住化の起点となる地点であり、独自の文化を保持している
- ・ クランにより比較的良好なコミュニティが形成されている

以上の理由により、Abese 地区は研究対象地として有意であり、地域文脈を読み解く上で、意義のある場所として考える。



Fig.2.2.2-2 Abese 地区の航空写真 (出典:Google map より筆者作成)

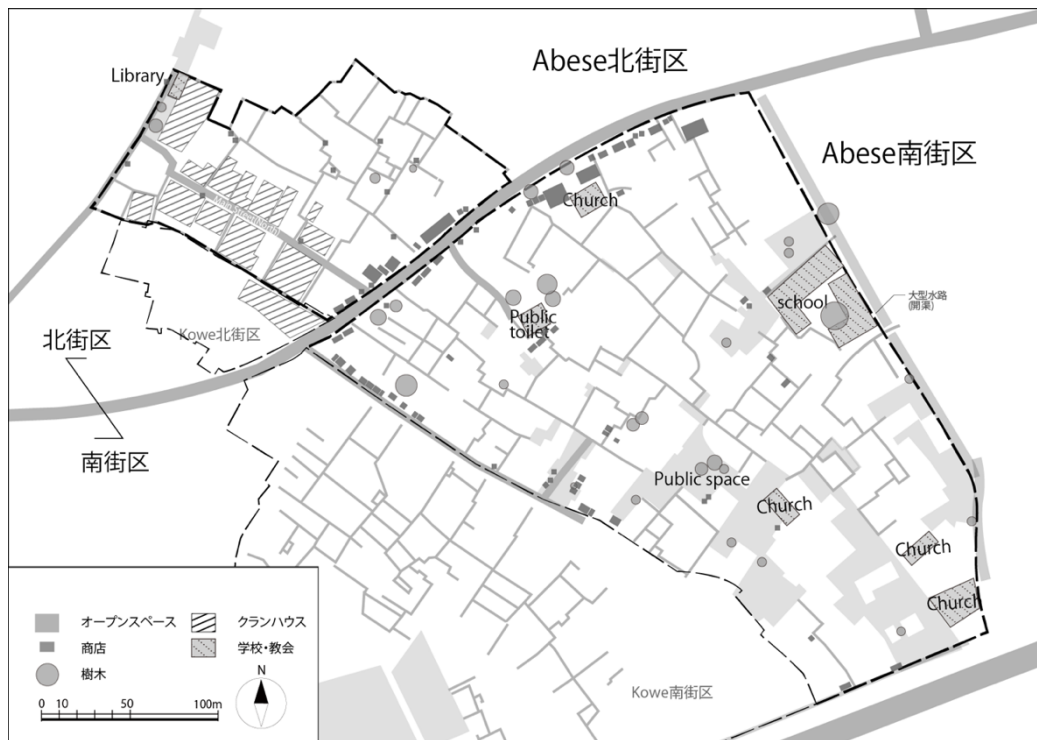


Fig.2.2.2-3 Abese 地区の地図 (出典:調査により筆者作成)

2.3 水・衛生環境からみる土着コミュニティによる地域マネジメントの仕組み

本節の流れを次に示す。地域マネジメントの核として機能してきたクランの概要と意思決定・合意形成の仕組みに関してヒアリング調査を通して明らかにした (2.3.1)。次に、フィールドワークおよびヒアリング調査により、上下水・衛生設備等の配置および処理方法を把握し、整備状況から北・南街区の特性を明らかにした (2.3.2)。また、個々の事例に関して、整備・維持管理実態を把握しそれらの結果にもとづき、水・衛生環境の整備・維持管理に関して類型化を行った (2.3.3)。

それらを踏まえて、Abese 地区における地域マネジメントの仕組みとその特徴及び成立要因から北街区・南街区の違いについて考察を行った。

2.3.1 クランの概要・合意形成の仕組み

La 地域は、Abese 地区を含む 8 つの地区で構成される。定住化が始まってから現在に至るまで、地区ごとに慣習的な組織であるクランのコミュニティごとに地区のマネジメントを行ってきた。ここでは、クランの構成とその役割について述べる。



Fig.2.3.1-1 Abese 地区クランの分布 (出典：筆者作成)

(1) 構成と役割について

クラン (父系血縁組織) は Abese 地区において地域マネジメントを行う自治組織である。Abese 地区におけるクランの組織構成を Fig.2.3.1-2 に示す。Abese 地区には 15 のクランが存在し、その長はチーフ (Chief) と呼ばれる。各クランは家長 (Head of Family)、長老 (Elders)、幹部 (Leaders)、役職のない所属メンバー (Family members) で構成される。ここでは、役割、任期に着目して各役職の概要を述べる。

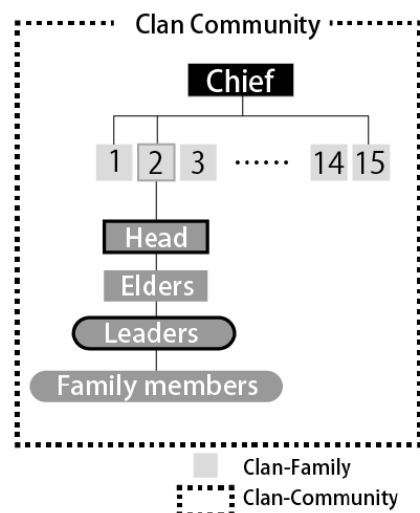


Fig.2.3.1-2 クランの組織図 (出典：筆者作成)

■家長 (Head) :

・役割:各クランの長であり,長老の中から1人選出される。自分のクランを取り仕切る役割がある。

・任期:着任してから亡くなるまで。高齢により会議に参加することが難しくなったら Caretaker (代理) を任命し, Caretaker は家長の代わりとして行動する。家長の死亡後は, Caretaker が家長を引き継ぐ場合と他の長老が引き継ぐ場合がある。



Fig.2.3.1-4 家族会議の様子

(出典:筆者撮影)

■長老 (Elders) :

・役割:年配者として意見を述べるなど,家長と共にクランを取り仕切る。

■幹部 (Leaders) :

・役割:クラン会議における各小委員会のリーダーとして自治運営の指揮をとりながら,会議では議長,秘書,会計等を担う。

・任期:2年 or 3年(各クランの規約による)次の立候補者がいない場合は,現議長が継続し引き続き任に就くことができる。

■その他(Family members) :

・役割:小委員会に所属しており幹部の指揮をもとに自治運営における役割を担う。

(2) クランによる3つの会議について

各クランは規約 (Constitution) をもち,それを基にマネジメントが行われている (Fig.2.3.1-2)。規約による所属年齢^{註9)} (18-23~70歳)になると,父親の所属するクランに登録を行うことになっており,会議への参加や積立金の支払い等の義務がある。

Abese 地区内では各クラン (家族) 単位で行われる,家族会議,長老会議と,地区単位で行われるクランズ会議という3つの会議が行われていることが明らかになった。以下,各会議について明らかになったことを記述する。ここでは,参加者,会議内容,積立金に着目して会議の概要を述べる (Table 2.3.1)。

Table 2.3.1 3つの会議の概要 (出典：筆者作成)

会議	クランズ会議	長老会議	家族会議
日時	毎週木曜日	毎週水曜日夕方	毎週日曜日の朝
場所	チーフ所属クランハウス	各クランハウス	各クランハウス
参加者	・Chief ・各クラン(15)の代表者(家長/2-3名の幹部) ・青年会や婦人会の代表者	家長 長老たち	クラン所属メンバー全員 : 家長、幹部、その他家族
報告・共有	各クラン(15)による家族会議の内容	クランズ会議の内容	長老会議とクランズ会議の内容共有
議論	Abese地区の整備・マネジメントに関する事項	家族会議の議題・伝統的な慣習や儀式に関して	クランハウスの改善・修復や家族に関する話し合い
基金	あり	なし	あり

① 家族会議 (Family meeting) : 家族単位

毎週日曜日、各クランハウスで基本的に 7:00-8:00 に行われる (Fig.2.3.1-4)。会議終了後、教会に行くためである。

参加者：クラン所属メンバー全員（家長、長老、幹部、その他所属メンバー）である。幹部が中心となって会議を取り仕切る。基本的に全員出席することになっており、遅れたら罰金を徴収するクランもある。

会議内容：①報告・共有：家長・代表者が、クランズ会議、長老会議の内容を参加者に報告し共有する。②議論：長老会議で決められた議題に基づいて、家族に関する議題（冠婚葬祭や高齢者の社会支援）やクランハウスの改善・整備等に関して意見出しを行いまたそれらに関してプランニングや決め事を行う。過去の議題としてはクランハウスの改修やトイレの整備等が挙げられる。全体の流れは以下のようになっている。

【会議の流れ】

0. Pray before meeting

1. Share the previous minute of Elders meeting by elders(共有)

2. Announcement of agenda decided Elders meeting

3. Report on contents of Clans meeting(報告)

3. Discussion(議論) : 決め事をする際、話し合いで決まらない場合は多数決を行う

積立金：クランハウスの維持管理や家族の支援等のために、積立金（以下、家族基金）の集金を行っており、所属するものは毎月 2 セディ（約 52 円）支払うことになっている^{注13}。会計が中心となり、メンバーシップカードによって支払いが管理されている。(Fig.2.3.1-5) また、クランズ基金（後述）への支払いも（20GHS/month）ここから行っている。積立金は、未納入が続くと罰金が要求されることもある。大規模改善をする場合に足りない場合は追加料金の支払いをしたり、裕福なメンバーから寄付をもらったりする。

その他：家族会議においては、委員会が存在し、冠婚葬祭、エンターテイメント、高齢者支援などの部門に分かれている。幹部が中心となり、各委員会は活動し積立金を活用しながら、運営を行っている。

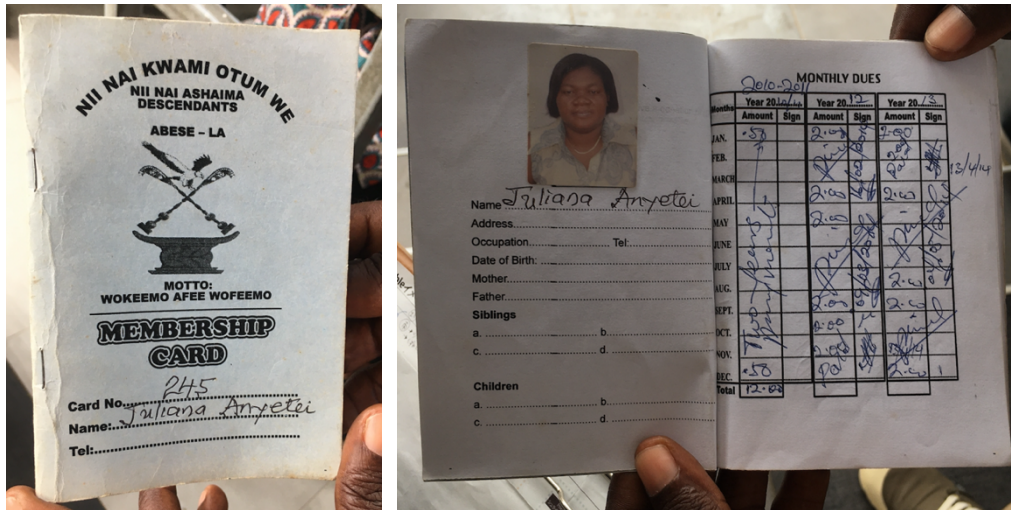


Fig.2.3.1-5 メンバーシップカード (出典：筆者撮影)



NII NAI KWAMI OTUM WE

NII NAI ASHAIMA DESCENDANTS

ABESE - LA

MOTTO: WOKEEMO AFEE WOFEEMO

CONSTITUTION AND BYE-LAWS

1. The association shall be known and called NII NAI KWAMI OTUM WE.
2. **AIMS AND OBJECTIVES**
 - (a) To foster friendly and fraternal relations among the lineage.
 - (b) To promote goodwill peace and reconciliation among the lineage.
 - (c) To enhance self help both financially and physically.
 - (d) To bring about development in the lineage house and the quarter as a whole
 - (e) To protect members from any encroachment upon their rights and freedoms.

STATUS

The association is neither political nor religious, simply a benevolent society

3. Motto: WOKEEMO AFEE WOFEEMO.

4. Membership

- (a) Open to all patrilineal and matrilineal descendants of the lineage.
- (b) Obligatory membership commences on the attainment of age 23
- (c) Membership attracts the payment of registration fee of Gh¢ 5. 00 and monthly dues contribution of Gh¢ 2.00 and any other levies that shall be decided by the association sitting in committee. All fees and other contributions are not refundable.

NB: These shall be subjected to review bi-annually as the case may be.

The aged, the sick and the physically challenged 'shall not be exempted from active membership.

EXEMPTIONS

- (b) However, the aged,(70 years and above) sick and the physically challenged shall be exempted from dues

OBLIGATIONS

1. Officers:

- (a) The executives shall consist of the following;

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1. Chairman & Vice | 4. Treasurer |
| 2. 2 Trustees | 5. Financial |
| 3. Secretary/Assistant | 6. Organizing Secretary /Porter |

- (b) The association shall have the following as signatories to its banking account.

- I. Financial Secretary
- ii. 2 Trustees

Any two including financial secretary shall operate the account at a time.

- (c) The association shall have an advisory council of elders, members, patrons.

TERM OF OFFICE

- (a) Office term is (3) calendars years
- (b) Re-election permitted for a second term only.

COUNCIL OF ELDERS

There shall be constituted an elder's council made up of representatives from the lineage lines of the family;

i.	Mensah Kokrolonto	Lineage	3
ii.	Anang Gonti	Lineage	3
iii.	Tei Etenaa	Lineage	3
iv.	Nii Maale	Lineage	3

Fig.2.3.1-3 クラン no.9 (NII NAI KWAMI OTUM WE) の規約 (出典:筆者撮影)

② 長老会議 (Elders meeting) : 家族単位

毎週水曜日午後に各クランハウスで行われる。

参加者：家長，長老である。

会議内容：①報告・共有：家長が，クランズ会議の内容を長老に報告する。②議論：主に，家族会議の議題を決定する。また伝統的な慣習・儀式の決め事も行う場合がある。

積立金：この会議における基金は存在しない。

③ クランズ会議 (Clans meeting) : 地区単位

毎週木曜日にチーフの所属するクランハウスで行われる。

参加者：チーフ，各クランの代表者（家長／幹部数人），青年会や婦人会の代表者である。青年会や婦人会^{注10)}の代表者が参加する理由としては，家長や長老・幹部は，基本的に中年以上の男性で構成されるため，若者や女性の意見を取り入れるためであるとのことであった。

会議内容：①報告・共有：各クラン代表者が，家族会議の内容を報告し，共有を行う。②議論：Abese 地区の整備・マネジメントに関する問題や提案やそれに対する意見出しを行う。またそれらに関してプランニングや決め事を行う。過去の議題としては下水道整備や図書館建設に関する事項などが挙げられる。

積立金：Abese 地区の整備・維持管理，また他地区との交流のための交際費として，積立金（以下，クランズ基金）の徴収を行っており，各クラン毎月 20 セディ（約 520 円）ずつを支払うことになっている^{注12)}。

また，ヒアリングによると，Abese 地区単位で行われている積立金として，クランズ基金の他に「AACIF (Abese-Adonten-Capital-Investment-Fund)」という積立金が行われていることが明らかになった。この積立金は，5 年前に始まったという。導入にあたり，クランズ会議で発案され，各家族会議で共有がなされ，さらに Abese 全体でフォーラムを開き説明会が行われ，合意形成がなされたとのことであった。以下，概要を記述する。

【AACIF】

目的：①霊救車を買うため（業者依頼は費用が高いため，Abese 専用車を購入したい）②女性の仕事訓練のため。集金方法：死亡者のいる Clan は（亡くなった人数）×（110GHS）を AACIF に寄付。

（2）意思決定・合意形成の仕組み

各会議の議題に着目すると，扱う整備・改善の規模によって意思決定主体（クランズ会議：地区単位／家族会議：家族単位）が異なることがわかった。一方，長老会議では伝統的慣習・

儀式に関する意思決定であり、整備・改善に関する意思決定は行われなかったことがわかった。また、意思決定に関して、各会議において全員合意もしくは多数決で行われることがヒアリングによりわかった。これは、定住化当時のチーフの元でコミュニティ全員合意の上、土地取引を行うという慣習が今も根強く残っていると言える。

(3) 3つの会議の関係性

各会議の参加者に着目して3つの会議の関係性を示したものが Fig.2.3.1-6 である。各クランの家長はすべての会議に参加することになっていることから、家長を中心として Abese コミュニティ全体で情報共有・合意形成がなされる仕組みが分かった。

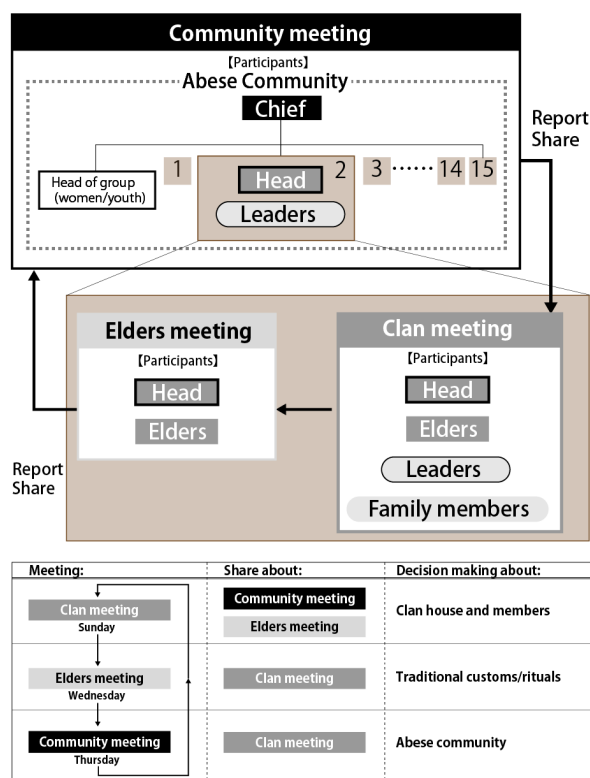


Fig.2.3.1-6 参加者からみる3つの会議の関係性 (出典：筆者作成)

2.3.2 Abese 地区における水・衛生環境の整備実態

本節では、水・衛生環境に関する下水道、浴室、トイレ、ウォータータンク、水栓の各5項目について、上下水道の処理・供給方法、各衛生設備の分布の把握を行い、北街区、南街区それぞれについて整備実態を明らかにする。

本調査は、2018年10月27日～11月8日(計7名)、2019年10月30日～11月9日(計7名)の2期にわたり計13名で行った。非正規市街地であることから行政により地図が作成されていないため、通行可能な道や空間を把握し、まず地図の作成を行った。上下水道の仕組みおよび水・衛生設備の分布に関して踏査およびヒアリング調査を実施した。調査は外部からの観測調査により行うため、クランハウスや個人住居内部に存在するものは扱っていない。

(1) 下水処理の仕組み

■下水道の特徴

各下水道は、以下の6種に分類できる(Fig.2.3.2- i)^{注15)}。①開渠-整備型(S-1)は、コンクリートブロックもしくは石で形成され、地面に露出しているものである。臭気の蔓延やゴミの堆積が観測された。②開渠-整備+フタ型(S-2)は、S-1にコンクリートの塊で開口が塞がれたものである。③開渠-溝型(S-3)は、地面の窪みに水が流れる施工されていない排水経路である。④開渠-共同水路型(S-4)は、S-1に類似しているが、1m以上の深さおよび幅員を有し、適宜、往來のための橋が架けられている。⑤暗渠-下水管(S-5)は、配管パイプが地面に埋設されているものである。道上に突起する点検口を結ぶことで経路を明らかにした。⑥地上下水管(S-6)は、配管パイプが地上に露出したものである。開渠下水道には雑排水が流れており、暗渠下水道は雑排水用と汚水用の下水管が存在した。以下、区別が必要な場合は、下水道(雑排水)、下水道(汚水)と表記する。

■トイレにおける下水処理方法

トイレの汚水処理の関連施設・設備として、下水道、排水管、セプティックタンク、汚水槽、薬剤処理用タンクがあり、それらの有無や接続形態により、処理方法は以下の4つに分類できる。(Fig.2.3.2- ii)。①セプティックタンク型(T-1)は、各トイレからの排水管をひとつの下水道に接続し、セプティックタンクに集めるタイプである。②共同汚水槽型(T-2)は、各トイレからの排水管をひとつの下水道に接続して共同汚水槽に集め、汚水が一定量汚水槽に貯まり次第、吸上車(バキュームカー)で排出するタイプである。共同汚水槽の設置場所は、車両通

行可能である必要があるが、各トイレは道路に面している必要はなく、比較的小さなスペースで設置可能である。汚水が溜まる度に、業者による管理が必要である。③汚水槽型 (T-3) は、トイレから排水管で直接汚水槽に接続しており、各トイレで処理を行うタイプである。T-2 と同様汚水が溜まる度に、業者により吸上車で排出する必要がある注 16)。汚水槽は容量が大きいため設置に広い面積が必要である。また各トイレで、吸上車による排出が必要であるため、道路沿いや車が入れる場所にのみ設置できる。以下、区別が必要な場合は、T-2 の場合を共同汚水槽、T-3 を個別汚水槽と表記する。④薬剤処理型(T-4)は、汚水に薬剤を投入し、砂状にした後排出する仕組みである。各トイレで処理を行い、汚水槽型(T-3)と比較して小さなスペースに設置可能である。

■浴室における排水処理方法

浴室の排水処理の関連施設・設備として下水道、排水管、開渠下水道があり、排水処理方法は 3 つに分類できる (Fig.2.3.2- iii) 注 17,18)。また、開渠下水道は最終的に海に接続しており雑排水を放流していた。①下水道連結型(B-1)は、各浴室から排水管をひとつの下水道に接続し、開渠下水道へ流すタイプである。複数の浴室排水をまとめて処理を行う。②下水道直結型(B-2)は、浴室から排水管で直接開渠下水道に流す。③バケツ運搬型(B-3)は、浴室の足元にバケツを設置し、使用後に開渠下水道まで雑排水を手運びするタイプである。

(2) 上水供給の仕組み

水供給は、ガーナ全体の水道システムを管理する国家所有の公益事業会社 Ghana Water Company Limited (以下 GWCL) が行っている注 19)。本地区では、GWCL による公共水道管に水栓、ウォータータンクを接続することで供給をしており、2 種類に分類できる (Fig.2.3.2- iv)。ただし、ここでの上水は炊事・洗濯・お風呂等の生活用水としての利用がメインであり飲み水としては利用されない注 20)。

(a) 水栓

水栓は GWCL による公共水道管に接続しており、蛇口を捻ると水がでる仕組みになっている。水道メーターがついており、水道料金が計測されている。

(b) ウォータータンク

ウォータータンクも基本的に水栓と同様、公共水道管に接続しており注 21)、蛇口を捻ると水がでる仕組みである(W-2)。水栓との違いは、常にタンクの中に貯水している状態であるため、貯水槽としての役割をもつ点である。点検等で断水した際も一定期間利用できる。

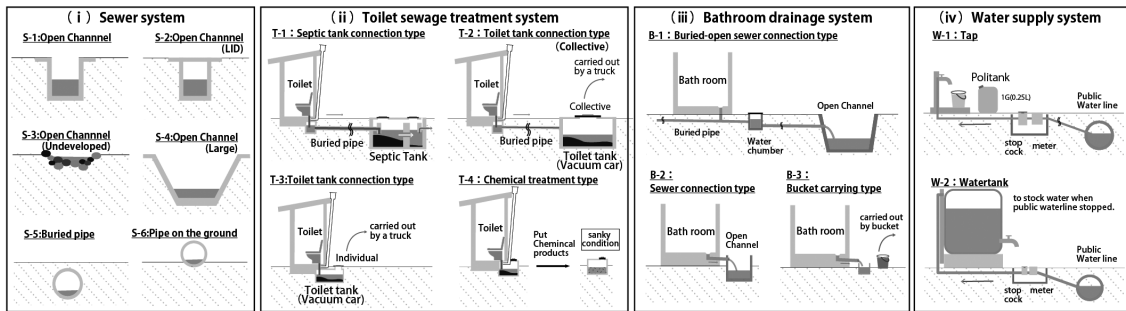


Fig.2.3.2-1 上下水道の仕組み

(出典：筆者作成)

2.3.3 水・衛生環境の分布について

水衛生環境に関する各 5 項目に関する分布を Fig.2.3.3 に示す。以下、前述の上下水道の仕組み(Fig.2.3.2-1)と合わせて整備実態に関する考察を行い、北街区・南街区の特徴を把握する。

(1) 下水道

本地区には、緩やかな高低差を利用し南北方向に流れる暗渠下水道が北街区内に 2 本 (Fig.2.3.3-I:a,b) 南街区内に 1 本(d)存在し、開渠下水道が北街区南側の地区境界に 1 本(c)、南街区の地区境界(e,f,g,一部未整備) に存在する。

北街区の下水道 a,b はそれぞれクランおよび周辺住民の共同で整備されており、いずれも暗渠であるため衛生環境が比較的良好であった。クランにより整備された下水道 a は、雑排水用 (2007 年整備) と汚水用 (2014 年整備) の計 2 本が埋設されていることが明らかになった。南街区の下水道 d は雑排水用であり、周辺住民の共同で整備されたが、南部の空き地に垂れ流しになっており施工精度は極めて低い。南街区の南部は特に下水道が未整備であった。また全ての開渠下水道 c,e,f,g は、行政が整備しており比較的施工精度が高いが、周辺は臭気の蔓延およびゴミの堆積が観測された。

6.3.2. 汚水槽・セプティックタンク

北街区において セプティックタンクおよび共同汚水槽が各 1 つずつ、南街区において個別汚水槽が 16 箇所存在する (Fig.2.3.2-I)。北街区は 2 本の暗渠下水道 (a,b) それぞれにセプティックタンクと汚水槽が整備されていることから、計画的に汚水処理が行われているといえる。一方、南街区は個別汚水槽が各所に点在する。これは下水道が十分に整備されていないことが要因であると考えられる。

(2) トイレ

外部から観測可能なトイレは北街区に 9 個、南街区に 44 個(内、公衆トイレ 1 箇所)存在する(Fig.2.3.3- I)。前述したように、北街区は 2 本の暗渠下水道それぞれにセプティックタンクと汚水槽が整備されているため、セプティックタンク型 (Fig.2.3.2- ii:T-1) および共同汚水槽型 (Fig.2.3.2- ii:T-2) のトイレが分布していると考えられる。南街区は、車両通行可能エリアに点在する汚水槽付近のトイレは個別汚水槽型 (Fig.4- ii:T-3)、それ以外は薬剤処理型(Fig.4- ii:T-4)であると推測される。一方、公衆トイレに関しては、大規模な汚水槽があることから汚水槽型であることがわかった。

(3) 浴室

外部から観測可能な浴室は北街区に 28 個、南街区に 76 個存在する(Fig.2.3.3- I)。北街区は、クランハウスの立ち並ぶ主要街路沿いに暗渠下水道 a (雑排水) が整備されているため、

その周辺は下水道連結型(Fig.2.3.2- iii:B-1)の浴室が多いと言える。南街区は、開渠下水道 e 周辺の浴室に着目すると、下水道直結型(Fig.2.3.2- iii:B-2)が多く観測された。また、開渠下水道 f に向かう埋設配管が観測されることから、周辺の浴室は下水道直結型(Fig.2.3.2- iii:B-2)である。下水道 d (雑排水) 周辺の浴室は、下水道連結型 (Fig.2.3.2- iii:B-1) であるが、集められた雑排水は南部の空き地に垂れ流しになっていた。一方、下水経路に関係なく点在する浴室は、バケツ運搬型(Fig.2.3.2- iii:B-1)であった。

6.3.5. 上水道

本地区では公共水道本管が北街区・南街区の間を貫く道路と南街区南側道路の下に埋設されていることが明らかになった。また、両街区の内部にも公共上水道が普及していることがわかった^{注19)}。

(4) 水栓

外部から観測可能な水栓は、北街区に 13 個、南街区に 53 個存在する(Fig.2.3.3- II)。北街区では、水栓が主要街路沿いに多く分布している一方で、南街区の分布に大きな特徴は見られなかった。

(5) ウォータータンク

外部から観測可能な水栓は、北街区に 5 個、南街区に 15 個存在する(Fig.2.3.3- II)。分布に関しては水栓と同様の傾向が見られた。さらに、ウォータータンクの導入に関して、ヒアリングを行った。20 年程度前は 2 週間~ 1 ヶ月程度断水することもあった^{注22)}ため、Abese 地区住民は、共同もしくは個人で普段利用かつ貯水機能をもつウォータータンクの導入が進んだということが明らかになった。

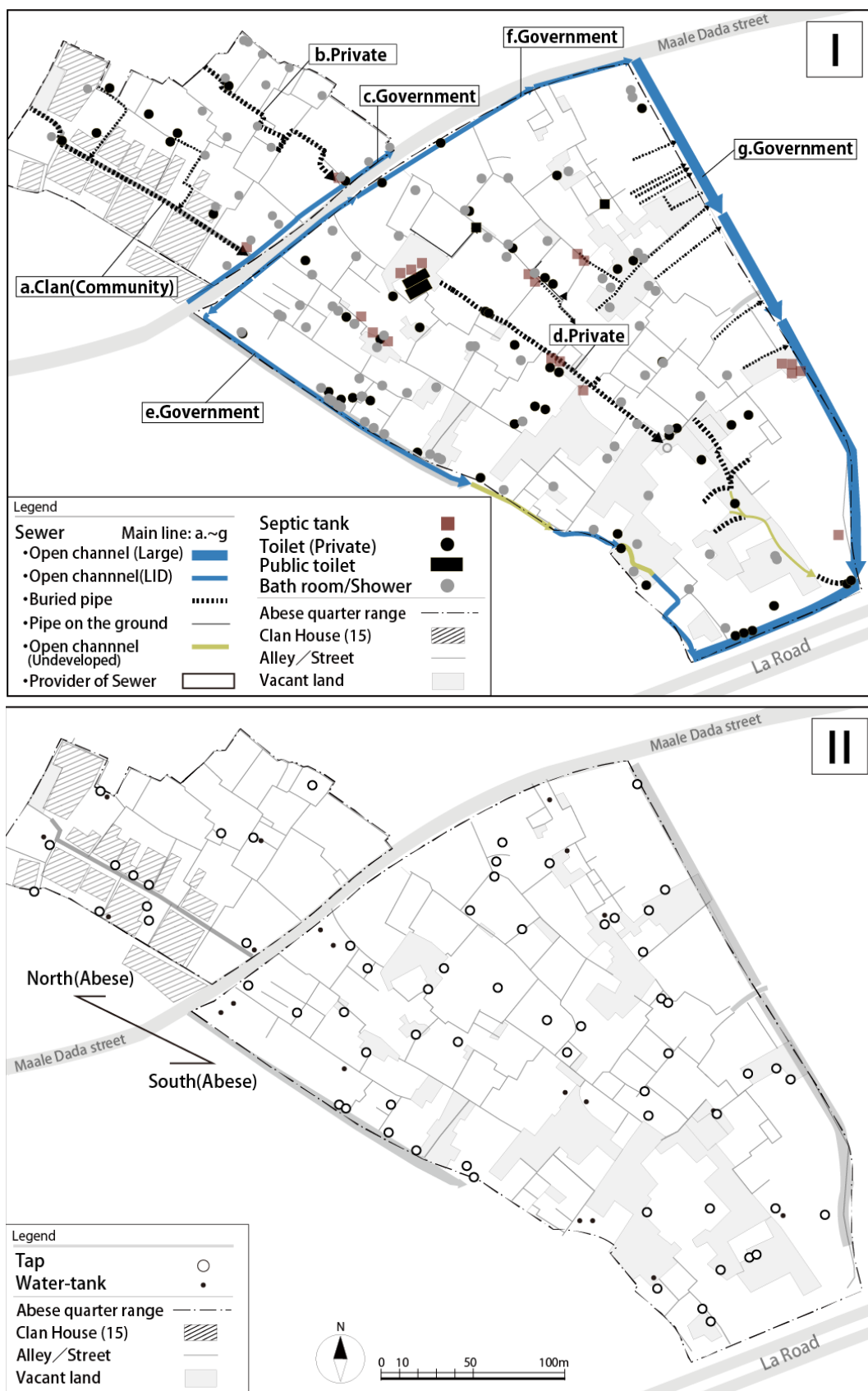


Fig.2.3.3 Abese 地区の水・衛生環境の分布 (出典：筆者作成)

2.3.4 分析：北・南街区の整備状況の違い

調査結果を踏まえ、以下の2つの観点をもとに下水処理および水供給方法を分析し Fig.2.3.4 に示した。

■基幹的施設・末端的施設

：整備に技術と費用を要し、多数の人が利用する施設を「基幹的設備：Main」（下水道／上水道／セプティックタンク／共同汚水槽等）、技術・費用が比較的安く、各世帯（各クラン）が利用する施設を「末端的施設: Terminal」（トイレ／浴室／排水管／水栓／ウォータータンク等）として区別した。

■共同型・個別型

：末端的施設を複数まとめて処理・供給する場合「共同型：Collective」単体の場合を「個別型：Individual」とした。Fig.2.3.4 に示したように、T-1,T-2/B-1/W-1,2 は末端的施設に基幹的施設の整備を伴う共同型の処理・供給方法であり、T-3,T-4/B-2,B-3 は、末端的施設のみ個別型の方法であることがわかる。

これらを踏まえ、北・南街区の整備状況を比較する。

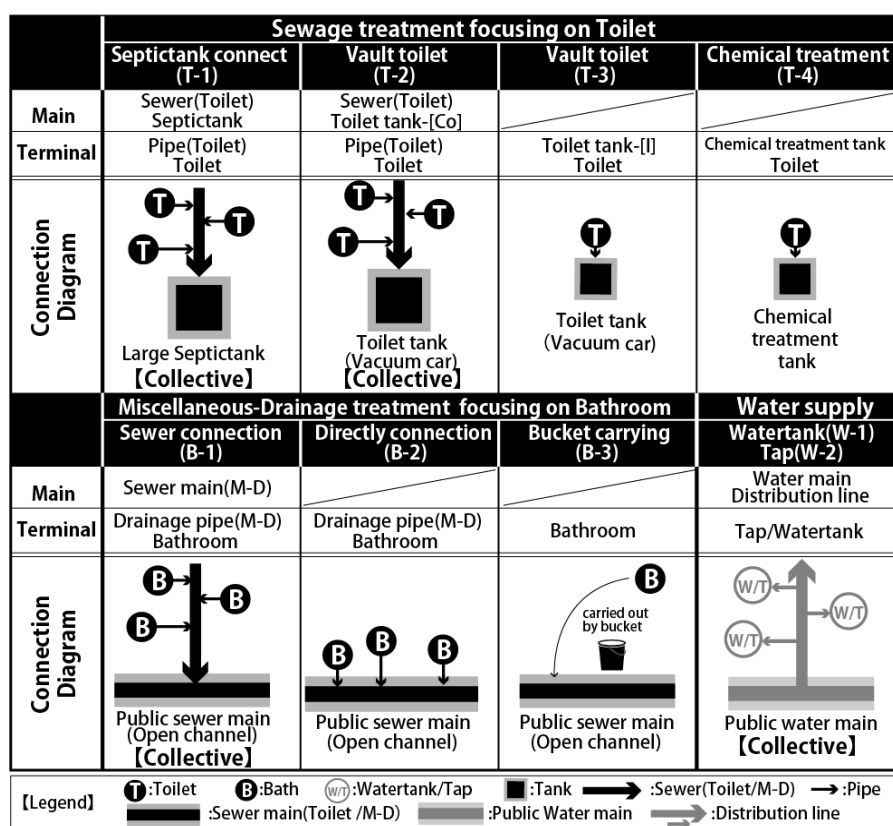


Fig.2.3.4 上下水道の分類ダイアグラム (出典：筆者作成)

(1) 汚水処理方法とトイレの整備状況

北街区は、地区内を貫通する2本の街路の下に暗渠下水道（汚水）が埋設され、各々にセプティックタンク、共同汚水槽という基幹的施設の整備が進んでいることから、大半で共同型の汚水処理（T-1,2）が行われているという特徴がある。一方南街区は、汚水処理に関する基幹的施設が未整備であり、大半は個別型の処理なされていた。特に車両通行可能エリアでは汚水槽型(T-3)、不可能エリアでは薬剤処理型(T-4)など、立地条件が処理方法の違いに現れていた。

(2) 雑排水処理方法と浴室等の整備状況

北街区は、暗渠下水道（雑排水）が主要街路沿いに埋設されており、周辺の浴室からの雑排水をまとめて処理(B-1)する共同型の処理が行われているという特徴がある。南街区は、周辺住民による共同型の下水道(B-1)を除き、全域的に基幹的施設が未整備であり、個別型の処理であった。個別型は、開渠下水道と近接している場合は下水道直結型(B-2)、離れている場合はバケツ運搬型(B-3)が観測され、開渠下水道と浴室の距離によって処理方法の違いが現れた。

(3) 上水供給と水栓・ウォータータンクの整備状況

上水の供給方法に、南北の大きな違いは見られず、公共上水道の配管にウォータータンクや水栓を接続する共同型(W-1,2)であった。一方両街区で公共上水道の行き届いてないエリアも見られた。

(4) 本項のまとめ

以上を踏まえ、水・衛生環境における北・南街区の違いは、下水処理（汚水／雑排水）における基幹的施設の有無に現れていると言える。特に、北街区のクランハウスの立ち並ぶ主要街路周辺は、下水および雑排水処理の基幹的施設が整備されており、それらを軸として共同型の処理がなされている。南街区は一部共同型の処理が見られるもの大半が個別型であり、開渠下水道との距離や車両通行などの立地条件が処理方法の違いを生んでいた。

2.3.5 Abese 地区における水・衛生環境の整備プロセス・維持管理

本項では、前項 2.4.4 と同様の施設・設備について、整備プロセス（発意主体／資金源／業者・従事者）、利用形態（共同／個人）および維持管理形態（管理主体／利用のルール）の把握を行った。

3名の家長と1名の有識者にヒアリングを行った結果を Table. に示す。北街区では14種類、南街区は9種類、全23種類の整備が確認された^{注23)}。ここで「資金源」は、資材費・維持費・修繕費・人件費等を含む整備・維持管理に関する費用を指す。資金が不足している場合はその都度追加徴収を行う、または知人・第三者に寄付を募ることで賄うことが一般的であるとのことだった^{注24)}。本文中では、主な資金源となったものを記述した。また、以下よりクラン主体の整備を、クラン-家族単位（家族会議）とクラン-地区単位（クランズ会議）に区別し、個人主体の整備を、複数世帯による共同整備の場合と住民個人（1世帯）による整備を区別した。

ここでは特徴的な事例に着目し、Abese 地区における整備プロセスおよび維持管理の仕組みを明らかにする。◇内は各項目にける全整備の北・南街区の内訳を示し、No. は Table.2.4.5 の通し番号を示す。

(1) 汚水処理施設の整備プロセスと維持管理

汚水処理に関する公共事業は、南街区に1カ所存在する公衆トイレを除いて、Abese 地区全域で確認されなかった。

①基幹的施設：下水道（汚水）/セプティックタンク/共同汚水槽

Abese 地区における全2箇所〈北：2，南：0〉の下水道（汚水）はそれぞれクラン、複数世帯により整備された。

暗渠下水道（汚水）およびセプティックタンク(No.1)は、クランズ会議で発意された。計画・設計は、クラン・コミュニティに所属し、土木・建設に関する専門知識をもつ有識者 E 氏が行ったことがヒアリングにより明らかになった。一方、資金は各クランの共同出資であるクランズ基金と La 地区出身の国会議員による寄付金で賄われたことがわかった。維持管理については、E 氏により定期的に点検がなされ、メンテナンスに労働力が必要な場合は、クラン・コミュニティの若者もしくはその知人を雇用し、E 氏の指導のもと整備が行われる。修理に必要な費用や労働者への給与はクランズ基金や各クランからの追加徴収で賄われることが明らかになった。

上記から、クランによる整備・維持管理において有識者 E 氏が重要な役割を果たしていることがわかってきた（以下、キーパーソンとする）。普段は土木工事の現場監督として働くキーパ

ーソンは、チーフの任命により Abese 地区の建設・インフラ整備関連のマネジメント^{注25)}を担っていることが明らかになった。

暗渠下水道（汚水）と共同汚水槽（No.2）は、複数世帯の協力により住民主体で発意され、共同出資で整備されたことがわかった。一方で維持管理主体の存在は明らかにならなかった。

②末端的施設：トイレ・個別汚水槽

観測された全 53 個〈北：9，南：44〉のトイレは、北街区はクラン主体（No.3）と住民個人（No.4）により、南街区はすべて住民個人（No.6）で整備されたことが明らかになった。また、全 16 個〈北：0，南：16〉の個別汚水槽は、住民個人（No.5）により整備がなされた。クラン主体（No.3）のトイレは、家族会議で発意され、その整備費は家族基金（家族内の支援を含む）で賄われたことが明らかになった。利用について、クランハウスに所属するメンバーは無料で、利用料金を支払えば誰でも使えるように貸し出しをしていることがわかった。維持管理は、家族会議で任命された Caretaker が担当しており、売店の店番や家事をしながらトイレ近くに常駐し、利用料の徴収や清掃等を行っていた^{注26)}。

③公衆トイレ

南街区に公衆トイレが 1 事例存在し、行政により 40 年以上前に整備されたことが分かった（No.7）。維持管理も行政（LaDMA）が行っており、トイレの利用料金は 1 回 0.5 セディ（約 13 円）で、入口に設置された売店で支払いを行う^{注27)}。

（2）雑排水処理施設の整備プロセスと維持管理

前項にて前述したように、雑排水処理に関する公共事業は、北街区南側境界に 1 本、南街区境界 4 辺（一部未整備）に開渠下水道が確認されたが、各地区内への整備はみられない。

①基幹的施設：下水道（雑排水）

住民が整備した下水道（雑排水）は北街区の暗渠下水道の 1 事例（No.8）のみで、南街区では確認されなかった。事例 No.8 は、クランズ会議で発意、クランズ基金により整備が行われた。整備時は労働力として、クラン・コミュニティの若者もしくはその知人を雇用したとのことであった。維持管理については、下水道（汚水）と同様、キーパーソンによる定期点検がなされていた。

②末端的施設：浴室

観測された全 104 個〈北：28，南：76〉の浴室は、北街区の 2 個がクラン主体（No.10）、その他は個人（No.11,12,15）で整備されたことが分かった。クラン主体（No.10）の浴室は、トイレと同様、各クランの家族会議で発意され、整備費は家族基金（家族内の支援を含む）で賄わ

れたことが明らかになった。利用・維持管理についてもトイレと同様であり、任命された Caretaker が運営していた。^{注28)}

住民で整備された浴室のうち北街区の3箇所(No.11)は、個人所有でありながら貸し出し(共同利用)を行っていた。クラン所有と同様、所有者は浴室に常駐し、利用料の徴収や清掃等を行っていた。

(3) 上水施設の整備プロセスと維持管理

①基幹的施設：公共上水道

上水に関しては、両街区において地区内部にも公共上水道(No.16,21)が普及していた。

②末端的施設：水栓

観測された66個〈北:13, 南:53〉の水栓は、北街区はクラン主体(No.17)と住民個人(No.18)により、南街区はすべて住民個人(No.22)で整備されたことが分かった。トイレや浴室の整備と同様、クラン主体のものは家族会議で発意され、その整備費は家族基金(家族内の支援を含む)で賄われた。一方、整備および点検等の管理は行政サービス機関 GWCL が行う。使用料金については、月1回メーターごとに使用した分だけ請求がなされる。利用形態はクラン所有のもの(No.17)、住民個人所有のもの(No.18, 22)の両者において共同利用であり、所有者は水栓を持たない住民に対して水の販売を行っている。一般的に1ガロン(0.25L)を0.5セディ(約13円)で販売していた。維持管理については浴室やトイレと同様、クラン所有のものは家族会議で任命された Caretaker が、個人所有のものは所有者が、販売および水栓周りの清掃等を行うことが分かった。

③末端的施設：ウォータータンク

観測された20個〈北:5, 南:15〉のウォータータンクは、北街区の2個がクラン主体(No.19)、その他は住民個人もしくは複数世帯(No.20,23)で整備されたことがわかった。水栓と同様、整備および点検等の管理は GWCL が行う。利用形態も水栓同様、共同利用であり所有者は水栓を持たない住民に対して販売を行う。一方、断水の際は貯水機能をもつウォータータンクのみ使用できるため、所有者は、普段より値上げして販売するとのことだった。

Table2.3.5 水・衛生環境の整備・維持管理 (出典：筆者作成)

Classification	No.	Category	Numbers of case	Construction / Maintenance			Ownership - Use (Share/Private)		Management	
				Original proposer	Funding source	Workers / Company	Own	User		
Sewage treatment	North	Main Pvt. 1	Sewer main	1	Clans meeting	Clanfund+Donation	Hired familiar youth	S S	Connected	Expert(Clan) ※5
		Main Pvt. 2	Septic tank-(Co)	1	Private-Collective	Private-Collective	Hired familiar youth	S S	Connected	※6
	Terminal	3	Toilet	9 ※1	Family meeting	Family-fund	Hired familiar youth	S S	Family members / Everyone	Family-Caretaker
		4	Toilet tank-(Co)	1	Private	Private	Hired familiar youth	P P	Individual	Owner
		5	Toilet tank-(I)	16	Private	Private	Hired familiar youth	P P	Connected	Owner
	South	6	Toilet	44	Private	Private	Hired familiar youth	P P	Individual	Owner
		※3 Pub. 7	Public Toilet	1	Government (Public works)			G S	Everyone (Usage fee)	LaDMA
Miscellaneous -Drainage	North	Main Pub. 8	Open channel sewer(M-D)	1	Government (Public works)			G S	Connected	※6
		Main Pvt. 9	Underdrain sewer(M-D)	1	Clans meeting	Clans fund	Hired familiar youth	S S	Connected	Expert(Clan) ※5
	Terminal	10	Bath /Shower	2	Family meeting	Family-fund	Hired familiar youth	S S	Family members / Everyone(Usage fee)	Family-Caretaker
		11	Bath /Shower	3	Private	Private	Hired familiar youth	P S	Everyone(Usage fee)	Owner
		12	Bath /Shower	23	Private	Private	Hired familiar youth	P P	Individual	Owner
	South	Main Pub. 13	Open channel	4 ※2	Government (Public works)			G S	Connected	※6
		Main Pvt. 14	Underdrain sewer(M-D)	1	Private-Collective	Private-Collective	Hired familiar youth	S S	Connected	※6
	Terminal	15	Bath /Shower	76	Private	Private	Hired familiar youth	P P	Individual	Owner
		16	Bath /Shower	※4	GWCL (Public works)			G S	Connected	GWCL
	Water supply	North	Main Pub. 17	Public water main	※4	GWCL (Public works)			G S	Connected
Main Pvt. 18			Tap	13 ※1	Family meeting	Family-fund	GWCL	S S	Family members / Everyone(Usage fee)	Family-Caretaker
Terminal		19	Tap	2	Private	Private	GWCL	P S	Individual / Everyone(Usage fee)	Owner
		20	Watertank	2	Family meeting	Family-fund	GWCL	S S	Family members / Everyone(Usage fee)	Family-Caretaker
		21	Watertank	3	Private	Private	GWCL	P S	Individual / Everyone(Usage fee)	Owner
South		Main Pub. 22	Public water main	※4	GWCL (Public works)			G S	Connected	GWCL
		Main Pvt. 23	Tap	53	Private	Private	GWCL	P S	Individual / Everyone(Usage fee)	Owner
Terminal	23	Watertank	15	Private	Private	GWCL	P S	Individual / Everyone(Usage fee)	Owner	

【Legend】Pvt.=Private Construction / Pub.=Public works (Co)=Collective / (I)=Individual (M-D)=Miscellaneous-Drainage S=Sharing, P=Private, G=Government

【Note】(※1)The classification is not clear.(※2)It is located at the boundary of each district and does not exist inside. (※3)Main and Terminal (※4)Numbers are unclear.

(※5) A person who has expertise in construction and civil engineering and belongs to the community. (※6)Not clear.

2.3.6 水・衛生環境における地域マネジメント

(1) 分析：水・衛生環境における地域マネジメントの類型化

2.3.5 節から、水・衛生環境における地域マネジメントの指標として、発意主体（会議）／資金源／整備・メンテナンス主体／維持管理主体に着目すると、行政、クランズ-地区単位（クランズ会議）、クラン-家族単位（家族会議）、複数世帯、個人、第3者という6つの主体が存在する。これらを Abese 地区内・外に分類した時、「Abese 地区内：クランズ-地区単位、クラン-家族単位、複数世帯、個人」と「Abese 地区外：行政、第3者」に区分できる^{注29)} (Table2.3.6)。上記を踏まえ、Abese 地区で行われてきた整備・維持管理を、計画（発意）から整備、維持管理という一連のプロセスとして類型化を行うと Abese 地区における地域マネジメントは、(A) クラントタイプ (B) 個人-複数世帯タイプ (C) 個人-1世帯タイプ (D) 公共事業タイプの4タイプ、6パターンで区分される(Fig.2.3.6:(A)-(D))。

(A) クラントタイプ：パターン①

基幹的施設はクランズ-地区単位、末端的施設はクラン-家族単位が主体で計画から整備、維持管理までなされているタイプ。下水道等の基幹的施設はクランズ会議で発意、クランズ基金で整備された共同整備であり、トイレや浴室などの末端的施設は家族会議で発意、家族基金により整備される。維持管理については、基幹的施設は、専門知識をもつキーパーソンが定期点検を行い、トイレや浴室、水栓・ウォータータンクなどの末端的施設は各クランの Caretaker が清掃や貸し出しなどの管理および運営を行う。また、両整備においてクランズ基金や家族基金が足りない場合は、その都度知人・第3者のサポートを募ることで資金を調達して賄う。

(B) 個人-複数世帯タイプ：パターン②

基幹的施設は複数世帯、末端的施設は各世帯が主体で整備がなされているタイプ。維持管理主体の存在については、判然としなかった。

(C) 個人-1世帯タイプ：パターン③

基幹的施設が未整備であり、各世帯により末端的施設のみが整備されているタイプ。

(D) 公共事業タイプ：パターン④,⑤,⑥

パターン④：行政により計画から整備、維持管理までなされるタイプである。公共トイレのみで見られた。

パターン⑤：上水サービスにおいて、基幹的施設である公共上水道の主幹および支線の整備・維持管理は、公共事業として行政・GWCL が行い、末端的施設であるウォータータンクや水栓

の管理は住民よりになされるタイプである。このパターンはクラン主体の場合と個人主体の場合が存在した。

パターン⑥：行政により基幹的施設のみ計画から整備までなされたタイプである。地区境界に整備された開渠下水道が該当する。維持管理の様子はみられなかった。

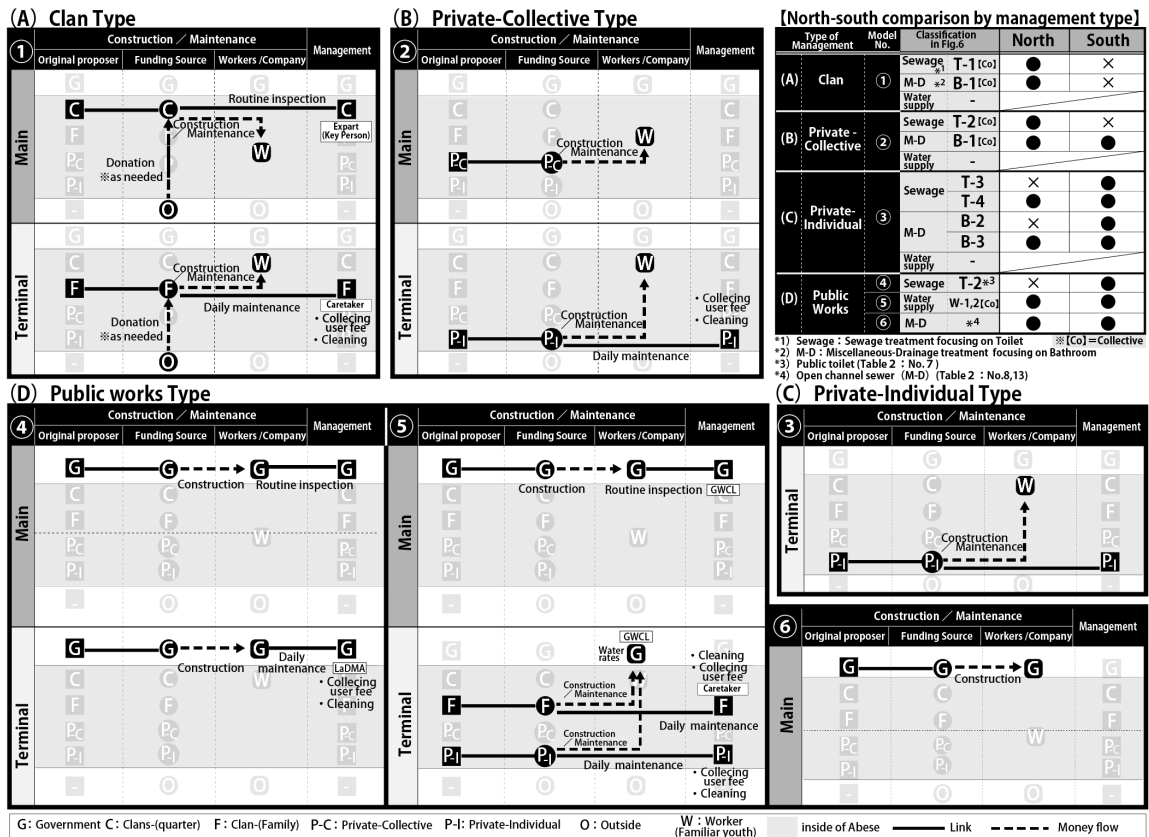


Fig. 2.3.6 Abese 地区における水・衛生環境における地域マネジメント (出典：筆者作成)

(2) 分析結果：マネジメントタイプによる北・南街区の比較

本節では、下水処理および上水供給方法 (Fig.6) をマネジメントタイプで分類することで、北・南街区を比較する (Fig. 2.3.6：右上)。「(A)クラントタイプ」は、セプティックタンク型 (T-1) や下水道連結型 (B-1) など共同型の処理方法であった。これは北街区のみで見られ、主要街路沿いの整備が該当する。「(B)個人-複数世帯タイプ」は、汚水処理は共同汚水槽型 (T-2)、雑排水処理は下水道連結型(B-1)が該当する。前者は北街区のみ、後者は両街区において見られた。これらは共同型であるが、維持管理主体の存在は観測されなかった。「(C) 個人-1世帯タイプ」は、汚水槽型 (T-3)、薬剤処理型(T-4)、下水道直結型(B-2)やバケツ運搬型(B-3)が該当し、個別型の処理方法であった。これらは両街区で見られ、特に南街区で多く見られた。個人に委ねられていることから、限られた費用や技術によって、場当たりの整備がなされていること、また立地条件が整備状況に影響するなどの特徴がある。また、(A)-(C)は、計画から整備・維持管理まで、基本的に Abese 地区内でなされており、住民同士のつながりや慣習的なルールに基づき運営を行う「地区内運営」であるという特徴があった。

一方、公共サービスを活用した「(D) 公共事業タイプ」も存在し、上水サービスは公共機関 (GWCL) により整備がなされていたが、末端的施設 (水栓やウォータータンク) においては、(A)-(C)と同様、Caretaker や所有者による慣習的なルールに基づき運用されていた。

これらを踏まえると、Abese 地区における地域マネジメントは、慣習的な相互扶助に基づき Abese 地区内で整備・運営を行う、自律性の高い「地区内運営」を軸としつつ、必要に応じて第3者や行政等の支援を活用するなど状況に応じたマネジメントであると言える。

Table.2.3.6 主体の Abese 地区内・外の分類 (出典：筆者作成)

Classifying		Construction/Maintenance			Management in sharing
Entity	Abese	Original proposer	Funding source	Workers/Company	
Government	Outside	Government	Government	Government	Government
Abese residents	Inside	Clans meeting	Clans Fund	Hired familiar youth	Clans Caretaker
		Family meeting	Family Fund		Family Caretaker
		Private-Collective	Private-Collective		※
		Private-Individual	Private-Individual		Owner
Outsider	Outside	-	Donation	-	-

※Not Clear

2.4 子どもの戸外行動調査と描画テストによる環境イメージの把握の試み

2.4.1 本節の目的

多くの人が1日の大半を外部で過ごし、通りや路地が生活空間となるため当該地区は、人々の豊かな活動が観測される。一方で、近年内部人口の流出と外部人口の流入や慣習的にはなかった土地売買が行われるようになるなど、Abese 地区においてコミュニティの希薄化による環境変化がもたらされている。

このような環境変化に対し、持続性を担保する仕組みの提案に向けて、地域の当事者であり担い手である住民の地域に対する認識、潜在的な環境イメージを捉えることが目的である。また、アフリカ学会によるとアフリカの子どもたちの行為を捉えることは非常に有効であると言われている。

本節では、「子ども」に着目し、ワークショップ（描画テスト）を通して子どもの認識する地域の姿を把握する試みも併せて行う。子どもを対象とすること、また海外での調査による言葉の壁という点から、言語を用いず潜在的な子どもの環境イメージ（地域認識）を捉える有効な手段としての「描画テスト」と、実際の住民や子どもたちの居場所や行為を把握する戸外行動調査（フィールドワーク）の2つの調査を行い、分析、比較を行い子どもの地域認識（環境イメージ）に関して考察を行う。



Fig. 4.1 Abese 地区の外部空間における人々の様子 （出典：筆者撮影）

2.4.2 調査・分析方法

(1) 調査方法

■描画テスト

描画法による調査を行うにあたり、Abese 地区の子どもを対象に「お気に入りの場所探しワークショップ」を実施した(2018年11月4日)。

対象者は8-12歳の男女20人程度を想定していたが、地区内にワークショップの開催が口伝えに拡散したことで、結果として想定以上の人数が集まり、想定年齢層以下の子ども含めて推定参加者は60名である。描画テストにおける教示内容は、“What are you doing in your favorite place in your town (Kowe/Abese)?”とした。用紙は八つ切サイズの画用紙、ペンまたはクレヨンを配布した。絵に加えて文字の記入も可とした。また、より詳細な空間把握およびその場における行為を知るため、場所だけでなく自分を含めた他者の記入を促した。さらに、子どもたちの基本的な情報を得るため、ワークショップ前半にアイスブレイクを兼ねた名札づくりを行った。アンケートの代用として、名前/年齢/学年/絵の題名という内容とし、分析の材料とした。

■フィールドワーク

調査期間：2018年10月27日～11月8日

対象地区：Abese 地区(ガーナ, アクラ, La 地域)

調査項目：子どもの居場所および行為の把握

街路路面使用状況および管理方法、上下水、衛生設備の配置および運営方法の調査と併行して行った。また、一部昨年度の調査データを利用した。

(2) 分析方法

■描画テスト

以下の2段階で分析を行う (Fig.2.4.2)。

A.描画の読み取り：描画の構成要素を抽出し、描かれているかを描画表現と言語表現と分けて読み取った。

また、描画の構図や描く視点により、何を捉えているのか把握する(空間的広がり/スケールの把握)

B.地図プロット：描画対象の場所把握が可能なものは地図上にプロットすることで分布の把握を行う。

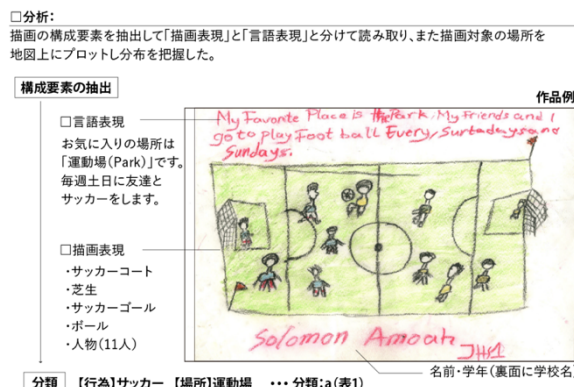


Fig.2.4.2 分析の方法 (出典：子どもの描画により筆者作成)

■フィールドワーク

以下の2段階で分析を行う。

- a. 戸外行動調査：踏査により、子どもを観察し、場所・人数・そこでの行為を記録し、表にまとめた。また、可能な限り写真による記録を行った。本調査では、3名以上を対象とした。
- b. 地図プロット：地図上にプロットすることで分布の把握を行う。

2.4.3 描画テストの調査結果

子どもの描画を一部 Fig.2.4.3-1 に示した。テスト結果を Table2.4.3 および Fig.2.4.3-2 にまとめた。推定参加者 60 名のうち回収できた絵は 46 枚でありこれらを有効なデータとして扱う。

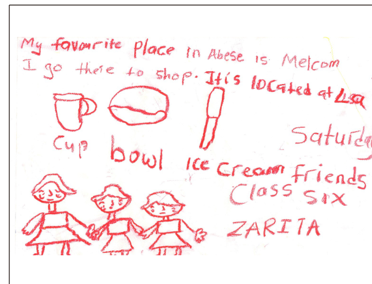
A. 描画の読み取り

お気に入りの場所に関して似通った傾向が見られ、特に運動場(17 人)、マーケット(11 人)が関心の高い場所であることがわかった。さらに運動場に関しては「サッカー」、マーケットに関しては「買う」、と双方ともそこでの行為は同じ結果であった。またそれぞれの描画表現に関しても類似した点が複数見られた。運動場については、①実際は赤土のグラウンドであるが、コートは芝生を表すグリーン塗られフラッグやゴールなど実際にはないものまで描かれること、②大人数のプレイヤー描かれること③3次元表現であることが挙げられる。一方でマーケットに関しては空間を描いた1作品を除いて①商品が描かれること②二次元表現であることが挙げられる。描かれる商品は多くが最寄り品であることから、マーケットは日常的に利用されていることが推測される。描画の中には少数ではあるが、La 地域の風景を含めて描かれた絵があった。Abese 地区内の路地で Ampe というガーナの遊びをするという描画や Fishing Community のチーフの家とその周辺を示し、大漁祈願のため漁の前にお祈りする様子を「お気に入りの風景」として示す描画も見られ、これらは Abese 地区特有の子どもの環境イメージを表現していると言える。

B. 地図プロット

描画で描かれた場所のうち、Abese 周辺で把握できたのは、運動場(17)、マーケット(11)、オンラインゲーム(2)、図書館(1)、LaRoad(1)の5箇所であった。ゲームセンター、図書館を除いて Abese 地区外の描画であるが、全て徒歩圏内である。

ここで、() 内は描画数を示す。



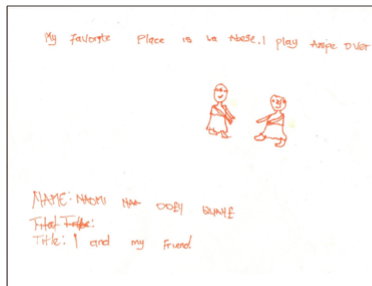
b:【行為】買い物【場所】マーケット(melcom)

構成要素: 【描画】購入品・人物
【言語】いつ・だれと



b:【行為】買い物【場所】マーケット(La地域)

構成要素: 【描画】購入品・人物・ケース・樹木
【言語】La地域にあるマーケット



f:【行為】Ampe(遊び)【場所】Abeseの路地

構成要素: 【描画】人物2人
【言語】Ampeをするのが好き



g:【行為】大漁祈願のお祭り【場所】特定不可

構成要素: 【描画】魚/ボート/木/家/海
【言語】Fishing community

Fig.2.4.3-2 子どもの描画（一部抜粋）（出典：子どもの描画により筆者作成）

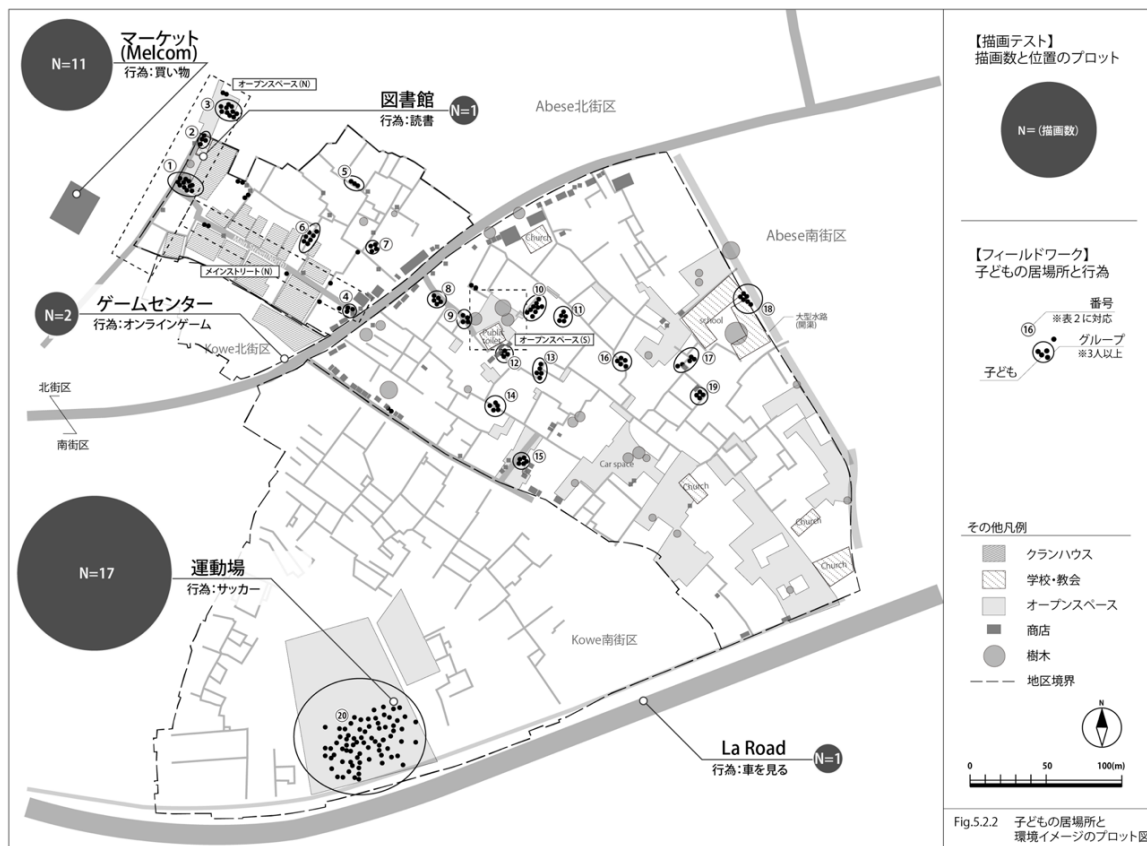


Fig.2.4.3-2 子どもの居場所と環境イメージのプロット図 (出典：筆者作成)

Table.2.4.3 描画テストの結果 (出典：筆者作成)

番号	街区	人数(人)	時間	場所		行為
1	北街区	11	12時~14時	広場		民家前の段差で群れている
2		4	14~16時	図書館入り口	O.S(N)or O.S(N)に接続	腰掛けてじやれている
3		10	12時~14時	広場		縄跳びをしている
6		3	12時~14時	道の真ん中	メインストリート(N)	立ち話をしている
4		7	16時~	路地(幅員1705mm)	-	路地をコートとしてサッカーをしている
5		3	10~12時	路地	-	民家前の段差に腰掛け群れている
7		4	12時~14時	個人宅の中庭	-	日陰でベンチ・椅子に座って会話している
8	南街区	5	14~16時	道		群れている
9		4	14~16時	広場		群れている
10		9	10~12時	路地	O.S(S)or O.S(S)に接続	民家前の段差に腰掛け群れている
11		5	14~16時	路地		群れている
12		4	14~16時	路地		群れている
13		5	16時~	路地	-	群れている
14		5	14~16時	路地	-	下校(通学路)
15		5	14~16時	店(コンテナ)	-	買い物をしている
16		6	14~16時	路地	-	下校(通学路)
17		6	14~16時	店(コンテナ)	-	買い物をしている
18		6	14~16時	開渠下水道	小学校の横	下水道を飛び越えて遊んでいる
19		4	14~16時	路地	-	群れている
20			50(※)	14~16時	運動場	Kowe南側

2.4.4 戸外行動調査の調査結果

調査結果を Table2.4.4 および Fig.2.4.3-2 に示す。ここでは、Abese 地区の地域構造により以下の4つに分類し分析を行う。また、子どもたちの様子を一部 Fig.2.4.4 に示した。

(1) オープンスペース(N)(以下 O.S(N))：(番号 1.2.3)

このオープンスペースの特徴は、他地域との境界であり、比較的通行量の多い通り。様々な年代の人々の交流が見られる。図書館や大きなマーケット、日用品等を販売する小さな店舗が立ち並ぶ。クランハウスの立ち並ぶ、Abese 地区のメインストリートに接続している。大きな木が2本と、シュラインも存在する。様々な年代の人々の交流が見られる。図書館や大きなマーケット (melcom)、日用品等を販売する小さな店舗が立ち並ぶ。図書館で戯れている様子や、広場で縄跳びをする子供たちが観測された。

(2) オープンスペース(S)に接続する道：(番号 8.10.11.12)

このオープンスペースには、40 年以上前に行政により設置されたパブリックトイレが立地する。卓球台やボードゲーム、小屋が存在する。昨年度の調査で観測した小屋が撤去され、新しくなっていた。ヒアリングによると、若者有志の共同出資により、建て直されたとのことであった。ここには、若者の有志のボードゲームのチームがあり、その練習の場にもなっているということが明らかになった。小屋の中には、ベンチやゲーム台などが置いてあり、チームの名前と番号が書いてあり、しっかりと管理している様子が見られた。小屋の周りには、若者たちが集まり、ゲームを楽しむ様子が観測された。一方、この場所は、そのチームのメンバーしか使えないというわけではないらしく、木陰の下でたたずむ高齢の男性などが観測された。ま

Table2.4.4 戸外行動調査の結果 (出典：筆者作成)

描画場所/もの	行為	描画数	構成要素 ※()は各要素の描画数
運動場	サッカー	17	【描画】 サッカーコート(13)・ボール・旗・人物：1~2人(2)・人物：7~40人(13)・建物(1) 【言語】 休日(4)毎日(1)・友達(6)・兄弟(1)・勝敗(1)
マーケット (Melcom)	買い物	12	【描画】 購入品：カップ/トマト/花/卵/洋服など(11)・人物(3)・商品ケース(1)・建物(1)・樹木(1) 【言語】 休日(2)毎日(1)・友達(6)家族(1)・買い物客(2)売人(1)
ゲームセンター	オンラインゲーム	2	【描画】 ゲーム機(2) 【言語】 土曜(1)/毎日(1)・友達(1)/1人で(1)
図書館	読書	1	【描画】 読書する様子/本(1) 【言語】 週一(1)
道路：La Road	車の観察	1	【描画】 車8台(1)道路(1) 【言語】 車がかっこいいから好き(1)
Abeseの路地	Ampe(遊び)	1	【描画】 人物2人(1) 【言語】 Ampe(ガーナの遊び)をするのが好き(1)
レストラン	食事	1	【描画】 人物1人/机/イス/皿5枚(1) 【言語】 家族と一緒に行く/休日/Osuに立地(1)
家と海 (特定不可)	大漁祈願のお祈り	1	【描画】 魚/ボート/木/家/海/土等(1) 【言語】 Fishing Community(1)
建物 (特定不可)	—	11	【描画】 建物(9)・人物(4)・木(3) 【言語】 —
人	—	1	【描画】 人物2人(1) 【言語】 —

た、このオープンスペースに面した家に住むという中年の男性が、この場所の Caretaker であり、管理をしているとのことであった。小屋の奥は、資材置きになっていた。また、この場所には昔からパブリックトイレがあるため、オープンスペースはパブリックトイレと呼ばれているということもわかった。

上記のように、大人たちの滞留が見られるが、子どもは観測されなかった。一方でそこから接続する脇道に入ると戯れる子どもたちの様子が観測された。

(3)運動場：(番号 20)

多くの子供がサッカーコートとして利用。広大な土地であるため、複数のグループに分かれてサッカーをしている様子が観測された。

(4)その他：(その他番号)

住宅間の路地で遊ぶ子どもが多く観測された。特に、サッカー(番号6)は幅員 1770mm の路地で7人という少人数で行われていた。Abese 地区内 (特に Abese 北街区) には広場が少ない



②: オープンスペース(北街区)周辺
【場所】図書館 【行為】座って戯れている



⑩: オープンスペース(南街区)周辺
【場所】路地【行為】民家前の段差に腰掛け群れている



⑤: 北街区・路地
【場所】路地 【行為】サッカー



⑳: Kowe(南街区)
【場所】運動場 【行為】サッカー

Fig.2.4.4 子どもたちの様子 (出典：筆者撮影，作成)

ため、家の前の路地が遊び場となる。また、当該地区の家の多くは、外壁に接して段差が設けられている。その段差を椅子や台として利用し戯れ、佇んでいる様子が観測された。

以上より、北街区は、クランハウスが立ち並ぶメインストリートや O.S(N)、南街区は公衆トイレのある O.S(S)にボードゲームや卓球などの娯楽や会話を楽しむ人々を多く観測できたため、それらは大人の居場所となっていると考えられるが、一方で子どもは、大人と同じ空間ではなく、それらに接続する道やスペースに居場所を見つけていることがわかった。

2.4.5 分析結果

2つの調査結果を比較すると、運動場と O.S(N)周辺（図書館やマーケット）の主に2箇所分布が重なり、これらは多くの子供が居場所として捉えていると考えられる。O.S(N)は他地域との境界であり、不特定多数の人が行き交う比較的賑やかな通りである。図書館や小さなショップやマーケットなど、子どもたちも日常的に利用することが多いと考えられる。また、ヒアリングによると Kowe 南に位置する運動場は、La 地区の駐車場として確保することがクラン会議で決められており普段は La 地区全体の運動場として利用されている。両者の施設およびエリアは、La 族にとって公共性の高いものであるため、Abese 地区外であっても環境イメージとして捉えていることが分かる。そして、これらの場所の改善及び整備は Abese 地区において非常に意義のあることだと推測できる。

一方、フィールドワークでは路地における遊びが多く観測されたにも関わらず、描画テストでは1作品を除いて路地での遊びは描かれなかった。Abese の子どもたちにとって、路地で遊ぶことは「当たり前」のことであり、お気に入りの場所として認識しておらず、それよりは目的とその場所の特性が一致しているマーケットや運動場が描きやすかったと考えられる。

2.5 本章のまとめ

本章では、アフリカ・ガーナの「非正規市街地」を対象に水・衛生環境をはじめとする空間組織の実態と整備プロセス・維持管理の仕組みを把握することで、土着コミュニティを核とする地域マネジメントの仕組みを明らかにすることを目的とした。当該地区の北街区は、クランを核として、慣習的な相互扶助に基づく自律性の高い地域マネジメントが行われていた。一方、南街区はクランによるマネジメントが行き届いておらず、地域運営主体の不在や住環境の改善などの課題が明らかになった。

また、地域住民の一員として「子ども」に着目し、描画テスト及び戸外行動調査を通して、子どもの認識する地域の姿（環境イメージ）を把握する試みを行った。子どもの環境イメージに関して、Abese 地区では、子どもに限らず多くの人々が1日の大半を外部で過ごすため、路地では様々な豊かな活動が観測される。しかしながら今回の描画テストでは子ども達の捉える「環境イメージ」に偏りが見られた。

2.6 考察

以上を踏まえ、本節では（1）Abese 地区における地域マネジメント及び（2）北街区と南街区の整備状況およびマネジメントの違いに関して考察を行う。

（1）Abese 地区における地域マネジメント

クランに着目し、①クラン・コミュニティ、②キーパーソンの存在、③共同整備のあり方、④共同利用の仕組みという観点から、得られた知見および課題に関して考察を行う。

①クラン・コミュニティ

Abese 地区には、土着コミュニティ「クラン」が地域運営主体として存在し、クランハウスが集結して分布する主要街路周辺を優先的に整備してきたことが明らかになった。クランによる地域マネジメントは、積立金（家族基金／クランズ基金）、3つの会議が存在し、家長を中心としてクラン・コミュニティ全体で情報共有・合意形成がなされる仕組みが明らかになった。問題解決に向けて、その都度話し、全員合意で地域のマネジメントを行うという慣習的な運営が継承されているといえる。一方、主要街路以外のエリア、特に南街区にクランのマネジメントが行き届いていないことは課題である。

②キーパーソンの存在

クランによる地域マネジメントにおいて、特筆すべきは下水道のような基幹的施設の整備・維持管理においても、外部委託することなく Abese 地区内でなされてきたことである。専門知識をもつキーパーソンが定期点検を行い、工事が必要な場合はクラン・コミュニティの若者や

知人を雇い整備してきた。持続的な改善的整備に向けて、専門知識をもつ「キーパーソン」の存在は重要である。キーパーソンの担う役職や人材の育成をクランの仕組みとして継承することが、今後の課題である。

③共同整備のあり方

クランによるマネジメントは、基幹的施設はクラン-地区単位、末端的施設はクラン-家族単位のように、施設の特徴や規模により整備主体の責任と役割を区分し段階的に整備してきた。さらにはそれらの内容は定例会議によりクラン・コミュニティ全体で共有される。このような仕組みは、主要インフラでさえ公共機関の整備が行き届かない非正規市街地における自律的な環境改善の糸口となりうる。

④共同利用の仕組み

Abese 地区において、水・衛生環境設備が完備されている住居は多くないため、慣習的な相互扶助により、不足を補い合う共同利用の仕組みは重要である。また、施設の運営・維持管理においては、Caretaker や所有者が滞在し貸し出しや販売を行う。所有者にとってはそれらの収入がひとつのビジネスになっており、地区内運営を成立させる一つの要因であると言える。

(2) 北街区と南街区の整備状況およびマネジメントの違い

水・衛生環境の整備状況からみた北・南街区の違いは、下水処理における基幹的施設の有無に現れていた。整備プロセス・維持管理実態を踏まえ、要因をマネジメントに着目して考察する。

北街区：特に主要街路沿いは、クランが核となり「(A) クラントタイプ」のマネジメントがなされていた。技術や費用を要する基幹的施設（例：下水道敷設）を含む整備が行われてきた要因として、定例会議や共同出資、維持管理主体としてのキーパーソンや Caretaker などの存在により、役割分担を行いつつ、段階的に整備を進める共同型の仕組みが構築されてきたためといえる。

南街区：一部共同型の雑排水処理が見られ、住民の協力により基幹的施設の共同整備を含む「(B) 個人-複数世帯タイプ」であったが、大半が個別型の処理（例：個別汚水槽型や下水道直結型）であり、「(C) 個人-1世帯タイプ」であった。南街区は地域運営主体が不在であることから整備・改善が個人に委ねられており、基幹的施設のまとまりある整備が進みづらいことが要因であると考えられる。

一方、上水施設の整備状況は、両街区とも「(D) 公共事業タイプ（パターン④）」で、公共上水道が普及していた。住民に対し負担の少ない末端的施設（ウォータータンク・水栓）のみでよい整備であることから、行政が両街区に対して隔たりなく上水施設を担保していると言える。

注：

注1) 小野らは「インフォーマル」という用語を用いている。(参考文献9.10)

注2) オランギー・パイロット・プロジェクト (OPP) は、パキスタンのカラチで実施されたプロジェクトである。OPP という NGO が住民組織の形成を促し、路地を基本の事業単位とした自主的な居住環境改善から、当該都市全体での開発へと展開した。(参考文献7)

注3) 2011年にUN Habitatはアクラ市当局との協力により Slum upgrading and prevention strategy for Accra (2011) を発刊し、スラム改善と防止戦略の必要性を指摘した。2012年には、独立後初の本格的な都市政策である National Urban Policy Framework(2012)を策定した。

注4) 非正規市街地対策担当省の英語表記は Ministry of Inner City and Zongo Development である。2017年に設置された。

注5) Abese 地区は1500年代に4つの家族が定住化したことから始まったと言われる。その後、漁民、隣地区から各1家族、アクラ中心から2家族の計4家族が加わり、派生しながら現在の15のクランとなった。

注6) クランハウスは、基本的に屋内型もしくは屋外型の集会所と寝室、トイレ、お風呂で構成される。

注7) 3章における形成プロセスの分類では北街区は(a)、南街区は(a)と(b)の混在する地区に該当する。

注8) 従来、土着コミュニティにおいて慣習的に大きな権限をもっていたチーフであるが、植民地化による近代的都市計画の導入によりその権限やその役割は徐々に弱体化している。しかし Abese 地区のような土着コミュニティの根強い地域では、特に「土地」に関してチーフは現在も大きな慣習的権限をもつ。(参考文献16)

注9) 各クランの規約により異なるが、概ね18-23歳である。

注10) 冠婚葬祭、高齢者支援、イベント企画等、複数の小委員会に分かれて運営されているとのことだった。

注11) 幹部や長老は基本的に年配の男性が中心であることから、女性や若者の意見も取り入れるために青年会や婦人会の代表者も参加できる。

注12) 各クランの20セディの支払いは、家族基金から出される。

注13) 積立金は、家族会議の際に会計が集金を行う。所属メンバーはメンバーシップカードを所持しており、積立金の支払いが管理されている。

注14) 2室以上の処理槽を連結した構造で沈殿分離及び嫌気性微生物によって処理水を分解する。日本語表記は腐敗槽。

注15) 各施設から排水・汚水を流すものを排水管 (Drainage pipe) とし、複数の排水管が接続されるものを下水道 (Sewer) と記述する。本調査では、排水管・下水管の材質や管径、勾配などの詳細は把握できていない。

注16) ヒアリングによると、3ヶ月に一回ペースで業者を呼んでおり、一回あたり 280GHS ほどの費用がかかるとのことだった。

注17) 現地ではバスルームとシャワーに明確な区別があり、バケツに水を汲んで体を洗い流す形式を「バスルーム」、シャワーヘッドを備えた形式を「シャワー」とする。しかしその違いを外から見分けることは困難であるため、以下「浴室※英語では Bathroom」と表記し、同じ扱いとした。

注18) 浴室以外の雑排水処理については、本調査では詳細には把握していないが、料理での排水は、排水管を所持している場合も、食べ物の残り等で排水管が詰まりやすいという理由で、個別で排水を持ち運ぶ (バケツ運搬型) ことが多いとのことだった。

注19) 都市の水道供給率は約 77%である。Abese 地区を含む La 市域は「Accra East」という単位 (推定人口 210 万人) で管轄されており、現在の水道供給率は約 50%である (GWCL のホームページにより引用。) 本調査では、当該地区の公共上水道経路、普及率の詳細は明らかにしていない。

注20) 多くの住民が、飲み水としてビニール袋に小分けになった水を購入する様子が観測された。地区内の小売店等で購入できる。

注21) ウォータータンクは公共水道管が整備されていないエリアにおいても利用可能である。公共水道管と未接続で設置する場合は、タンカーに水を積んだ民間業社から水を購入し、直接ホース等でウォータータンクに水を供給するとのことだった。ただし当該地区ではウォータータンクと公共水道管が未接続の事例は見られないため、本論では言及しない。

注22) GWCL による給水システムは、およそ 1970-1990 年代に一斉に整備されたが、資金不足を理由にメンテナンスが不十分であった。特に、1980～ 1990 年初めは、給水システムの 33%が悪化し使用できなかった。

注23) 下水道とセプティックタンクおよび下水道と汚水槽は、一体的に計画されたことから本章以降は、1つの事例として扱った。(Table.2 No.1,2)

注24) Abese 地区外からの資金援助は、①Abese 出身者もしくは親族の資産家により寄付がなされる場合、②クランもしくは家族から資産家に連絡を取り寄付をお願いする場合、また稀にはあるが、③政治家による寄付がなされる場合という 3 パターンがあるとのことであった。

注 25) Abese 地区のインフラ・住環境に問題意識を持つ現チーフが5年前に導入した役職である。E氏によるインフラの点検・維持管理などの日常的な役割に対して給与（人件費）は支払われていない。また、整備に技術を要する場合は技術者を呼ぶとのことだった。

注 26) 徴収した利用料は、Caretaker への賃金（人件費）や掃除道具の費用などの維持管理費として使われる。また Caretaker は、毎週の家族会議で業務報告することになっている。

注 27) LaDMA からの派遣員が常駐し、使用料金の徴収や駄菓子の販売を行う。

注 28) 浴室によって異なるが、利用料は大人は0.4～0.5 セディ、子供が無料～0.2 セディであった。

注 29) 労働者は Abese 地区住民とは限らないが、クラン・コミュニティに繋がりのある若者や知人という意味で「Abese 地区内 (Inside of Abese)」に位置付け「地区内雇用」とした。

第3章 絵地図の制作過程からみる人と地域との文脈形成に関して（兵庫県赤穂市）

3.1 本章の目的と構成

3.1.1 目的

本章では、地図制作を通じた子どもの郷土愛やまちづくり意識の醸成を目的とし、市民主体で19年間継続されてきたまちづくり活動「あこう絵マップコンクール（兵庫県赤穂市、以下絵マップコンクールと略す）」に着目する。

「絵マップ」とは、子どもが自分のまちを調査し、発見したことや魅力を地図や絵で表現した絵地図のことである。子どもは、絵地図制作のためのフィールドワークや聞き取りなどを通じ、自分の住むまちの仕組みや住民の存在などについて、多様な「学び」を得ていると考えられる。また、子どもの疑問や興味に基づき、実体験を伴って「お気に入りの場所」、「発見したこと」などを地図に表現することで、場所や地域が好意的に意味づけられ、子どもの内面に「地域への肯定的なイメージ」などの自分なりの文脈が形成されると考えられる。

本章の目的は、当該コンクールにおける子どもの作品制作の変遷から①作品の性質、②継続参加を通じた作者の地域に対する「学び」、③作品制作の契機、④制作過程における関与を把握し、「地域との文脈形成」を明らかにすることである。また、得られた知見から当該コンクールの継続的な取り組みが地域においてどのような意義を持つのか考察を行う。なお「地域との文脈形成」とは、「地域への肯定的なイメージ」、地域環境への理解、当事者意識の醸成など、「あこう絵マップコンクール」を通じた能動的な「学び」によって、個人の中に形成される地域との繋がりを意味する。

3.1.2 既往研究と研究の位置付け

子どもの体験や住民参加のまちづくり活動に関する研究を概観すると、ワークショップ（以下WS）を通じた子どもの環境学習などの成果や有効性、先駆的事例を報告する書籍や手引き書などに多くの蓄積がある¹⁾²⁾³⁾。本研究には主に地図を用いた子どもの体験やまちづくり活動、地域との繋がりの形成に関する研究が関連する。

地図を用いた研究では「三世代遊び場マップ」の活動⁴⁾が挙げられる。地域の環境変化を3世代の子どもの遊びを通して把握するという点で有意義な知見と有効なワークショップのマ



Fig.3.1 絵マップ作品

(出典：あこう絵マップコンクール
実行委員会提供)

ッピング方法を提示している。また、イメージマップを用いて住民の環境認識⁵⁾や子どもの生活空間の把握を目的とした研究⁶⁾や、子どもの「描画内容」から空間認知や潜在的なイメージを把握した研究などがある⁷⁾。これらは、地図を通した子どもの環境認識に関わる研究であるが、子どもの学びや制作プロセスには関心が払われておらず、本研究とは地図を解読する目的が異なる。

地図を用いた体験やまちづくり活動に関する研究には倉原ら⁸⁾の研究がある。計画行為における価値づくりに向けて、市民が地域を絵地図に表現する「まちづくりコンクール」を世田谷区及び水俣市の2地域での実践を通してその有効性を考察している。この研究は、住民参加型まちづくりの先駆的取り組みであり、本研究の対象である絵マップコンクールの原点になった^{注1)}という背景から、本研究と深く関連する。また、倉原らは子どもの目線から住環境・まちづくりを考えることの意義・有効性に言及している⁹⁾¹⁰⁾。自ら地域に仕掛けたアクションリサーチ法により、子どもの意識や活動の変化について考察し、その意義や効果を詳細に明らかにしている。しかしこれらの研究は、子どもの活動による住民参加まちづくりの促進に向けた視点から知見を得ており、子ども個人の意識変化や成長、地域との繋がりについて詳細に触れていない。

地域との繋がり形成に関連して、場所への愛着に着目した石原ら¹¹⁾の研究がある。個人の経験に着目し、イメージマップ等を用いて場所への愛着がいかにも生まれるか、さらにその傾向・パターンを明らかにしている。しかし、個人の中にある潜在的な場所へのイメージや愛着を顕在化することを目的とした研究であり、地域を知ることによる視野の広がりや地域との繋がりに向けた視点ではない。その他、地域への愛着や繋がりに関する研究は、建築学分野にはほとんど見られないが、引地らは地域に対する愛着形成過程の検討を行い、地域での経験の質が愛着を規定することを示している¹³⁾。

以上を踏まえ、本研究は子どもの描いた絵地図そのものに着目し、作者とその制作プロセスに着目している点に新規性があり、得られた知見から地域との文脈形成を明らかにする点に意義がある。

3.2.3 3章の構成

まず、ヒアリング調査を通して「あこう絵マップコンクール（兵庫県赤穂市）」の概要及び運営の仕組みに関して把握した。次に、「5年連続賞」受賞者を対象に、アンケート調査を行い、回答のあった24グループから対象の3グループを選定する。また、各作品のテーマ設定及び学年毎の描かれた範囲の傾向を地図にプロットしながら把握する。その上で作品、応募用紙及

びアンケート結果から、制作時の調査分析や表現内容、さらには制作の契機や関与に着目しながら、各作者の5年間の制作プロセスの分析を行う。分析結果から、作品の性質及び5年を通じた各作者の地域に対する「学び」や視野の深まりなどを把握した上で「地域との文脈形成」を明らかにする。さらに、本論で明らかになった内容を踏まえ、当該コンクールの取り組みが地域においてどのような意義を持つのか考察を行う。

3.2 あこう絵マップコンクールの概要と選定理由

3.2.1 研究対象地：赤穂市の概要

赤穂市は人口約4.4万人、兵庫県南西部、瀬戸内海沿岸に位置し、中心には千種川が流れている (Fig.3.2.1)。「忠臣蔵のふるさと」「塩のまち」として全国的に知られている。また地区ごとに見ると、旧城下町の広がる赤穂城周辺、港町の風情を残す坂越地区、塩田地帯としての歴史をもつ塩屋、尾崎、御崎地区、古代遺跡の集中する有年地区など、さまざまな歴史的側面をもつ。なお、市内には10校の小学校、11の幼稚園がある。右図では小学校区と小学校の位置を示した。



Fig.3.2.1 赤穂の位置

(出典：筆者作成)

<義士教育について>

兵庫県赤穂市は、「忠臣蔵」として語り継がれる赤穂義士の歴史を持つ。毎年12月14日には赤穂義士祭という祭りが開催され、その史実を正しく理解し郷土愛を育てようと、小中学生を対象にした独自のカリキュラム「義士教育」が続けられている。

特に、赤穂藩の城下町を校区とする赤穂市立城西小学校では、赤穂義士が生きた地域に住んでいることを実感できるように、赤穂義士に関わる地域の史跡見学(3年生)や、赤穂義士のストーリーを劇として披露する「こども義士物語」(6年生)などを行う。また、その過程で、お寺の住職や神社の宮司さん、劇やPTAや婦人会等の地域組織、地域住民との連携協力により、子どもは義士について学びを深めると同時に、自分が家族や地域の方多くの人に支えられていることを実感する機会となる。

見方によっては否定的にとれる「赤穂事件」の物語を赤穂では肯定的に捉え、脈々と受け継がれてきた「忠臣蔵」の精神を子供に伝える義士教育は、子どもが自分の見えている世界の背景にある歴史・ものがたりおよびその精神、さらにはそれらを支える仕組みやコミュニティの存

在への気づき、地域への誇り・郷土愛の醸成を目指すという点で赤穂における「地域文脈」の継承への素地があると考えられる。

このような地域文脈的素地をもつ赤穂市において、2003年にあこう絵マップコンクールの取り組みが始まった。1998年に東京世田谷区で始まった絵地図のコンクール企画への出会いをきっかけに、あこうの子どもたちの郷土愛を育て、その作品を見た大人たちにも赤穂を再発見してほしいという想いで「あこう絵マップコンクール」を開催している。

3.2.2 あこう絵マップコンクールの概要

「あこう絵マップコンクール」は、2021年度で19回目を迎える。応募資格は市内の小学生以下の児童、幼児の個人またはグループであり、子どもが主体的に取り組んでいれば、家族の協力や兄弟、クラス単位での共同制作も可能である。子ども達は夏休みの自由課題として取り組み、コンクールは毎年秋に開催される。

当コンクールの特色は「公開審査会」であり、参加児童の1分間のプレゼンテーション後、審査員による質疑応答が行われる。作品自体のクオリティだけでなく、子どものプレゼンテーション力と主体性が重視されている^{注2)}。審査員は毎年5名程度であり、国土地理院近畿地方測量部、大学の教員、教育関係者、各種まちづくりに関わる市民など、多様な視点での評価のため、1~2年の交代制にしている。審査基準はまちに対する子どもらしい視点や発想のおもしろさ、作品づくりについての創意工夫や熱意などを総合的に判断する。なお、2020年、2021年はコロナ禍の影響により、例年通りの子どものプレゼンテーションによる公開審査会を行うことができなかったが、「公開審査会」という審査の透明性を守るため、YouTubeによる生配信公開審査を実施した。これらの審査を経て、優秀な作品には賞が与えられる(最優秀賞(1点)・優秀賞(3~6点程度)・審査員特別賞・努力賞など)。また、優秀作品のうち数点は、子どもを対象とした国土地理院主催「全国児童生徒地図優秀作品展」に出店される。

毎年応募する参加者も見られ、第5回から「5年連続賞」を設けており、19回目(2021年)までに計41人33グループが受賞した。

以上のように子どもの主体性を重視し、5年連続賞という継続的に取り組む


<p>特徴① 公開審査会</p> <ul style="list-style-type: none">・審査は「公開審査会」の形式・参加児童の1分間のプレゼンテーション後、審査員による質疑応答が行われる。・審査基準は作品自体のクオリティだけでなく、子どものプレゼン力と主体性を重視	
<p>特徴② 5年連続賞</p> <p>毎年応募する参加者も見られ、第5回から「5年連続賞」を設けている。</p> <p>19回目(2021年)までに計41名33グループが受賞</p>	

Fig.3.2.2 あこう絵マップコンクールの特徴

(出典：筆者作成)

ことを評価する仕組みがあることから、「あこう絵マップコンクール」における子どもの継続的な地図の制作を通じた視野の広がりや成長に着目する。さらに、実行委員会^{注3)}は市民有志で構成され、長年の取り組みが評価されている^{注4)}。当該コンクールが「郷土愛の醸成」を目的とし、住民主体の継続的な取り組みであることから、子どもの地域との文脈形成を把握するという視点において有効だと考えた。

3.2.3 あこう絵マップコンクール実行委員会の概要

当該コンクールは、作品づくりを通してふるさとへの愛着を深めてもらおうと 2003 年に「西播磨地域づくり女性会議」が創設。第 2 回以降は市民有志で構成される「あこう絵マップコンクール実行委員会」が引き継ぎ、運営を行なっている。当実行委員会は、趣旨に賛同する市内の主婦・会社員・商店主・大学生など 10 代～80 代まで現在は約 20 名で構成しており、全てさまざまな市民による協働・ボランティアで運営している。活動費用は、実行委員の会費、市民と市内企業からの寄付、及び年によって一部を行政からの助成金によって賄っている。また地元大学の関西福祉大学により審査会の会場の提供や学生ボランティア参加などの協力を受けている。実行委員会では、手作りで絵マップソングやダンス、キャラクターをつくり、楽しみながらまちづくりに取り組んでいる。

これまで、5 年目（2007）には、国土交通省「手づくり郷土賞」地域活動部門に選定され、8 年目（2010）には国土地理院より測量の日に「功労者感謝状」、同年ひょうごユニバーサル社会づくり賞知事賞等を受賞を拝受した。

実行委員会は、作品募集に向けた準備（7～8 月）、公開審査会（9 月）、表彰式の運営（11 月）、さらには市内で「巡回展示」を行なっている。市立図書館、市民病院、赤穂義士隊、市の音楽祭などで作品展示を行い、できるだけたくさんの市民に見てもらう機会設けている。また、赤穂市での活動実績がもととなり、近隣のたつの市や上郡町にも市民レベルの実行委員会が結成されコンクールが開催され（2011 年）、各市町のコンクールの入選作品の交流発表会や交流作品展示会を開催し、交流がなされた。

3.3 調査方法と対象作品

3.3.1 対象作品

当該コンクールは 19 年間で応募者総数 2380 人、全 1275 作品の蓄積がある。研究対象は、作品制作の変遷を詳細に把握し、地域への意識や繋がりの変化を読み取る上で「5 年連続賞」の受賞者が有効であると考えた。第 18 回目の 2020 年までの「5 年連続賞」の受賞者全 33 名

グループ(当時9歳~25歳)を対象としたアンケート^{注5)}を実施(2021年5月~6月,回収率73%)した(Fig.3.3.1)。24グループのタイトルや小学校区等の情報を作品リストとしてTable3.3.1-1,Table3.3.1-2にまとめた。

なお,アンケートは5年間の各作品に関して,調査方法や人数,「どのようにテーマ設定をしたか」「楽しかったこと」「絵マップを通して地域のどんなことを好きになったか」,作品制作における工夫や努力した点,事後の感想など自由記述が中心のアンケートとした。また,回答のあった24グループの分析から,多様な「学び」を得た3グループ(計7名)全15作品^{注6)}を対象とする(Table3.3.1-3)。

なお,選定方法については(3.2.4)で詳述する。また,作品にはK1~K5, C1~C5, H1~H5の符号を付し,グループで応募した年は対象者との関係(続柄)を表記した。

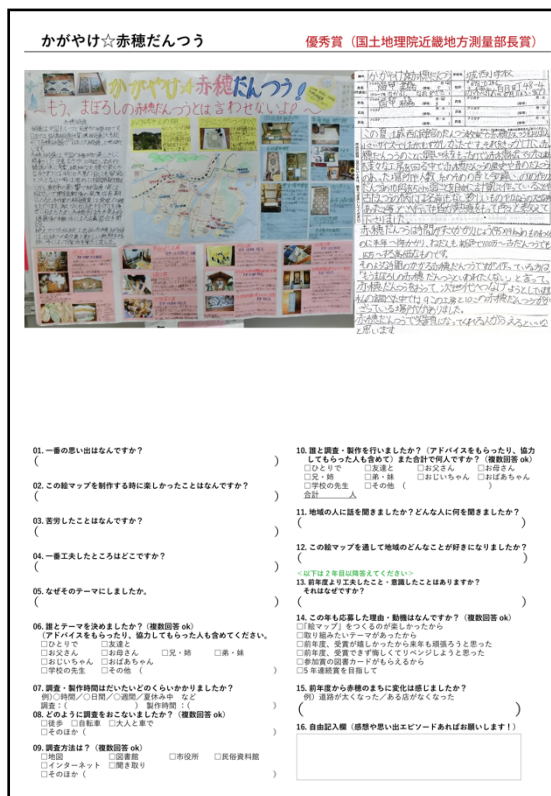


Fig.3.3.1 アンケート(例)(出典:筆者作成)

Table3.3.1-3 対象者と作品リスト(出典:実行委員会情報提供により筆者作成)

対象(性別)	小学校区	調査年齢	作品	タイトル※4	応募年度	応募人数	構成	応募時の学年※5
1 作者K (女/※1)	有年	12 (中1)	K1	自然いっぱい有年・原観光マップ	2015	2名	姉妹	小1[小5(姉)]
			K2	うねの田畑をうるおすよMAP	2016	2名	姉妹	小2[小6(姉)]
			K3	有年ぐるりと一周レッツゴーこうえんマップ	2017	2名	姉弟	小3[小1(弟)]
			K4	うねうまいもんマップ	2018	2名	姉弟	小4[小2(弟)]
			K5	JとRの古墳探検大冒険マップ	2019	2名	姉弟	小5[小3(弟)]
2 作者C (女/※2)	城西	15 (高1)	C1	あかちゅうだいまっぷ	2011	2名	同級生	小1
			C2	C.Cのちくさ川サイクリングロードマップ	2012	2名	同級生	小2
			C3	C.Cの校歌で赤穂、みーつけた!	2013	2名	同級生	小3
			C4	C.Cが赤穂の山を調べたよ!!	2014	2名	同級生	小4
			C5	C.Cの時空をこえて民話で赤穂を旅したよ!	2015	2名	同級生	小5
3 作者H (女/※3)	城西	12 (中1)	H1	こうえんへGO!	2016	2名	姉妹	小2[小4(姉)]
			H2	かがやけ☆赤穂だんつう	2017	2名	姉妹	小3[小5(姉)]
			H3	赤穂義士の今昔マップ	2018	2名	姉妹	小4[小6(姉)]
			H4	未来へ残そう!赤穂の獅子舞	2019	1名	個人	小5
			H5	先人の貴重な文化遺産 旧赤穂上水道	2020	1名	個人	小6

※1: K1,K2は姉と,K3~K5は弟とグループで応募 ※2: 同級生2名がグループで応募 ※3: H1~H3は姉と, H4~H5は個人で応募
 ※4: 個人名が出てきた場合はイニシャルを表記。作品K5はJが弟, Rは姉, C2~C5ではC-Cは2名の作者のイニシャルを示す
 ※5 「5年連続応募賞」受賞者は太字、共同制作者は[]内に示した

NO.	個人/グループ	校区	応募学年	年	作品名	受賞（5年連続賞以外）
1	個人	御崎	小2	2003	しぜんいっぱい私の町	審査委員特別賞「アイデア賞」
			小3	2004	みさきの昔・今・未来	優秀賞
			小4	2005	未来に残したい御崎の町	最優秀賞
			小5	2006	御崎の自然・行事マップ	努力賞
			小6	2007	家の近くの野生動物マップ	審査委員特別賞「よく観察しているで賞」
2	個人	城西	あけ幼年中	2003	ぼうずようちえんに行く	努力賞
			あけ幼年長	2004	500ぼ DE さんぼ	努力賞
			小1	2005	ながーい おさんぼ	-
			小2	2006	よるのさんぼ	-
3	個人	尾崎	小2	2004	おさき 町たんけん	-
			小3	2005	尾崎のれきしの道	努力賞
			小4	2006	赤穂ふらりマップ	努力賞
			小5	2007	赤穂カルタ	審査委員特別賞「お正月にはあこうかるた賞」
			小6	2008	今と昔 赤穂早かごMAP	努力賞
4	グループ(兄弟)	尾崎	※	2005	わたしの町の消防団マップ	-
				2006	尾崎の町のお寺・宮マップ	-
				2007	まり・せれ・たくの通学路	審査委員特別賞「よく観察しているで賞」
				2008	あこうの塩・未来にのこそう	-
				2009	わたしの町のひなん場所	-
5	個人	尾崎	年少	2005	ゆうかのいえからようちえんまで	みんなすてきな笑顔で賞
			小1	2006	こうえんへ レッツゴー	努力賞
			小2	2007	わたしが市長になったら	審査委員特別賞「未来の市長賞」
			小3	2008	みんなで食べよう!! 赤穂でとれた食べ物	審査委員特別賞(磯本委員)「赤穂で産地賞」
			小4	2009	赤穂トランプ	優秀賞(赤穂市教育長賞)
			小5	2010	ゆうか くらちゃん号のバスガイドに挑戦	優秀賞(赤穂市教育長賞)
6	個人	赤穂	小1	2006	えきまだいいちこうえん	-
			小2	2007	わがやのけんこうウォーキングマップ	努力賞
			小3	2008	新発見!! 加屋川 この橋どの橋?クイズマップ	優秀賞(赤穂市教育長賞)
			小4	2009	赤穂義士クイズですごくMAP	努力賞
			小5	2010	赤穂の水道探検マップ	最優秀賞(国土地理院長賞)
			小6	2011	百選いっぱい! 赤穂ピカいちマップ	優秀賞(国土地理院近畿地方測量部長賞)
7	グループ(友人)	坂越	※	2006	ぼくたち わたしたちのまちに"ゆらのすけ"が通ったよ!!	-
				2007	はし・あし・なんぼ?	優秀賞(赤穂ライオンズクラブ賞)
				2008	さこしハッピーすごろく	審査委員特別賞「みんなで楽しめるで賞」
				2008	消防マップ(上田成美・丸尾公平)	優秀賞(関西福祉大学附属地域センター賞)
				2009	さこしのとんど	努力賞
				2010	点字で歩こうさこしのまち	努力賞
8	個人	塩屋	小1	2006	ぼくのおこづかい100円で買えるおやつマップ	-
	グループ(兄弟)		小2	2007	塩屋から始まる赤穂マップマップ	優秀賞(赤穂ロータリークラブ賞)
	個人		小3	2008	海から始まる赤穂の川たんけんマップ	努力賞
	個人		小4	2009	塩の国 赤穂マップ	-
	個人		小5	2010	千種川の支流水質ランキング	審査委員特別賞「水もきれいな視点もあたらしいで賞」
9	個人	原	小2	2008	ぼくのおすすめ原マップ	審査委員特別賞(児玉委員)「『V』大好き」で賞」
			小3	2009	かめころうのおさんぼマップ	審査委員特別賞「かめころうといっしょになかよくね賞」
			小4	2010	原のむかしばなしマップ	関西福祉大学生賞
			小5	2011	ししまいのえん目マップ	-
			小6	2012	タイムトラベル原遺跡マップ	優秀賞(赤穂ロータリークラブ賞)
			小1	2009	こうえん まっぶ	-
10	個人	塩屋	小2	2010	あきよのこうつうあんぜんマップ	-
			小3	2011	しおや川の四季	優秀賞(赤穂ライオンズクラブ賞)
			小4	2012	ここにこいっばい顔マップ	審査委員特別賞「スマイル一杯最高賞」
			小5	2013	おうちの周り 今と前ではちがうのかマップ	優秀賞(赤穂市教育長賞)
			小6	2014	持ち歩きができるよ! 私のお気にいり! お散歩マップ	最優秀賞(国土地理院長賞)
			小1	2011	ぼくのサイクリングマップ	-
11	個人	塩屋	小2	2012	虫とりマップ	-
			小3	2013	赤穂 駅マップ	-
			小4	2014	小学校マップ	-
			小5	2015	安心・安全消防団マップ	努力賞
			小2	2011	わたしのおつかいマップ	審査委員特別賞「これからもおつかいがんばって賞」
12	個人	塩屋	小3	2012	赤穂御崎大塚海岸 ライオン岩わくわくたんけんマップ	-
			小4	2013	わたしたちを見守る あこうの山々マップ	努力賞
			小5	2014	わたしが好きな赤穂の海MAP	努力賞
			小6	2015	訪ねて学ぶ赤穂忠臣蔵マップ	関西福祉大学生賞

Table3.3.1-1 5年連続賞受賞者リスト(出典:実行委員会情報提供により筆者作成)

NO.	個人/グループ	校区	応募学年	年	作品名	受賞（5年連続賞以外）
13	個人	尾崎	小1	2011	あこみさきさんぽまっぷ	
			小2	2012	ぼくの町のごうえんマップ	
			小3	2013	赤穂の山マップ	努力賞
			小4	2014	赤穂鳥居マップ	努力賞
			小5	2015	赤穂上水道今と昔	優秀賞（赤穂ライオンズクラブ賞）
14	グループ（友人）	城西	小1	2011	あかちゅうだいまっぷ	努力賞
			小2	2012	ことことちくさ川 サイクリングロードマップ	努力賞
			小3	2013	ことことの校歌で赤穂、みつけた！	優秀賞（赤穂市長賞）
			小4	2014	ことことが赤穂の山を調べたよ！！	優秀賞（赤穂市教育長賞）
			小5	2015	ことことの 時空をこえて民話で赤穂を旅したよ！	優秀賞（国土地理院近畿地方測量部長賞）
			小6	2016	ことことの知られざる赤穂まぼろしの城たち	優秀賞（国土地理院近畿地方測量部長賞）
			2016	ことことの6年間ありがとう！赤穂絵マップコンクール		
15	個人	赤穂西	小1	2014	ぼくのいえのまわりのいきものマップ	努力賞
	グループ（兄弟）		小2	2015	折れまきの名所MAP	努力賞
	グループ（兄弟）		小3	2016	赤穂御朱印絵マップ	優秀賞（赤穂ライオンズクラブ賞）
	グループ（兄弟）		小4	2017	赤穂こまいぬびっくり!!マップ	最優秀賞（国土地理院長賞）
	グループ（兄弟）		小5	2018	旧赤穂上水道の歴史マップ	努力賞
16	グループ（友人）	塩屋	小2	2014	むかしのあこじょう	努力賞
	個人		小3	2015	ぼくの遊び場オスメスポット	住宅街の自然賞
	個人		小4	2016	大型菌類分布調査 in 赤穂ふれあいの森	努力賞
	個人		小5	2017	赤穂魚介類マップ	審査委員特別賞「ギョー!!豊かな赤穂の海賞」
	個人		小6	2018	僕のベストスポット in 赤穂	地図協会会長賞
17	グループ（家族）	有年	小1	2015	自然いっぱい有年・原観光マップ	優秀賞（赤穂市教育長賞）
			小2	2016	うねの田畑をうるおすよMAP	優秀賞（赤穂市教育長賞）
			小3	2017	有年ぐるりと一周レッツゴーこうえんマップ	優秀賞（関西福祉大学附属地域センター賞）
			小4	2018	うねうまいもんマップ	努力賞
			小5	2019	じんとりよの古墳探検大冒険マップ	最優秀賞（国土地理院長賞）
18	個人	尾崎	小2	2016	ぼくのいえマップ	努力賞
			小3	2017	公園よく知ろうMAP	努力賞
			小4	2018	消火栓たくさんあるよMAP	優秀賞（赤穂市教育長賞）
			小5	2019	伝えたい！尾崎の歴史マップ	優秀賞（関西福祉大学附属地域センター賞）
			小6	2020	もっと知ろう水害危険尾崎地区MAP	地図協会理事賞
19	グループ（兄弟）	塩屋	年少	2016	たのしいおやのまち	
	個人		年長	2017	しおやまっぷ	
	個人		小1	2018	わたしのすきなこうえん	
	個人		小2	2019	あこういろんなたべものマップ	努力賞
	個人		小3	2020	おもしろいかわらマップ	審査委員特別賞「おもしろ視点で賞」
20	個人	塩屋	小1	2016	おうちのまわりのいきものずかん	努力賞
			小2	2017	お家のまわりのあんぜんかくにんマップ	努力賞
			小3	2018	色々みつけた高取峠	審査委員特別賞「きれいなマップで賞」
			小4	2019	さこしオリジナルマップ	優秀賞（赤穂ロータリークラブ賞）
			小5	2020	赤穂鉄道今昔探検マップ	優秀賞（国土地理院近畿地方測量部長賞）
21	個人	塩屋	小1	2016	ぼくのいえの近くをたんけんマップ	努力賞
	個人		小2	2017	きれいだよ赤穂シティマラソン絶景MAP	優秀賞（赤穂ライオンズクラブ賞）
	個人		小3	2018	2020年東京利ビッ'ッ'楽しみだMAP	優秀賞（赤穂市長賞）
	個人		小4	2019	『日本第一』の塩を産したまち 播州赤穂MAP	優秀賞（赤穂市教育長賞）
	グループ（兄弟）		小5	2020	赤穂義士の史跡めぐりMAP	審査委員特別賞「義士についてもっともっと知りたいで賞」
22	グループ（兄弟）	城西	小2	2016	こうえんへGO!	審査委員特別賞「みんなであそびま賞」
	グループ（兄弟）		小3	2017	かがやけ☆赤穂だんつう	優秀賞（国土地理院近畿地方測量部長賞）
	グループ（兄弟）		小4	2018	赤穂義士の今昔マップ	最優秀賞（国土地理院長賞）
	個人		小5	2019	未来へ残そう！赤穂の獅子舞	優秀賞（国土地理院近畿地方測量部長賞）
	個人		小6	2020	先人の貴重な文化 遺産 旧赤穂上水道	最優秀賞（国土地理院長賞）
	個人		年少	2016	あこらの車窓	関西福祉大学生賞
23	個人	城西	年長	2017	わたしのつうえんろ	努力賞
	個人		小1	2018	わたしのまちのためきさん	審査委員特別賞「目の付け所がすばらしいで賞」
	個人		小2	2019	#あこら(ハッシュタグ あこら)	審査委員特別賞「みんなで拡散しま賞」
	個人		小3	2020	わたしの地図 ～遊覧が必要な時にみるマップ～	審査委員特別賞「とても役に立つで賞」
24	個人	原小	年長	2016	だいすき!!はら!!	審査委員特別賞「みらい賞」
			小1	2017	タイムトラベル in うね	関西福祉大学生賞
			小2	2018	さいがいから いのちを まもれ	優秀賞（国土地理院近畿地方測量部長賞）
			小3	2019	赤穂を食べてくせ!!くいしんぼうマップ	優秀賞（赤穂ライオンズクラブ賞）
			小4	2020	旧赤穂上水のなぞを追え!!	優秀賞（赤穂市教育長賞）

Table3.3.1-2 5年連続賞受賞者（出典：実行委員会情報提供により筆者作成）

3.3.2 対象作品の選定理由

アンケートに回答のあった24グループ(120作品)の中から、多様な「学び」を得ている3グループ(作者 C,K,H)を選定する。「関与(アイデア出しや調査などの場面でどのような他者が関与したのか)」及び「テーマ設定の契機(作品のテーマ設定にどのようなきっかけが影響したのか)」の観点から3つの設問に対する回答内容に着目し、多様な関与や契機がみられる事例をモデルとして抽出することとした。

まず、「関与」については、設問1(誰と一緒に調査・制作を行ったか)と設問2(制作過程で利用した施設・聞き取りした人はいるか)の回答を整理し、傾向を読み取る。Table3.3.2-1「設問1」より、父・母もしくは両親と共に調査・制作を行ったのは、全120作品であった。また、きょうだいは34作品、祖父もしくは祖母は20作品であったことから、主に家族で協力しながら取り組む様子が窺える。Table3.3.2-1「設問2」については、図書館(18作品)や市役所(11作品)など計7種類の施設に関する回答があった。また聞き取りに関しては、祖父母(18作

Table3.3.2-1
設問1・設問2

(出典:筆者作成)

設問1 (複数回答可)		※1	
誰と一緒に調査・制作を行いましたか		C	H
1人	0作品		
父/母/両親	120作品	5	5
きょうだい	34作品	5	3
祖父/祖母	20作品		
友人	10作品	5	
その他)友人母等		5	

設問2 (自由記述)		※1	
制作過程で利用した施設・聞き取りした人はいますか?		C	H
施設	図書館	18	4
	市役所	11	2
	民俗資料館	8	2
	観光協会	5	3
	歴史博物館	4	2
	考古館	3	
	市史編纂室	1	1
人・コミュニティ	祖父母	18	
	地域住民	7	2
	学校の先生	3	2
	店の定員	3	1
	神社宮司	3	
	登山客/織土工房 獅子保存会等	5	1

※1: 対象の作者C,K,Hの作品数

Table3.3.2-2 設問3 (出典:筆者作成)

設問3 なぜそのテーマにしましたか? (自由記述)	作品数	作者ごとの内訳																							
		作者 C 作者 K 作者 H																							
テーマ設定の契機 ※	グループ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
1) 身近な環境・事柄への興味・疑問 ex. 生き物, 自然要素, 通学路等	83	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
2) 赤穂特有のテーマ ex. 赤穂義士, 塩, 旧赤穂上水道等	24	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
3) 過去作品制作時の疑問・発見 ex. 駅跡の発見, まちの昔の様子	11	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
4) 学校での教育 ex. 町探検, 地図記号, 義士教育	8	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
5) 体験・コミュニティへの所属 ex. 体験教室, 地区の防災訓練	8	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
6) 他者の影響・アドバイス ex. 消防団に所属(祖父), 観光カルタの制作	8	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
7) 受賞に向けた戦略 他参加者とは被らないテーマを選定	6	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
8) 社会事象・流行 ex. 災害(津波/水害), オリンピック	6	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
9) 独自の発見 ex. おもしろい瓦, 「ニコニコ顔」の建物	4	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
10) 未来への提案 ex. 未来マップ, 私が市長だったら	3	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
11) まちの変化 ex. トンネル開通, 市内巡回バス開始	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
12) 認定・制度 ex. 日本遺産への認定, 日本の夕日百選	2	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
13) 他参加者作品の影響 公開審査会で他参加者の作品から影響	1	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

(凡例) ※: ex. は対象作者C,K,H以外も含めた全120作品(24グループ)から一部の例を示した。
No. [1]~24: 作者(24グループ)を応募年が古い順番で並べた。● 作者C ● 作者K ● 作者H
●: 1)~13)に該当する応募作品 - ●1 ●2 ●3 ●4 ●5 (年目)

品)が一番多く、次に地域住民(7作品)という回答がみられた。以上「設問1・2」より、参加者は多様な施設や人・コミュニティとの関与の中で絵マップを制作していることが分かる。

次に、「テーマ設定の契機」については設問3(なぜそのテーマにしたか)の回答を整理した。Table3.3.2-2「設問3」の回答は1)~13)の13種類に区分できた。上位7項目に該当する3グループNo.14,17,22(作者C,K,H)及びその内訳に着目した。上記の検討を踏まえ、作者C,K,Hを地域から多様な学びを得ているモデルとして選定することとした。その選定理由を以下に整理する。なお以下、1)~13)は、テーマ設定の契機(Table3.3.2-2)の各項目を指す。

作者K(No.17)は5年間を通してTable3.3.2-2:1)身近な環境・事柄への興味・疑問が該当する。1)は83作品、全24グループが該当し、他参加者の多くがテーマ設定の契機としていることから、5年間1)をテーマ設定の契機とし続けた作者Kは、継続的な絵マップ制作を通して子どもが得る地域に対する「学び」や視野の深まりなどを把握する上で有効であると考えた。

作者C(No.14)は、1),3),6),7),13)が該当する。特に7)受賞に向けた戦略、13)他参加者作品の影響は優秀作品への賞の授与や「公開審査会」などがテーマ設定の契機に表れていることから、作者Cはコンクールの運用上の仕組みと影響を把握する上で有効であると考えた。

作者H(No.22)は、1),2),3),4),5)が該当する。特に5)体験・コミュニティへの所属及び「設問2」から多様な施設利用や人・コミュニティとの関与がみられることから、作者Hは「関与」を通して得られる地域に対する「学び」を把握する上で有効であると考えられる。

以上、作者C,K,Hは、アンケートに詳細な回答があったことに加え、テーマ設定の契機(Table3.3.2-2)上位7項目が該当すること、さらに本研究の目的を把握する上で有効な観点が見られたことから、テーマ設定の契機及び関与において参加者の多くにみられる傾向を個別の事例から詳細に把握する上で、有効な3グループ15作品であると考えた。

3.4 テーマ設定及び描かれた範囲の分析

本節では、対象作品のタイトル及び描画内容から各作品のテーマとその傾向を分類する。また作品毎の中心的に描かれた場所・空間要素を地図上にプロットした上で、描かれた範囲を把握し、校区や学年・応募年数との関連性を分析する。

3.4.1 テーマの分類 (分類1)

作品タイトル及び描画内容から全 15 作品のテーマを抽出すると(1)身近な環境・事柄 (2)歴史文化(3)その他、計 3 パターンに分類できた(Table3.4-1 【分類 1】)以下、テーマ(1),テーマ(2),テーマ(3)と略す。

Table3.4-1 テーマと範囲の分類
(出典：筆者作成)

【分類1】 テーマ	【分類2】 描かれた範囲
(1)身近な環境・事柄	— 小学校区内
(2)歴史・文化	— 市内全域・南部
(3)その他	— テーマの対象地

3.4.2 中心的に描かれた場所の分布とその範囲 (分類2)

各作品のテーマに即して中心的に描かれた場所を抽出し、作者ごとに地図上に分布を示し、描かれた範囲を示した (Fig.3.4-1,2,3)。C1,C2,H3 など、描かれた範囲が狭域で地図上に表現できない場合は範囲のみ示した。範囲を比較すると①小学校区内、②市内全域・南部、③テーマの対象地の 3 パターンに分類できた (Table3.4.2 【分類 2】)。

Table3.4-2 テーマと範囲の分類結果
(出典：筆者作成)

作品	テーマ	【分類1】	範囲【分類2】
K1	観光	(1)	小学校区内
K2	ため池と田畑	(1)	小学校区内
K3	公園	(1)	小学校区内
K4	食べ物	(1)	小学校区内
K5	古墳	(2)	市内全域
C1	中学校周辺	(1)	テーマ対象地
C2	サイクリングロード	(1)	テーマ対象地
C3	校歌	(3)	市内全域
C4	山	(3)	市内全域
C5	昔話	(2)	市内全域
H1	公園	(1)	市内南部
H2	赤穂緞通	(2)	市内南部
H3	赤穂義士	(2)	小学校区内
H4	獅子舞	(2)	市内全域
H5	旧赤穂上水道	(2)	テーマ対象地

上記を踏まえ、テーマ (分類 1) 及び描かれた範囲 (分類 2) に着目し、分析結果を Table3.4-2 に示した。ここで各作者の校区 (地区) の特徴について触れておく。作者 K

の住む有年地区は古墳など古代遺跡が多く現存し、田畑の広がる地域である。作者 H と C の住む城西地区は、河口デルタ上に発達した旧城下町の中心部にあたり、忠臣蔵の赤穂義士の住んでいたエリアである。以上の地域性を踏まえ、各作品の【テーマ】・【範囲】に着目し、作者ごとにその【特徴】を述べる。

3.4.3 各作者のテーマ及び描かれた場所の分布・範囲

(1) 作者 K の特徴：有年地区

(Fig.3.4.3-1, Table3.4-2:K1-K5)

【テーマ】テーマ(1)：4 作品 (K1~K4)，
 テーマ(2)：1 作品(K5)であった。【範囲】
 1~4 年目は作者の住む有年校区内，5 年
 目は市内全域を対象とした。【特徴】テ
 マ(1)の作品が多い。また，ため池・田畑
 (K2)や古墳(K5)は，作者 K の住む有年地
 区の古代遺跡が多く現存し，田畑の広が
 る地域性が読み取れる。描かれた場所の
 分布に着目すると，3 カ所において 2 回
 以上の表現が見られ，いずれも古墳であ
 った。また K5 の分布に着目すると，校区
 内の古墳を詳細に把握した上で，市内全
 域の分布を調べていた。作者 K は，5 年
 を通して有年地区を対象地区としているの
 が特徴である。

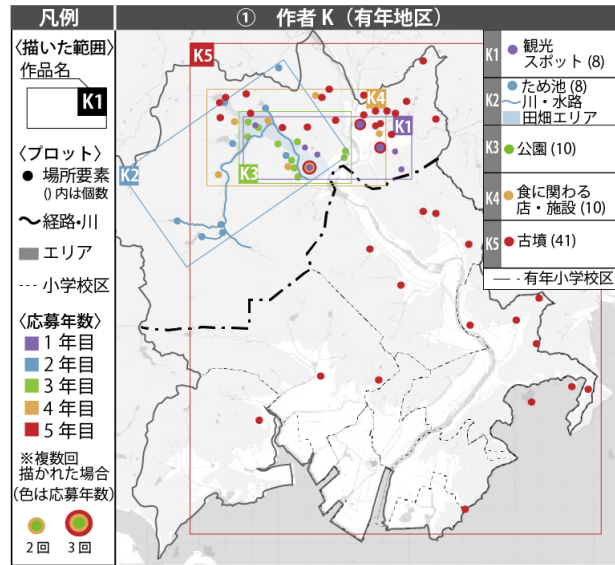


Fig.3.4.3-1 作者 K の描いた範囲

(出典：筆者作成)

(2) 作者 C の特徴：城西地区

(Fig.3.4.3-2, Table3.4-2:C1-C5)

【テーマ】テーマ(1)：2 作品(C1,C2)，
 テーマ(2)：1 作品(C5)，テーマ(3)：2
 作品 (C3,C4) であった。【範囲】C1,C2
 では対象エリアを絞り，C3-C5 では市
 内全域を対象としている。【特徴】校歌
 の歌詞(C3)や昔話(C5)に表現された
 「地名」に関するテーマが特徴的であ
 った。描かれた場所の分布に着目する
 と，計 8 カ所において 2 回以上の表現
 が見られ，市内全域を対象としながら
 同じ場所を繰り返し調査・表現する傾
 向があった。

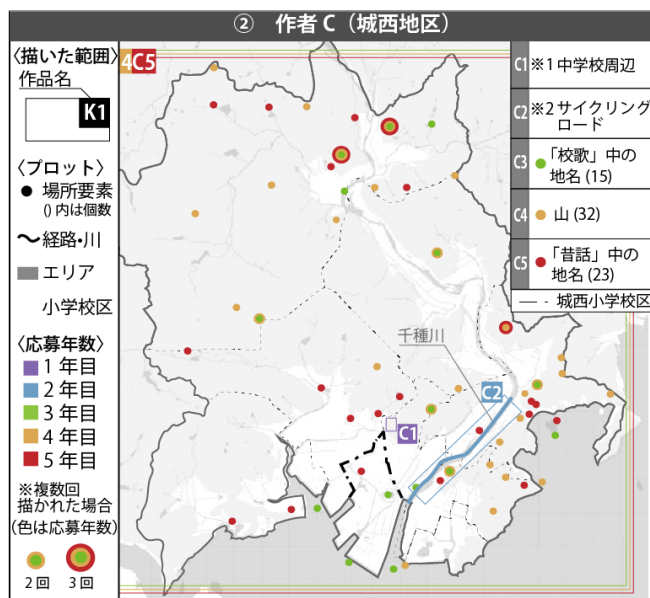


Fig.3.4.3-2 作者 C の描いた範囲

(出典：筆者作成)

(3) 作者 H の特徴：城西地区

(Fig.3.4.3-3, Table3.4-2:H1-H5)

【テーマ】テーマ(1)：1 作品(H1), テーマ(2)：4 作品(H2~H5)であった。

【範囲】H1,H2,H4 は広域, H3 は校区内, H5 はテーマ周辺を対象とした。

【特徴】テーマ(2)の作品が多いことが特徴である。特に赤穂義士(H3)や旧赤穂上水道(H5)は、作者 H の住む城西地区が旧城下町であるという地域性が対象地区及びテーマ選定理由として顕著に表れており、両作品において城下町の町割を地図上に表現している。また、

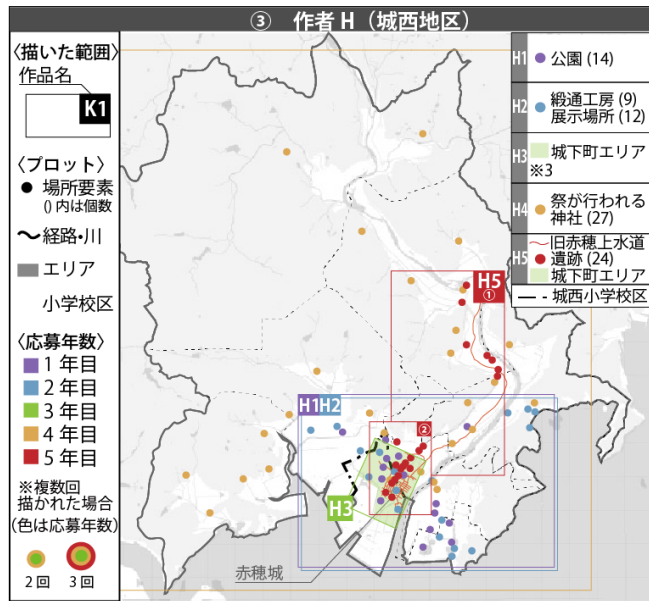


Fig.3.4.3-3 作者 H の描いた範囲
(出典：筆者作成)

H5 では広域と狭域の 2 つのスケールで地域を捉えていることが特徴的であった。範囲はテーマごとに様々であり特に傾向は見られないが、低学年から市内南部と広域を対象 (H1,H2) に描いていることは、高学年の姉 (当時 5-6 年) の影響があると考えられる。

3.4.4 テーマ設定及び描かれた範囲の分析

(1) テーマの大別とその特徴 (分析結果①)

全 15 作品のうち身近な環境・事柄のテーマ(1) は 7 作品, 歴史文化のテーマ(2)は 9 作品, その他のテーマ(3)は 2 作品であった。

分類結果に基づき学年や応募年数の観点から傾向を述べる。

1) テーマ(1)身近な環境・事柄：7 作品

公園(K3,H1)/ため池と田畑(K2)/食べ物(K4)/観光スポット(K1)/通学予定の中学校(C1)/サイクリングロード(C2)) であった。描かれた範囲に着目すると、H1 の公園を除いて小学校区内及びテーマの対象地に絞った範囲を表現していた。また、作者の学年や応募回数に着目すると、低学年もしくは応募年数が浅い作者に多い傾向があった。

2) テーマ(2)歴史文化：9 作品

古墳(K5)/赤穂緞通^{注7)}(H2)/赤穂義士(H3)/獅子舞(H4)/旧赤穂上水道^{注8)}(H5)/赤穂の昔話^{注9)}(C5)であった。描かれた範囲は、校区内から市内南部・全域を表現した広域の作品が多く、作者の学年や応募回数は、高学年もしくは応募年数を重ねた作者に多い傾向があった。

(2) テーマ設定と地域性の関連性 (分析結果②)

作者 K はため池・田畑(K2)や古墳(K5), 作者 H は赤穂義士(H2)や旧赤穂上水道(H5)など, 作者が住む地区の地域性がテーマ設定に表れている。一方で 3 年生以降の作者 C は校歌(C3)山(C4)昔話(C5)など, 自分の住む地区に限定せず, 市内全域に関連する地域の要素に着目したテーマ設定をしている。

(3) 同じ場所への調査・表現 (分析結果③)

作者 H は城下町の町割を H3,H5 で表現しており, 作者 C は 5 年間を通して, 2 回以上調査している場所が 8 箇所あった。このように, 異なるテーマ切り口を設定しながらも, 同一作者が同じ場所を 2 回以上調査・表現しているケースがみられた。)

3.4.5 まとめ

以上より, テーマ設定は 2 つのテーマに大別でき下記の傾向が明らかになった。描かれる範囲について, 身近な環境・事柄のテーマ(1)の作品は, 小学校区内及びテーマの対象地に範囲を絞り, 歴史文化のテーマ(2)の作品は, 校区内から市内南部・全域を表現した広域の作品が多いという傾向があった。一方, 作者の学年, 応募年数は, テーマ(1)は低学年もしくは応募年数が浅い作者に多く, テーマ(2)は高学年もしくは応募年数を重ねた作者に多いという傾向が分かった。また, 作者の住む地域に着目すると, テーマ設定や描く範囲に地域性が現れているケースもみられた。複数回調査・表現されている場所がみられたことから, 制作時の発見や学びが次年度以降に影響すると考えられる。

3.5 絵マップ制作の変遷

3.5.1.本節の目的と分析方法

(1) 本節の目的

本節では、各作品の制作プロセスに着目する。本節の構成を Fig.3.5.1-1 に示した。制作過程における関与、調査分析内容や表現内容を詳細に把握し、制作プロセスの構造化及び「学びの分類」を行い、子どもが得た地域に対する「学び（学びの要点）」を明らかにする（3.5.2 分析）。そして、作品ごとに「学びの要点」と「学びの分類」から「作品の性質」を把握し、地域に対する「学び」から子ども達が得た地域理解の内容を明らかにする（目的①／3.5.3 作品の性質）。また、5年の継続参加を通した作者の地域に対する「学び」（目的②）、作品制作の契機（目的③）及び制作過程における関与（目的④）の特徴を把握した上で、継続参加を通した学びの蓄積により個人の中に形成される地域との繋がりを明らかにする（3.5.4 学びの蓄積）。

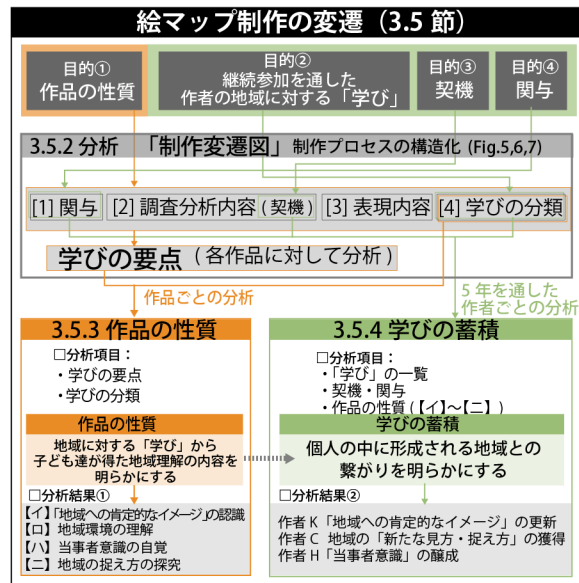


Fig.3.5.1-1 3.5 節の構成

(出典：筆者作成)

(2) 分析の方法：制作プロセスの構造化

作品の描画内容、応募用紙のコメント及びアンケート結果に基づき、調査分析／表現／契機／関与の内容を「制作変遷図」として図示した（以下、変遷図と略す）。Fig.3.5.1-2 に示すように左から[1]関与[2]調査分析内容[3]表現内容を区分し、各項目の関連や繋がりを矢印と線で結び、絵マップ制作を経て作者が得た学びの内容を右端欄[4]に示した。なお変遷図において、契機の内容は[2]の区分に記述した。

[1]関与

：作品・応募用紙のコメント及びアンケートから、家族によるアドバイスや協力、また地域住民や市役所への聞き取りなど、作者以外の人との関わり合いを示した。

[2]調査分析内容

：テーマ設定の動機やきっかけなどの「契機」の内容を示した上で、作品と言及から調査分析内容を読み取り、内容ごとに番号(①,②,..)をふりながら分けて示す。

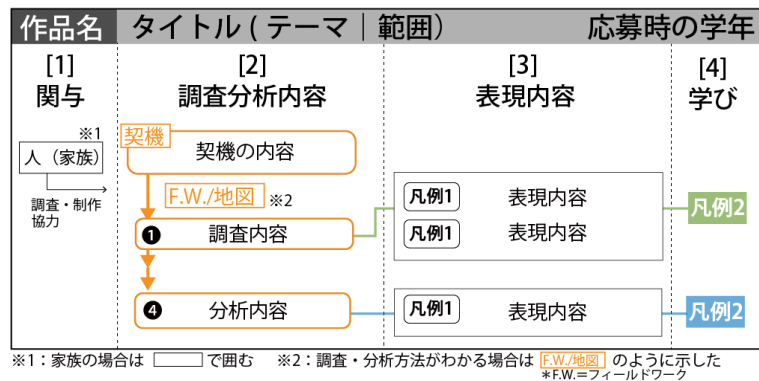


Fig.3.5.1-2 制作変遷図の構成 (出典：筆者作成)

[3]表現内容

：[2]の各項目(①,②,..)が作品にどう表現されているか具体的に記述した。表現の種類は、①地図表現、②地図以外のビジュアル表現(写真,イラスト,表等)、③言語表現、④その他、4タイプ11種類に

Table3.5.1-1 表現の種類 (凡例1)

種類	種類	種類	
		種類	種類
地図表現	示し方	m1	位置関係が正確な地図
		m2	デフォルメした地図
	示し方	a	位置のプロット
b		ルート・経路	
c		範囲(囲む, 塗る)	
ビジュアル表現	示し方	v1	写真
		v2	イラスト・絵・図解
		v3	表(リスト・年表)
		v4	記号・凡例
言語表現	s	文・コメント	
その他	o	(例)クイズ/ちぎり絵	

Table3.5.1-2 学びの分類 (凡例2)

大別項目	分類	種類
I 状態	(1)	存在や場所・空間
	(2)	内容や特徴(種類・デザイン)
II 背景	(3)	役割や仕組み
	(4)	場所・空間の履歴
	(5)	歴史(文化・技術・由来等)
III 人	(6)	人の想いや関わり合い
	(7)	受け継ぐべき大切な文化・想い
IV 分析	(8)	情報の比較
	(9)	時間の比較
	(10)	関係性

整理し (Table3.5.1-1・凡例1) 凡例[m1,m2,..]として用いた。

[4]学びの分類

：地域を題材にし、テーマや表現が自由な設定で運用される絵マップから作品の性質や各作者の傾向を把握するため、学びの分類を設定した (Table3.5.1-2・凡例2)。学びの分類は、対象作品の調査分析内容、応募用紙の記載内容から読み取り、4つの大別項目(地域のI.状態, II.背景, III.人, IV.分析)、(1)~(10)の10種類に類型化した。ここで、IV.分析は調査や聞き取りなどで得た学び(I~III)を分析することによって把握した内容を指す。

3.5.2 分析

上記を踏まえ変遷図を作成し (Fig.3.5.2-1,2,3) [2]調査分析内容、[3]表現内容、[4]学びの分類に着目して作品の内容を述べた上で、【学びの要点(以下、学び)】を把握する。

ここで()内は、変遷図における番号及び凡例を指し、([2]-[3])|([4])の順に関連を示した。なお本章以降、アンケートによって得られた情報については、該当する作者のイニシャルを添字「h」と共に右肩に記す。特に、『』内は「絵マップを通して地域のどんなことを好きになりましたか」に対するアンケート回答から把握した内容を指す。また契機及び関与は(3.5.4)にて後述するため特筆すべきもののみ記述した。

(1) 作者 K の作品分析 (Fig.3.5.2-1)

K1: 自然いっぱい有年・原観光マップ(観光マップ)

有年地区を対象に作者の目線で遺跡公園や飲食店などの「観光スポット」(8箇所)を発掘し、地図上に分布を示した(①-m2,a,v2 | I(1))。飲食店のメニューやおすすめを紹介する文章、外観写真、さらには各スポットのオリジナルキャラを作者自身がデザインし(例.飲食店「柚の木」: ゆずリン)、特徴を表現した(②-v1,v2,s | I(2))。【学び】: 作者目線での観光スポットを通して地域の魅力を認識している。

K2: うねの田畑をうるおすよ MAP(ため池と田畑)

有年地区の田畑エリア及びため池(8箇所)・川・水路の立地を地図上に表現し(①②-m1,c,a,o | I(1))、深さや面積などの数値データから各ため池の規模や状態をクイズ形式などで表現している(③-v3,v1,s,o | I(2))。さらに各ため池の田んぼへの水の分配範囲を地図上に囲み、その仕組みと関係性を把握した(④-c | II(3),IV(10))。【学び】『地域の水の豊かさ^{h-k}』と田畑とため池の仕組みを理解した。

K3: 有年ぐると一周レッツゴーこうえんマップ公園(公園)

有年地区にある全ての公園(10箇所)の分布を地図上に示した(①-m2,a,v2,v4 | I(1))上で、写真や凡例等を用いながら各公園の特徴と遊具の種類を紹介した(②-s,v1,v4 | I(2))。【学び】制作を通して校区内の公園を知り、『普段はあまり行かない公園^{h-k}』が好きになった。

K4: うねうまいもんマップ(食べ物)

有年地区を対象に、作者の目線で「うまいもん(おいしいもの)」が食べられる場所として飲食店や農場、畑等(10箇所)を発掘し、地図上に分布を示した(①-m1,a,o,v4 | I(1))。また各店舗スタッフへの聞き取りを通して、メニューやおすすめの紹介、食べ物のイラスト等で各店舗の特徴を表現した(②-s,v2 | I(2))。【学び】作者の住む地域の食べ物を通して地域の魅力を認識した。

K5: J と R の古墳検大冒険マップ(古墳)

市内全域の遺跡公園と各古墳群(41箇所)の分布を地図上に示した(①-m1,a | I(1))校区内にある7箇所の歴史や特徴を詳細に把握した(②-s,v1 | I(2) II(5))。さらに古墳のできた年代を年表に示し(③-v3 | II(5))、立地と年代からみる集落分布と変遷を分析し集落形成の広がり把握した(④-s | IV(8,9))。また民俗資料館への資料収集や古墳の場所を地元住民に聞くなどの関与がみられた。【学び】古墳から昔の集落分布の変遷を他地域と比較し有年地区が『深い歴史を持つこと^{h-k}』を認識した。

(2) 作者 C の作品分析(Fig.3.5.2-2)

C1：あかちゅうだいまっふ（中学校周辺）

中学校周りを一周して、作者たちの発見したものを写真やイラストで表した(①-m1,b,v1,s,v2 | I(1))。【学び】何気ない場所にも新たな発見や面白さがあることに気づき、表現する楽しさを認識した。

C2：C・C のちくさ川サイクリングロードマップ

サイクリングロードで作者たちの発見したものをイラストや写真で表現した(①-v1, v2 | I(1))。川をイメージして横長の地図をちぎり絵で表現し、画用紙を捲るとエピソードが書いてある仕掛けなどの創意工夫が見られる(m2-o,o)。また、学校で習った植物を採集(9種類)しスケッチで表現している(②-v2|I(2))。【学び】C1と同様の発見の喜びや楽しい思い出を表現した上で、学校での学びを実践した。

C3：C・C の校歌で赤穂、み一つけた（校歌）

「賞を獲得するために他の参加者と異なる切り口にしたい^{h-c}」という戦略から(C4,C5も同様)、「校歌」をテーマに設定した。各学校の校歌の歌詞から地名などの景観要素(15箇所)の抽出を行った(①②-s|I(2))上で、それらの場所を地図上に学校の位置と合わせて分布を示した(③④-m1,a,v4 | I(1))。さらに、現地へ訪れた時の写真およびその時の感想コメント、調べた歴史等を記述した(⑤-v1,s,o|I(2) II(5))。千種川や瀬戸内海など、複数の学校の校歌に頻出した地名を順位づけし、クイズ形式の仕掛けをしている(⑥-v3|IV(8))。【学び】校歌が地域の景観イメージや郷土愛に繋がることに着目し、校歌に出てくる景観要素から赤穂の景観イメージを把握している。

C4：C・C が赤穂の山を調べたよ（山）

C3制作時に知らない山の地名が複数出てきたこと、また公開審査会で他の参加者が山の作品を作っていたことで、「自分たちも登りたい^{h-c}」という気持ちになったことがテーマ設定の契機であった。赤穂にあるすべての山(32箇所)の存在および各山の標高を調べ、白地図に表現した(①-m1,a|I(1))。標高は高さの違いが視覚的に比較できる凡例で示した(②-v4|I(2))、標高順に列挙した(③-v3 | IV(8))。また、作者たちは現地調査として春から毎週のように登山をする中で、登山客との出会いもありそれらの経験を冒険記としてまとめた(④-v1 | I(2),⑤-o,v1,s| II(5) III(6))。【学び】山登りを実際に行い、出会った人や経験したことの楽しさを表現している。

C5：C・C の時空を超えて民話で赤穂を旅したよ！

C3,C4 の制作を通して「赤穂に伝わる昔話や昔話にまつわる場所がたくさんあることを知っ

たこと^{h-C}」がテーマ設定の契機であった。「赤穂の昔話 1,2」23話の内容を要約し、地名や場所を抽出した。内容は画用紙に書き出し、昔話の内容を連想させるイラストや現地の写真を一緒に表現している(①②-s,v1,v2|I(2) II(5))。また、抽出した地名を地図上に表現し(③-m1,a|I(1))各昔話の年代を日本の主な出来事とあわせて年表に示した(④-s|IV(8,9))【学び】タイトルの「時空をこえて〜」及びアンケートの『昔話の足跡がたくさんある自分たちの町が好きになった^{h-C}』という言及から、作者たちは場所を探し当て、現地で昔話を想像する面白さを体験したことが窺える。

(3) 作者 H の作品分析(Fig.3.5.2-3)

H1: こうえんへGO! (公園)

赤穂南部の公園(14箇所)の立地(①-m1,a | I(1))および、遊具の種類や遊び方など各公園の特徴を把握した(②-s,v1,v2|I(2))。さらに市役所への聞き取りを通して防災公園の仕組み(③-v1,s|II(3))や、公園の広さや古さなどの順位づけ(④-v3|IV(8))知った。【学び】市役所を通して防災公園や公園の各種ランキングなど、普段公園で遊ぶだけでは得られない知識を獲得している。

H2: かがやけ☆赤穂だんつう (赤穂緞通)

体験教室に参加したこと^{h-H}を契機に緞通をテーマ設定した。市内の緞土工房(9箇所)展示場所(12箇所)の分布を地図上に示し(①-m1,a | I(1)),制作方法など赤穂緞通の特徴(③-v1,s|I(2))や赤穂緞通^{注10)}のルーツや歴史を表現した(④-s|II(5))。また全ての工房・展示場所を訪ね聞き取りや制作工程の見学を通して、各工房の特徴を示した(②-v1,s|I(2))。作家やスタッフへ直接聞き取りを行い、作品に対するこだわりや(⑤-s|III(6)),一度途絶えかけた赤穂段通を「もうまぼろしの赤穂緞通といわれたくない」など次世代へ緞通の伝統文化を伝えようとする人々の想いや姿勢を知った(⑥-s|III(7))。【学び】地域固有の伝統工芸と『郷土愛を持つ人が大勢いること^{注11) h-H}』を知った。

H3: 赤穂義士の今昔マップ (赤穂義士)

作者の校区には赤穂城があり、学校全体で「義士教育」に盛んに取り組んでいることから「赤穂義士」に着目した^{h-H}。校区内にある城下町エリアを対象として、元禄期の街区や町割り(城屋敷地、町屋地、寺院)など当時の地域構造を表現した上で、赤穂義士に関連する史跡として赤穂城や門(12箇所)、赤穂浪士屋敷跡に立つ石碑(21箇所)の分布を示した(①②-m1,a|I(1))。また各門の特徴・役割(③-s|II(5))や各赤穂浪士の家紋や当時の年齢、エピソードを詳細に調べ表現している(④-s,v1,v2|I(2))。さらに古写真や古地図から今と昔を比較し(⑤-v1|I(1) II

(4)), 河川の規模の変化や城下町の棲み分けなど, まちの構造の変化への気づきを記述している(⑥-s|4IV(9))。制作過程では, 前年度に加えて, 民俗資料館や市役所, 図書館, 神社の宮司への関与があり, 聞き取り調査を通して赤穂義士に対する想いに触れて人々の忠臣蔵に対する誇りを受け継ぐべき大切な文化・想いとして受け取っている(⑦|II(5)III(8))。【学び】『伝統を大切に^{h-H}』地域性や人々を肯定的に捉えた。

H4: 未来へ残そう! 赤穂の獅子舞 (獅子舞)

作者は地元の獅子保存会に所属しており, 他地域についても知りたいと思ったことから^{h-H}, 市内で獅子舞が行われる全ての神社の立地(27箇所)を地図上に表現した(①-m1,a|I(1))。各祭りの内容を写真や凡例を使って表現した(②-s,v5,v1|II(2))上で, 比較分析しその多様性を理解した(③-s|IV(8))。現存する獅子舞にも衰退・復活・継承などの歴史背景があることを知った(④-s|II(5))。所属する獅子保存会, 市史編纂室や神社の宮司への聞き取りなどの他者との関与があり, 特に獅子保存会の方の「次世代へ継承したい」という想いに触れ(⑤-s|III(6)), 獅子舞を受け継ぐべき大切な文化として受け止めている(III(7))。【学び】『地域の人々が代々受け継いで残ってきたこと^{h-H}』『獅子舞の練習を通して地域の仲がよくなっていること^{h-H}』という言及から, 伝統文化の継承や祭りを通じた地域コミュニティの存在を肯定的に捉えている。

H5: 先人の貴重な文化遺産 旧赤穂上水道 (赤穂上水道)

H3 制作時, 城下町について調べた際に旧赤穂上水道の存在を知った。旧赤穂上水道における, 取水・導水などの5つの設備とその仕組みや構造を把握(①-v3|II(3))した上で, 旧上水道の経路(③-b)及び遺跡として現存する設備の立地(24箇所:④-a,v4|I(1)II(4))を地図上に示した。地図は千種川取水口から赤穂城下町までの広域と城下町を詳細に示す狭域の2つのスケールに分けて表現している。狭域では現代の地図に元禄期頃の町割り(※2018年の作品H3①-m1)を重ね(②-m1,c), 侍屋敷から町屋に至るまで一戸ずつ給水する「各戸給水^{注12)}」の様子を表現している。また, 当時の設備が現存する民家への訪問, 聞き取りを通して, 各設備の特徴や現在の様子を把握した(⑤-s,v2,v1|I(2)II(5)IV(9))。赤穂城への生活用水の確保として整備されたという背景や(⑥-s|II(5)), 当時のインフラ技術の高さを評価した上で, それらを引き継いで現在の街並みや上水道基盤ができているという整備背景及び『先人の存在と功績に気づき, 受け継ぐべき大切な文化・想い^{h-H}』として理解した(⑦-s|III(6,7))。【学び】「先人」「努力」「功績」という言葉が多用されていることから, 旧赤穂上水を築いてきた人々の存在の上に今が成立しているということを認識し, 感銘を受けている。それらを引き継いで現在の街並みや都市構造があることを知り, 『先人の存在と功績を知ってもらいたい^{h-H}』と今に伝え受け継ぐべき過去の功績を認識した。

関与	調査分析内容	表現内容	本人(小1)・姉(小5) 学び
K1 自然いっぱい有年・原観光マップ(観光 小学校区内) 	関与: 父・母 (テーマ設定のアドバイス), 父・母・弟(幼年少) (調査・制作協力) 契機: 田畑のイメージのある地域のイメージチェンジ F.W/地図 ① 作者の目線による観光スポットの発掘と立地(8) ② 各スポットの特徴	m2 地図は国道2号線を中心に川, 田畑, 道路を表現 a 観光スポットの分布図 v2 場所に関連するイラスト(ex. 道路・車・川・生き物等) v1 建物の外観写真 v2 オリジナルキャラをデザイン(ex. 飲食店「柚子の木」: ゆずリン) s 飲食店のメニューや体験メニューなどおすすめポイントを紹介する文章	I(1) I(2)
K2 うねの田畑をうるおすよ MAP(ため池と田畑 小学校区内) 	関与: 父・母 (アドバイス), 父・母・弟(幼年長) (調査・制作協力) 契機: 身近にあるため池の水の行方を知りたい F.W/地図 ① 田畑エリアの立地 ② ため池(8)川・水路の立地 分析: 文献調査(Web) ③ 各ため池の特徴や数値データ ④ 各ため池の田んぼへの水分配エリア	m1 地図に国道2号線を中心に表現し田畑のエリアを示した a ため池, 川・水路の分布図 o 深さにより色の濃さを変えた色画用紙で池を形取った v3 深さ・面積・貯水量・堤防長さを表にまとめた v1 作者が池の前で映る写真 s 各池にまつわる歴史や現在の様子を紹介する文章 o 池に関するクイズ c 地図に各ため池の田んぼの水分配範囲を囲む	I(1) I(2) II(3) IV(10)
K3 有年ぐるりと一周レッツゴーこうえんマップ(公園 小学校区) 	関与: 姉(中1) (アドバイス), 父・母 (調査・制作協力) 契機: 地域の公園を全て知りたい F.W/地図 ① 公園の立地(10) ② 各公園の特徴と遊具の種類	m2 国道2号線を中心に表現 a 公園の分布図 v2 山並みや田畑, 川などをカラフルに表現 v4 地図記号 s 公園の特徴から, 遊び方や楽しみ方などを紹介 v1 公園前で作者が映る写真 v4 遊具を5種類に分類し, 5色のシールで凡例を示し各公園の遊具を比較	I(1) I(2)
K4 うねうまいもんマップ(食べ物 小学校区) 	関与: 父 (アドバイス), 父・母 (調査・制作協力), 店の定員 契機: 地域の美味しい物を紹介したい F.W/地図 ① 作者の目線による「うまいもん」の発掘と立地(10) ② 各店の特徴	m1 国道2号線と千種川を中心に表現 a 飲食店や農場・畑の分布図 o 「ちぎり絵」で地図を立体的に表現 v4 「粘土」で地図記号を立体的に表現 s 店のメニューや立地の特徴, 営業時間, おすすめなどを紹介する文章 v2 メニューの食べものをイラストで表現	I(1) I(2)
K5 JとRの古墳探検大冒険マップ(古墳 市内全域) 	関与: 父 (アドバイス), 父・母 (調査・制作協力), 民俗資料館・地域住民 契機: 身近にある古墳の存在から, 市内全域の分布・歴史への興味 F.W/地図 ① 遺跡公園と各古墳の立地(41) ② 市内, 校区内の7ヶ所の歴史や特徴 ③ 各古墳のできた年代 分析 ④ 古墳の立地と年代からみる集落分布と立地の変遷	m1 河川, 海, 山, 居住域を面的に表現 a 遺跡公園, 古墳群の分布図 s 各場所にまつわる歴史, 古墳の種類などを紹介 v1 古墳の前に作者が映る写真 v3 古墳の立地を「市内北部・南部」に分けた年表 s 弥生・古墳時代後期の古墳分布の傾向からみる集落形成の拡がり	I(1) I(2) II(5) II(5) IV(8) IV(9)

(凡例) 調査・分析の内容 ※0内は要素数 記号表現の分類:(凡例1) 数字 数字 学びの分類:(凡例2)

Fig.3.5.2-1 作者Kの制作変遷図 (出典: 実行委員会写真提供により筆者作成)

	関与	調査分析内容	表現内容	同級生 2名 (小1)
C1 あかちゅうだいまっぷ (中学校周辺 テーマ対象地) 	母1・母2 <small>テーマ設定のアドバイス</small> 母1・母2 <small>調査・制作協力</small> ・中学校の校長先生	契機 作者の通う中学校を知りたい 地図/F.W./聞き取り ① 作者の目線により、中学校周辺で発見したもの(20項目) <small>※赤穂中学校は山の麓に立地</small>	m1 白地図 b 中学校を一周した調査経路 v1 猪の足跡や草木、近道など歩いて見つけた要素の写真 s 発見したものの様子、気づいた点を説明 v2 見つけた要素や作者自身を絵で表現	学び I (1)
C2 C-Cのちくさ川 サイクリングロードマップ (テーマ対象地) 	母1・母2 <small>テーマ設定のアドバイス</small> 母1・母2 <small>調査・制作協力</small>	契機 サイクリングロードがあまり知られていないから F.W. ① 作者の目線によりサイクリングロードで発見したもの ② 学校で学んだ植物を発見(9種類)	m2 サイクリングロードと千種川が並行した横長の地図に、始点・終点を設定した表現 o 「ちぎり絵」で川を表現 v1 作者2名が自転車をこぐ様子をイラストで表現 v2 看板、植物など見つけた要素をイラストで表現 o 画用紙をめくると、エピソードが書いてある仕掛け v2 植物のスケッチ	学び I (1) I (2)
C3 C-Cの校歌で赤穂、みつけた! (校歌 市内全域) 	母1・母2 <small>テーマ設定のアドバイス</small> 母1・母2 <small>調査・制作協力</small> ・民俗資料館	契機 ・校歌は記憶に残りやすい ・賞をとるための戦略的切り口 ① 学校の「校歌」の把握(12校) ② 校歌に出てくる「分析(抽出)」 「地名」の抽出(15ヶ所) ③ 地名の立地 ④ 市内の学校の立地 F.W. ⑤ 各場所の様子 ⑥ 頻出した地名の順位づけ	s 校歌の歌詞を書き出し、地名等の景観要素を囲む m1 千種川・鉄道・主要道路を中心とした市内全域 a 学校と「地名」の分布図 v4 地名・学校の凡例 v1 現地で作者が写る写真 s 現地に行った時の感想や地名の歴史等の紹介 o 山の名称に関する由来 v3 校歌の歌詞に出てくる地名・歴史のランキング	学び I (2) I (1) I (2) II (5) IV (8)
C4 C-Cが赤穂の山を調べたよ!! (赤穂の山 市内全域) 	母1・母2 <small>テーマ設定のアドバイス</small> 母1・母2 <small>調査・制作協力</small> ・市役所 ・登山客 ・地域住民 ・近隣小学校長	契機 ・前年制作時、知らない山の地名が複数でてきたから ・他参加者の山の地図の影響 ・賞をとるための戦略的切り口 地図/文献調査 ① 山の立地(32) ② 各山の標高 ③ 山の標高の順位づけ F.W./聞き取り ④ 登山した山の様子 ⑤ 登山中のエピソード	m1 白地図 a 山の分布図 v4 山の標高の凡例により高さの違いを視覚的に表現 v3 山名と標高(m)を低い順に列挙 v1 頂上から見える景色や看板の前で作者が写る写真 o 「冒険記」の文体で説明 v1 道中出会った人や発見等の写真を時系列に並べている s 出会った人に聞いた伝説や経験を写真と合わせコメント	学び I (1) I (2) IV (8) I (2) II (5) III (6)
C5 C-Cの時空をこえて民話で赤穂を旅したよ! (昔話 市内全域) 	母1・母2 <small>テーマ設定のアドバイス</small> 母1・母2 <small>調査・制作協力</small> ・市役所 ・民俗資料館	契機 ・過去の作品で昔話に関する場所を発見したから ・賞をとるための戦略的切り口 地図/文献調査 ① 赤穂の昔話(23話)の要約 ② 各昔話に出てくる「地名」を抽出 F.W./聞き取り ③ 各昔話にまつわる場所の立地 (23) ④ 各昔話の時代設定	s 昔話の内容を要約し画用紙に書きだす v1 物語を連想させるイラスト v2 作者が写る現地の写真 m1 千種川・鉄道・主要道路等 a 昔話にまつわる場所の分布図 v3 時代/日本の主な出来事と各昔話の年代を示した年表	学び I (2) II (5) I (1) IV (8) IV (9)

(凡例) 調査・分析の内容 ※0内は要素数 (記号) 表現の分類: (凡例1) 数字 数字 学びの分類: (凡例2)

Fig.3.5.2-2 作者 C の制作変遷図 (出典: 実行委員会写真提供により筆者作成)



(凡例) 〇 調査・分析の内容 ※0内は要素数 図表 表現の分類: (凡例1) 数字 数字 学びの分類: (凡例2)

Fig.3.5.2-3 作者Hの制作変遷図 (出典: 実行委員会写真提供により筆者作成)

3.5.3 作品の性質（分析結果①）

絵マップを通して地域に対する「学び」から子どもが得た地域理解の内容を明らかにするため、変遷図における「学びの分類」(Fig.3.5.2-1,2,3：右端欄)及び【学びの要点】(5-2節)から、作品の性質とその特徴を把握すると、(イ)～(ニ)の4パターン 10種類に分類できた(Table3.5.3)。

(イ) 主観や経験による場所や調査そのものに対する認識

①身近な場所での発見の喜びや楽しい経験の共有 (C1,C2)：

対象エリアを決め、作者が気づいたことや見つけたものを分け隔てなくアウトプットしており、発見することの楽しさをそのまま絵マップに表現している。「学校で習った植物を探し、見つけたときは嬉しく2人でバンザイしました。(C2) ^{hC}」とあることから、調査そのものが楽しく、作者の知的好奇心をかき立てる経験となったことが表れている。

②独自の視点からみる地域の魅力のアピール (K1,K4)：

田畑のイメージのある地域内において、「観光」や「食べ物」などを作者の視点で紹介することで地域の魅力を認識している。観光地や飲食店等、ある程度客観的な要素であるがオリジナルキャラの作成 (K1) やおススメの紹介(K1,K4)などオリジナルの表現することで、その場所及び地域に対して思い出や愛着を深めていると考えられる。

③楽しい記憶と新たな認識・行動範囲の拡大(K3,H1)：

お気に入りの公園でのおススメの過ごし方や知らなかった公園を知った喜びが表現されており、調査を通じた楽しい体験や記憶があることが読み取れる。特に H1 では、市役所への聞き取りを通して防災公園という遊ぶ以外の公園の役割を知り、公園に対する認識が拡大している。

④調査そのものへの知的好奇心(C4)：

登山中の発見や経験、出会った登山客から聞いたエピソード等を冒険記にまとめている。春休みから登山を始めたとあることから、長期にわたり調査そのものを楽しみ達成感や苦労を含む経験を伝えたいという想いが表れている。発見の喜びや楽しい体験を表現している点で(イ①)と類似しているが、山の分布及び標高などの文献で得た情報や人との出会いや『思いがけない所に歴史が隠れていること ^{hC}』など、主観的・経験のみならず、[II(5),III(6),IV(8)]など多様な学びの要素が見られる点が異なる。

(ロ) 集めた情報の編集や表現過程や技法そのものを通じた地域理解

①得た知識の整理・分析による周辺環境の仕組みの理解(K2)：

Table3.5.3 作品の性質 (出典：筆者作成)

作品の性質		▷「学び」を通して子どもが得た地域理解の内容
細分類	作品/テーマ	「学び」の分類結果 (Fig.5.6.7)
(イ) 主観や経験による場所や調査そのものに対する認識		▷「地域への肯定的なイメージ」の認識【イ】
①身近な場所での発見の喜びや楽しい経験の共有	C1 中学校周辺	I(1)
	C2 サイクリングロード	I(1,2)
②独自の視点からみる地域の魅力のアピール	K1 観光	I(1,2)
	K4 食べ物	I(1,2)
③楽しい記憶と新たな認識・行動範囲の拡大	K3 公園	I(1,2)
	H1 公園	I(1,2) II (3) IV(8)
④調査そのものへの知的好奇心	C4 山	I(1,2) II (5) III (6) IV(8)
(ロ) 集めた情報の編集や表現過程や技法そのものを通じた地域理解		▷地域環境の理解【ロ】
①知識の整理・分析による周辺環境の仕組みの理解	K2 ため池と田畑	I(1,2) II (3) IV(10)
②比較から把握する地域の固有性	K5 古墳	I(1,2) II (5) IV(8,9)
(ハ) 地域を継承する意識の芽生え		▷当事者意識の自覚【ハ】
①背景を知ることによる伝統継承への意識	H2 赤穂緞通	I(1,2) II (5) III (6,7)
	H4 獅子舞	I(1,2) II (5) III (6,7) IV(8)
②現代に引き継がれるまちの成り立ちと 先人から地域を受け継ぐ意識の醸成	H3 赤穂義士	I(1,2) II (4,5) III (6,7) IV(9)
	H5 旧赤穂上水道	I(1,2) II (3,4,5) III (6,7) IV(9)
(ニ) 独創的な地域の捉え方への探究心		▷地域の捉え方の探究【ニ】
①地域の景観イメージの発見と現地での体感の共有	C3 校歌	I(1,2) II (5) IV(8)
②場所の背景への気づきと想像することへの知的好奇心	C5 民話	I(1,2) II (5) IV(8,9)

ため池や田畑の分布及び各ため池のデータなどの集めた情報を整理し、表現を通して関係性を把握することで、景観(ため池と田畑)が成立する仕組みを明らかにした。作者は『地域の水の豊かさ^{h-H}』を理解し、地域環境への興味・関心が高まっている。

②比較から把握する地域の固有性 (K5) :

「古墳」を通して年代や集落分布の変遷を地図及び年表に表現することで、他地域と相対化し、『深い歴史をもつ^{h-K}』ことを地元の固有性として認識した。

(ハ) 地域を継承する意識の芽生え

①背景を知ることによる伝統継承への意識 (H2,H4) :

伝統技術(緞通)や祭り(獅子舞)の歴史を調べ、伝統技術や所属コミュニティが昔から引き継がれて今に至ることなど、自身と地域との繋がりを感じている。さらには聞き取りを通して作家や保存会などの継承者の熱い想いや地域コミュニティの存在およびその意義を理解した。作品の素晴らしさや技術の高さだけでなく、次世代へ伝えようとする人々の想いや姿勢に触れたことで、伝統を受け継ぐべき大切な文化・想いとして『未来へ残ってほしい^{h-H}』と共感している。

②現代に引き継がれるまちの成り立ちへと先人から地域を受け継ぐ意識の醸成 (H3,H5) : [II.(4)場所・空間の履歴][IV(9)時間の比較]に対する学びが特徴である。まちの構

造や成り立ちを今昔で比較しながら把握し、それらを引き継いで現在の街並みや都市構造があることを学んだ。さらにそれらを受け継いできた地域と人々を肯定的に捉えている。『先人の存在と功績を知ってもらいたい^{h+H}』と当事者意識を持ち、伝え受け継ぐべきこととして意識している。

(二) 独創的な地域の捉え方への探究心

①地域の景観イメージの発見と現地での体感の共有(C3)：

校歌の歌詞から景観要素を抽出し、現地で赤穂の景観イメージを体感している。複数の校歌の歌詞に共通の景観要素が使われていることを発見し、特に千種川が頻出することから「赤穂の人は千種川を大切に思っている^{h+C}』という特性を導き出している。

②場所の背景への気づきと想像することへの知的好奇心 (C5)：

昔話から地名や場所を抽出し、歴史や成り立ちなどの場所の持つ「背景」を認識した。その上で現地に出向き、背景を想像する面白さを体験したことで、知的好奇心をかき立てられた場所として記憶している。

(イ)～(ニ)により作品の性質を整理すると、(イ)は[I.状態]が特徴であり、フィールドワークを中心とした主観や経験に基づく学びによって「地域への肯定的なイメージ」を認識している。(ロ)は[IV.分析]が特徴であり、主観や経験だけでなく、文献調査や聞き取り等で得た学びを整理・分析し、表現過程や技法そのものを通じて、自ら体系化や関連付けを行うことで地域環境を理解している。(ハ)は、[II.背景][III.人]が特徴である。文献や他者から得た知識の体系化や関連付けを行うことで地域の背景にある仕組みや構造を理解している。さらに人々の想いに触れ自分と地域との繋がり、当事者意識を自覚している。(ニ)は独創的なテーマ設定により地域の捉え方を探求している。

以上、作品の性質(イ)～(ニ)より、【イ】「地域への肯定的なイメージ」の認識、【ロ】地域環境の理解、【ハ】当事者意識の自覚、【ニ】地域の捉え方への探究という、地域に対する「学び」から子どもたちが得た地域理解の内容が明らかになった。

3.5.4 学びの蓄積（分析結果②）

継続的な参加が作者にどのような視点の深まりや広がりを与えているのか。その傾向や蓄積内容を把握するため、各作品の「学び」の分類結果（Fig.3.5.2-1,2,3：右端欄）及び作品のテーマ(3.5.1 節, Table3.5.1-1)を作者ごとに整理した（Fig.3.5.4：「学び」の一覧）。地域を調べ表現するという絵マップの特性上、存在や場所を知る [I(1)]は全ての作品でみられる。さらにその内容・特徴の[I(2)]は、15 作品中 14 作品でみられた。一方、その他の分類は各作者によって異なる傾向が見られた。

「学び」の分類 作品名（テーマ）	I. 状態		II. 背景			III. 人		IV. 分析	5-3. 結果
	1	2	3	4	5	6	7	8,9,10	
K1 観光	1 ※1	2							【イ】
K2 ため池と田畑	1 2	3	4					4 (10) ※2	【ロ】
K3 公園	1	2							【イ】
K4 食べ物	1	2							【イ】
K5 古墳	1	2			2 3			4 (8,9)	【ロ】
C1 中学校周辺	1								【イ】
C2 サイクリングロード	1	2							【イ】
C3 校歌	3 4	1 2 3			5			6 (8)	【二】
C4 山	1	2 4			5	5		3 (8)	【イ】
C5 昔話	3	1 2			1 2			4 (8,9)	【二】
H1 公園	1	2	3					4 (8)	【イ】
H2 赤穂緞通	1	2 3			4	5	6		【ハ】
H3 赤穂義士	1 2	4	3	5	3	7	7	6 (9)	【ハ】
H4 獅子舞	1	2			4	5	5	3 (8)	【ハ】
H5 旧赤穂上水道	2 3 4	5	1	2 3 4	5 6	7	7	5 (8)	【ハ】

※1: 1, 2, 3...は制作変遷図における調査・分析項目の数字を示す
 ※2: ()内はIV(8,9,10)において該当する分類を表す

Fig.3.5.4 「学び」の一覧（出典：筆者作成）

以下、作者ごとに5年を通した①地域に対する「学び」（Fig.3.5.4 参照），②作品制作の契機及び関与について特徴を述べた上で，①，②及び作品の性質より把握した【イ】～【二】に基づき（Fig.3.5.4 右端に併記）③継続参加を通した学びの蓄積により，個人の中に形成される地域との繋がりを明らかにする。

（1）作者Kの分析結果

① 地域に対する「学び」:

5年を通して分類Iが中心に表現されていることが特徴であった。一方でK2は身近なため池を対象にため池と田畑の仕組み[II(3)]及び関係性[IV(10)]を把握し，K5では市内全域へ視野を広げ各古墳の歴史やできた年代[II(5)]さらには古墳の立地と年代から見る集落形成の広がり[IV(8,9)]など分類I以外の学びが見られた。このように有年地区の地域性が現れたテーマに関して理解し、『地域の水の豊かさ^{h-k}(K2)』『深い歴史を持つこと^{h-k}(K5)』など，身近な環境の仕組みや歴史・背景を肯定的に認識している。分類IVはK2は小6の姉の存在，K5は本人が小5になったことなど高学年の存在により分析的な思考が作品に表れていると考えられる。

② 契機・関与:

契機については，田畑のイメージがある地元のイメージチェンジ（K1,K4）や，校区内の公園(K3)，身近にあるため池(K2)や古墳(K5)への疑問や関心など，身近な事柄や環境（有年地区）への興味や疑問からテーマ設定がなされているという傾向があった。アンケートの「絵マップを通して自分の町を改めて知ったり新しく知ったりできたのでよかった^{h-k}」という言及から

も、多様なテーマを通して「有年地区」の様々な魅力の認識を年々更新していったことが窺える。関与については5年を通して家族全体で協力して取り組む様子が特徴的であった。K1,K2では手伝いとして参加していた弟がK3では小学生になりグループの一員として参加したことや、K3では中学生になった姉からアドバイスを得たことなど子どもの成長とともに家族内での絵マップへの協力体制が変わった様子が窺える。

③ 学びの蓄積：

①, ②より、校区の「有年地区」を中心に身近な事柄・環境に対する興味や疑問から多様なテーマ設定を行い家族一体で取り組んでいる。【イ】【ロ】を通して、有年地区への「肯定的なイメージ」の更新がなされている。

(2) 作者Cの分析結果

① 地域に対する「学び」：

C1,C2では対象エリアを決め、調査を通して作者たちの発見したものを分け隔てなくアウトプットし、[I.状態]についての学びのみがみられた。一方で、C3,C4,C5では市内全域を対象に校歌・山・民話などの独創的なテーマを設定し、[I]に加えて、文献調査や比較分析等を通して[II.背景],[IV.比較]の学びを得ている。C3,C5においては校歌及び民話から場所や地名抽出した上で、その場所や地名に出向きその場所の様子[I(1,2)]や歴史[II(6)]を、体験を通して把握している。またC4では、各山への登山を通して発見を得ながら[I(1,2)]、登山中の人との出会い、場所の持つエピソードや伝説を聞いている[II(5),III(6)]。このようにC3,C4,C5では各場所の背景にある歴史や伝説を発掘したり、想像したりする面白さを体験し、その発見や感動を伝えたいという意志が表れている。

② 契機・関与：

受賞のための戦略として他参加者とは重複しない独創的なテーマを設定した作品(C4,C5,C6)、公開審査会で他の参加者を見て影響を受けた作品(C4)など、公開審査会を通して他の参加者と相対化しながら戦略的に取り組んでいることが特徴的であった。アンケートでは「公開審査会の時には次年度のテーマを相談し始めていた^{hC}」という言及もある。また、小学校の校歌は郷土愛につながるという、他者(母親)のアドバイスにより大人の視点を契機としたテーマ設定も見られた(C3)。過去の制作時の発見や疑問からも次年度のテーマの切り口としており(C4,C5)その結果、異なるテーマを設定しながらも同じ場所を2回以上調査・表現し、学びを深めていることが特徴的である。関与は、同級生2名と各母親の4名で取り組んでいることが特徴である。アンケートによると、「(制作を通して友達と)会えることが楽しか

った^{h-c}」 「(山の作品(C4)では) 春休みから登山を始めた^{h-c}」 など、作者 C たちは制作過程において遊び・楽しみながら取り組んだことが窺える。

③ 学びの蓄積：

過去の作品での疑問や発見から興味を膨らませ、グループで戦略を練りながら独創的なテーマを設定している。場所の背景にある歴史や伝説を発掘したり、想像したりすることで、【イ】 【ニ】を通して、赤穂の新たな見方・捉え方を獲得している。

(3) 作者 H の分析結果

① 地域に対する「学び」：

H1 を除いた 4 作品で分類[Ⅱ.背景]及び[Ⅲ.人]に関する項目が見られ、作者 H は他 2 グループに比較して各作品の学びの要素の数が多いのが特徴である。H3,H5 では、赤穂義士および旧赤穂上水道という赤穂ならではのテーマを対象に、現地調査および文献、聞き取りを通して場所の履歴や歴史[Ⅱ(4,5)]を深掘りし、また H2,H4,H5 は伝統文化や祭りを担う人々の存在や功績とその歴史[Ⅱ(5),Ⅲ(6)]に触れ、それらを受け継ぐべき大切な文化や人の想い(Ⅲ(7))として受け取っている。また、[Ⅳ.分析]についても、地形やまちの構造の今昔比較(H3⑥,H5⑤)、各獅子舞の相対化による特徴の違いを理解(H4③)するなどの学びを深めている。

② 契機・関与：

『公園で遊ぶのが好き^{h-h}』(H1)という子どもらしい身近な事柄への興味関心から、緞通の体験教室(H2)や獅子保存会(H4)など体験・コミュニティへの所属、過去の制作をきっかけに「旧赤穂上水道」を知ったこと(H5)などが制作の契機であった。赤穂の歴史文化や地域性に着目し、赤穂特有のテーマ設定をした作品(H3,H5)、「義士教育」という学校での教育が制作の契機となった作品(H3)も見られた。また、家族以外に多様な人・施設への聞き取り・資料収集など、幅広い他者の関与を通して深い知識を得ていると考えられる。

③ 学びの蓄積：

多様な人・施設への聞き取り等の関与により、地域の背景には場所の履歴や歴史、先人の存在、人の想いがあることを認識し、【イ】 【ハ】を通してそれらを未来へ受け継ぐべき大切なこととして「当事者意識」を醸成している。

3.6 本章のまとめ

本節では、3.4節および3.5節（目的①～④）を通して作品の性質（分析結果①）と学びの蓄積（分析結果②）から得られた知見を踏まえ、絵マップへの継続参加による「地域との文脈形成」を明らかにする。

①作品の性質

制作変遷図を通して把握した「学び」の分類により作品の性質は Table3.5.3：(イ)～(ハ)の4パターン10種類に分類できた。フィールドワークを通して場所に対する楽しい記憶や調査そのものへの知的好奇心等から抱く【イ】「地域への肯定的なイメージ」の認識、文献調査や聞き取り等により得た学びの体系化による【ロ】地域環境の理解、地域の背景にある仕組みや構造への理解、人々の想いに触れたことによる【ハ】当事者意識の自覚、独創的なテーマ設定による【ニ】地域の捉え方への探究、という地域に対する「学び」から子どもたちが得た地域理解の内容が明らかになった。

②継続参加を通じた作者の地域に対する「学び」

作品の性質より把握した【イ】～【ニ】を通して、作者ごとに「地域との文脈形成」がなされていることを確認できた。

作者Kは【イ】【ロ】が該当し、5年を通して地元の魅力や固有性を自覚することで、「地域への肯定的なイメージ」の更新という文脈形成がなされた。作者Cは【イ】【ニ】が該当し、公開審査会における受賞に向けた戦略や他参加者からの影響などを契機として、独創的なテーマ設定により赤穂の「新たな見方・捉え方」を獲得するという文脈形成がなされた。作者Hは【イ】【ハ】が該当し、場所の履歴や歴史、先人の存在、人の想いがあることを認識し、未来へ受け継ぐべき「当事者意識」の醸成という文脈形成が明らかになった。

③作品制作の契機

作者K,C,Hの契機の内容を整理すると、1.身近な事柄・環境への興味・疑問(K1～K5/C1～C3/H1)、2.赤穂特有のテーマ(H3,H5)、3.過去作品制作時の疑問・発見(C4,C5/H5)、4.学校での教育(義士教育:H3)、5.体験・コミュニティへの所属(H2,H4)、6.他者の影響・アドバイス(C3)、7.受賞に向けた戦略(C3～C5)、8.他参加者作品の影響(C4)であった。特に1及び3は子どもの知的好奇心や探究などに基づく能動的な「学び」が制作の契機となっている。3の制作時の興味・疑問が次年度以降の制作やテーマ設定への動機やヒントになっている点は、絵マップ制作が次なる能動的な「学び」の機会を生んでいるともいえる点で特筆すべきである。これは、まとめ(3.4.5項)で述べた、同じ場所へ複数回の調査・表現がみられたことは制作時

の発見や学びが次年度以降に影響する、ということを裏付けている。また、Table3.3.2-2より、対象外の5年連続賞受賞者も含めた全28グループ120作品に関しても1):83作品、3):11作品が該当していることから、子どもの能動的な「学び」が作品制作の契機であるといえる。

7及び8は「公開審査会」という運用上の仕組みが影響していると考えられ、他の参加者の作品や審査員のコメント、受賞の有無による成功体験や悔しさ等が、次年度への制作の動機や意欲に繋がっていた。

④制作過程における関与

作者K,C,H全員に5年間を通して家族による協力体制がみられ、共同で制作する楽しさや大変さ、達成感などが印象深く残っていることが分かった。これは、絵マップを通して異なる世代間で地域を題材にした知識や学びの共有・受け渡しがなされているといえる。

また、対象外の5年連続賞受賞者の傾向をみると、祖父母との関与が多くみられる(Table3.3.2-1 設問1:20作品、設問2:18作品)。身近な世代の異なる祖父母への聞き取りを通して、場所の履歴や歴史が昔から引き継がれて今に至ることなど、自身と地域との繋がりを認識する機会であると考えられる。家族以外の特徴的な関与に着目すると、伝統や技術の継承者等への聞き取りなど、地域を支える人々やコミュニティとの関与を通して地域の一員であるという自覚を生んでいる。

以上、当該コンクールにおける絵マップ制作の変遷から、能動的な「学び」を主な作品制作の契機とし、制作過程において多様な関与により世代間の知識の受け渡しや作者の地域の一員としての自覚がなされることが把握できた。

作者K,C,Hは絵マップ制作を通して、地域に対する「学び」から、「地域への肯定的なイメージ」への認識や「地域環境の理解」、「当事者意識の自覚」が把握できた。さらに、継続的な参加による学びの蓄積を通して、「地域への肯定的なイメージ」の更新や「地域の新たな見方」、「当事者意識の醸成」など、各作者個人の中に形成される地域との繋がり「地域との文脈形成」が明らかになった。

3.7 考察

(1) 絵マップを通したまちの要素の掘り起こしと「地域文脈」への気付き

本章では、あこう絵マップコンクールの制作プロセスを詳細に紐解き分析を行った。

子ども達は、絵マップ制作を通して自身の興味関心に基づく能動的な学びを契機として、地域を認識している。絵マップのテーマ、題材は様々であるが、生き物、公園、お店など自身にとって身近なもの、発見したものなどの、目に見える世界だけでなく、その背景とそれらを脈々と受け継いできた地域の人々の存在やその精神など、身近な環境としての地域の姿とその背景にあるもの「地域文脈」を理解していると考えられる。

つまり、絵マップ制作は、まちの要素としての①目に見える世界（場所・空間・自然地形・人）および②目に見える世界の背景にあるもの（地域文脈）の両者を掘り起こす取り組みであるといえる。



Fig.3.7-1 絵マップコンクールとまちの要素
(出典：筆者作成)

(2) あこう絵マップコンクールの地域における意義

本論を通して、あこう絵マップコンクールが、自らの「学び」を通して地域を認識し（インプット）、絵マップにアウトプットする過程において、個人の内面に地域との繋がり「地域との文脈」を形成する可能性を有した仕組みであることを示した。

参加者の子どもは、まちあるきや地域の人へのヒアリングを通して、地域の魅力や歴史等を肯定的に捉え（インプット）、絵マップに表現する（アウトプット）する。これらインプットとアウトプットの往還作業により、子どもの「学び」は、自身の地域をみる「視点やイメージ」の更新され、「地域への肯定的なイメージ」への認識や「地域環境の理解」、「当事者意識の自覚」などの地域との文脈形成につながると考えられる（Fig.3.7-2：赤ライン）。

ここでは、作者の絵マップ制作を通した「学び」と制作過程における関与、及び運営の仕組み（絵マップ制作過程、公開審査会、巡回展示）に着目し、「学び」の循環について考察する。

①制作過程／家族間・世代間における「学び」の共有

あこう絵マップコンクールの審査は、単に作品のクオリティが高いだけでは評価されず、公開審査会のプレゼンテーションおよび質疑応答でどれだけまちを歩き、自分で考えたかを問われる。参加者の中には家族や兄妹がアドバイスをしたり、一緒に制作をしたりする参加者も多

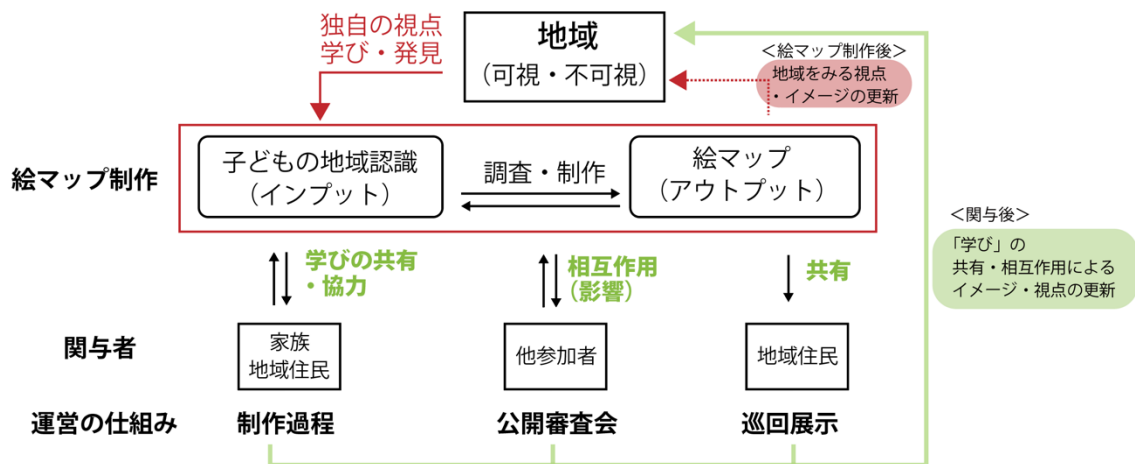


Fig.3.7-2 絵マップを通した「学び」の循環 (出典：筆者作成)

い。主体的に取り組んだ子どもは、家族と一緒に調べ、制作した場合もプレゼンテーションでハキハキと発表する（逆に親主導で取り組んだ場合は、子供は質問に答えられない）。これは、絵マップ制作過程で、他者（親や兄弟、地域の人）の知識やアイデアを子どもが自身で解釈し捉え直し、まちを歩き、絵マップ制作というインプット・アウトプットの往還を通して他者から地域に対する学びを自分の視点として獲得しているためであると考えられる。さらに、家族や地域住民は制作や調査の協力や子どもへの質問に答える中で、地域について考える機会が増え、関与者自身の地域の見方や視点も更新されると考えられる。実際、アンケートにおいて参加者の親から「(母親である) 私もいろいろ調べて赤穂を好きになったり『もし自分が子どもならこれを調べてマップにしたいな』と考えたり楽しんでいます。」などという声も寄せられている。

②公開審査会／他参加者との相互作用

当該コンクールの特徴である、「公開審査会」は、子どもが審査員に対して直接プレゼンテーションができる点、審査の透明性が担保される点などが挙げられるが、他の参加者の作品やプレゼンテーションを見る機会であるという点も重要である。自身の作品と相対化しながら、テーマを参考にしたり、真似をしたり、または自身のオリジナリティを見出したり、受賞するために研究したりと、互いに学び合い、影響を与え合うと考えられる。

毎年作品を見てきている実行員会の委員からも、子どもたちの作品やプレゼン方法、発表態度など年々レベルが上がっているという声が多く上がっている。

③巡回展示／市民への波及

当該実行委員会は、市立図書館、市民病院、赤穂義士隊、市の音楽祭などで作品展示を行い、できるだけたくさんの市民に見てもらおう機会設けている。子どもたちの絵マップは誰にでもわかりやすく市民が知っている場所も多いため、絵マップを見た市民は子どもの作品を通して、子どもの発想や表現に触れることで、地域を再認識する機会を得ていると考えられる。

以上より①②③より、作者の絵マップ制作を通じた「学び」と制作過程における関与、及び運営の仕組み（絵マップ制作過程、公開審査会、巡回展示）の過程で、絵マップを介して地域に対する「学び」が循環、波及している（Fig.3.7-2：緑ライン）。

注：

注1) 当該コンクールは世田谷区のまちづくりコンクールに影響を受け始まったという経緯がある。5年記念には延藤氏による講演会が実施された。

注2) 審査員は国土地理院近畿地方測量部、大学の教員、教育関係者、各種まちづくりに関わる市民など。多様な視点での評価のため、1～2年の交代制にしている。審査基準はまちに対する子どもらしい視点や発想のおもしろさ、作品づくりについての創意工夫や熱意などを総合的に判断する。

注3) 委員は市内の主婦・会社員・商店主・大学生など10代～80代まで約20名。また地元大学の関西福祉大学により審査会の会場の提供や学生ボランティア参加などの協力を受けている。

注4) 5年目(2007)には、国土交通省「手づくり郷土賞」地域活動部門に選定され、8年目(2010)には国土地理院より測量の日に「功労者感謝状」を拝受した。

注5) 調査方法や人数、「どのようにテーマ設定をしたか」「楽しかったこと」「絵マップを通して地域のどんなことを好きになったか」、作品制作における工夫や努力した点、事後の感想など自由記述が中心のアンケートとした。

注6) 作者Cは6年目に「C・Cの知られざる赤穂のまぼろしの城たち(2016)」を応募したが本論では他の作者と比較のため対象外とした。

注7) 赤穂市で制作される手織りの敷物。兵庫県伝統的工芸品。

注8) 旧赤穂上水道は、1616年に完成した赤穂城下町に整備された上水道のことであり、江戸・福山と並び日本3大上水道の一つとされている。

注9) 赤穂市教育委員会「赤穂の昔話」その1・2(1984年,1985年)

注10) 赤穂緞通は、明治～大正にかけて隆盛を誇ったが、昭和になり一度途絶えたという背景をもつ。1999年に赤穂緞通を伝承する会が立ち上げられ、技術伝承の取り組みが行われている。

注11) 「一度途絶えた緞通を復活させようとする、郷土愛を持つ人が大勢いること」

注12) 各住戸に給水される各戸給水としてはイギリス・ロンドンより古く、400年以上の歴史をもち、今なおその姿をとどめており現在は農業用水路として使用されている。

第4章 考察・まとめ

4.考察・まとめ

本章では、第2章、第3章から得た内容をまとめた上で、地域文脈の解読主体に着目し、地域文脈の継承及び更新に向けた考察を行う。また、杉田・木多ら^{9,10)}の地域文脈における「組織的文脈」「連鎖的文脈」の定義に基づき考察を進める。

4.1 ガーナ・アクラの非正規市街地における地域文脈の継承のあり方

①社会・空間構造の把握による「組織的文脈」の解読

Abese 地区における社会・空間構造の把握は、組織的文脈と連鎖的文脈を区別した際、組織的文脈の解読に取り組んだものといえる。Abese 地区の北街区においては、水・衛生環境を中心として良好な住環境が維持されており、その背景には土着コミュニティ「クラン」による地域マネジメントの仕組みがあるという地域文脈が明らかになった。一方、南街区はクランによるマネジメントが行き届いておらず、地域運営主体の不在や住環境の改善などの課題が挙げられる。また両地区において、人口の流出入などの環境変化によりコミュニティの希薄化という課題が明らかになった。

クランによる地域運営の合意形成の仕組みと生活空間の整備が連関しながら地域マネジメントとして機能していることを根拠とし、今後は、地域文脈の継承・更新に向けて、土着コミュニティの再構築（新たな地域運営の仕組み）が必要となる。

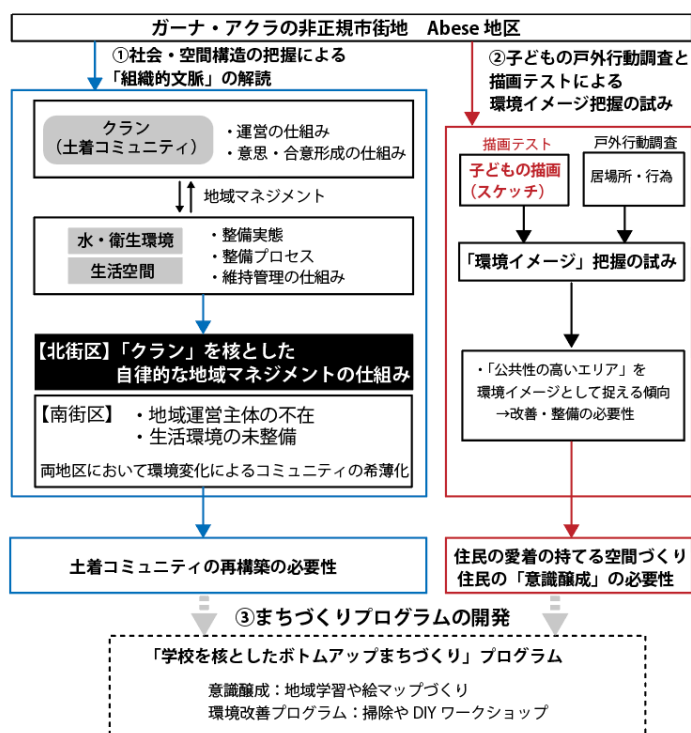


Fig.4.1 ガーナ・アクラの非正規市街地における地域文脈の継承及び更新に向けたフロー図 (出典：筆者作成)

②子どもの戸外行動調査と描画テストによる環境イメージの把握の試み

Abese 地区における戸外行動調査・お絵描きワークショップは、描画テストを通じた子どもの地域認識（環境イメージ）を把握することでAbese 地区における住民（子ども）と「地域と

の文脈形成」を明らかにしようと試みた。当該調査から公共性の高いエリアを環境イメージの対象として捉える傾向にあることが分かってきたが、子どもの地域に対する肯定的なイメージや愛着に関連する結果が得られなかった。これは、描画テストという調査方法や限られた時間も原因として考えられる。また、Abese 地区における住民や子どもが地域に対しての愛着や肯定的なイメージを認識する機会が少ないことや環境の未整備等も要因として考えられる。今後は、地域文脈の継承・更新に向けて、地域の当事者であり、担い手である住民や子どもが愛着をもてる空間づくりや、意識醸成が求められているといえる。

③学校を核としたボトムアップ型のまちづくりの提案

以上の2つの観点から、Abese地区において地域文脈の継承と更新に向けてクランを再構築し「学校を核としたボトムアップ型のまちづくり」プログラムの開発を提案する。

組織的文脈の観点からは、コミュニティの希薄化が進む中で、クランを核とする自律性の高い慣習的仕組みを継承しつつ、新規住民が地域運営に参加する仕組みづくりや、行政・第3者によるサポート体制の構築が必要となると考える。

連鎖的文脈の構築に向けては、教育プログラムを通して、子どもや地域住民が当事者として地域を自覚・認識していく仕組みが必要だと考える。そこで、Abese 地区の南街区にある「小学校」に着目し、学校を核として地域住民の参画促すことで、Abese 地区全体で地域の未来を担う子どもを育成すると共に地域コミュニティの再構築を目指す。具体的には、地域学習や絵地図づくりなどの地域に対する愛着やまちづくり意識の醸成を目指したプログラムや、掃除ワークショップや DIY などの自らの手で環境改善をしていくプログラムを開発することで、自分の住む地域を当事者意識をもって地域に関わる仕組みを提案したい。

4.2 絵地図制作による「人と地域との文脈形成」を通じた地域文脈の継承のあり方

第3章では、絵マップコンクールへの継続参加者に着目し、地域に対する「学び」から「地域への肯定的なイメージ」への認識や「地域環境の理解」、「当事者意識の自覚」が把握できた。さらに、継続的な参加による学びの蓄積を通して、「地域への肯定的なイメージ」の更新や「地域の新たな見方」、「当事者意識の醸成」など、各作者個人の中に形成される地域との繋がり「地域との文脈形成」が明らかになった。赤穂における「地域文脈」の継承・更新に向けて、子どもが地域に対する愛着や誇りを持つことは、まちづくり人材の育成という観点で重要な役割をもつと考える。

また、当該取り組みはその継続性により蓄積がある。本論ではわずか15作品3グループのみの作品分析に限られたが、他作品も含めると地域を見る視点や大切な場所、継承すべきことなど、絵マップ作品から地域の子どもの地域認識の集積や地域側からみる地域構造を把握しうる材料である。具体的には、専門家が把握する地域構造と地域の子どもの視点を組み込みながらマスタープランやガイドラインへの展開が考えられる。

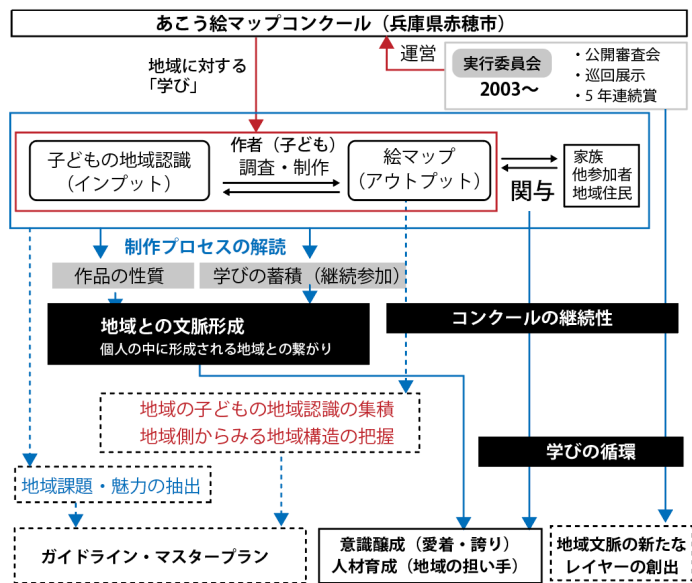


Fig.4.2 絵地図制作による「人と地域との文脈形成」の解読を通じた地域文脈の継承・更新に向けたフロー
(出典：筆者作成)

絵マップ制作を通して、赤穂における地域に対する「学び」やその価値を発掘・受け渡し・共有している。これらが20年間継続的に行われてきたことで、絵マップコンクールは「学び」の循環を生み、赤穂の「地域文脈」は時間軸を持った連環の仕組みを有していると言える。当該仕組みにより絵マップコンクールの参加者には、コンクールの実行委員への参画、大学でまちづくりを学んだり、赤穂市役所職員になった人もいる。絵マップの経験が赤穂に関わるきっかけになり、まちづくりを学ぶという行動の契機になっている。上記を踏まえると、あこう絵マップコンクールは連鎖的文脈の一つのレイヤーと言えるのではないだろうか。

4.3 まとめ

以上より、異なる観点①、②及び地域文脈の解読主体「地域住民・専門家」に着目し、それぞれの観点と解読主体から継承・更新に向けたアクションに必要な要素を整理し、その関係をフロー図で示した (Fig.4.3)。

2事例を通して、地域文脈の継承・更新に向けたアクションとして「地域計画や地域運営の仕組みの構築」や、地域住民の「意識醸成 (愛着・誇り) や人材育成 (地域の担い手)」が挙げられる。

「地域計画や地域運営の仕組みの構築」に向けて、地域文脈の解読の観点からは、「①地域課題・魅力の抽出・整理」が必要である。

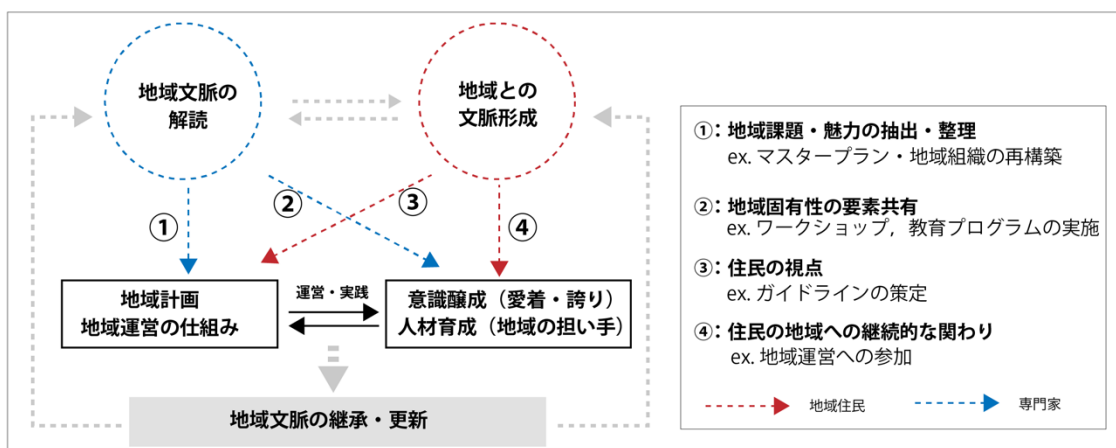


Fig.4.3 地域文脈の継承と更新に向けたフロー図 (出典：筆者作成)

一方で、地域との文脈形成の観点からは、「③住民の視点」を取り入れることが必要である。地域住民の「意識醸成(愛着・誇り)や人材育成(地域の担い手)」に向けては、地域文脈の解釈の観点からは、「②地域固有性の要素共有」が必要と考えられる。一方で、地域との文脈形成に関しては、「④住民の地域への継続的な関わり」が必要である。このフロー図では、地域住民と専門家の観点及び「地域文脈の解釈」と「地域との文脈形成」に、得られた要素をアクションプランである「地域計画や地域運営の仕組みの構築」と「意識醸成(愛着・誇り)や人材育成(地域の担い手)」にクロスさせた。これは地域住民と専門家の観点から得た知見をボトムアップの視点を組み込んだアクションプランとする事を意図している。

さらに2つのアクションプランは「運営・実践」を関連・連携しながら実施することが、次の「地域文脈の継承・更新」に繋がる循環を創り出すと考える。

参考文献

【1 章】

- 1)日本建築学会編：地域文脈デザイン-まちの過去・現在・未来をつなぐ思想と方法, 鹿島出版社, pp.010-pp.017
- 2) TAMURA H., DOI K. : A Practical Study of the Town Reconstruction Based on the Context of the Pre-Earthquake Community –A Case of the Post-Earthquake Land Readjustment Project Area in Morigu, Nishinomiya-, Journal of the City Planning Institute of Japan, vol. 34, pp. 499-504, 1999 (in Japanese)
- 3) SHIMODA M., KITA M, YOSHIZAKI M. : COMPREHENDING MECHANISM OF COMMUNAL LIVES ESTABLISHED BY THE VILLAGES IN ONAGAWA, MIYAGI PREFECTURE, BEFORE GREAT JAPAN EARTHQUAKE Study on rehabilitation of fishing villages with continuation of area’s context part 1, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No. 733, pp. 647-656, 2017.3 (in Japanese)
- 4)Yuta NAGAI, Michihiro KITA, Motoki SHIMODA, et al. COMPREHENSION OF AREA’S CONTEXT IN THE OLD VILLAGE AND CULTIVATED AREA BEFORE AND AFTER THE DEVELOPMENT OF SENRI NEW-TOWN. Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ). 2022, Vol.87, No.797, p.1208.
- 5) Roy, A.:Urban Informality: Towards a new epistemology of Planning. J. Am. Plan. Assoc. 71, pp. 147–158, 2005
- 6)University of Tokyo cSUR-SSD Study Group: SSDs in the World: Points of Urban Renewal, Shokokusha, p.275-327,p.476-477,2007(in Japanese)
東京大学 cSUR-SSD 研究会編著:世界の SSD:都市持続再生のツボ,彰国社, pp.275-327,pp.476-477,2007
- 8) KITA M.: STUDY ON FORMATION OF “A PLACE FOR COMMUNITY” FROM THE ASPECT OF AREA’S CONTEXT Comprehending formative process of “Higashimachi Machikado Hiroba” in Senri New Town based on the action of solving issues by the key persons, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No.675, pp.1023-1031, 2012.5 (in Japanese) 木多道宏：地域文脈からみた「まちの居場所」の形成に関する研究 キーパーソンの課題解決行為に基づく千里ニュータウン「ひがしまち街角広場」の形成過程の考察, 日本建築学会計画系論文集, No.675, pp.1023-1031, 2012.5

- 9) SUGITA M., KAWASAKI E., KITA M., SHIMODA M., TSUJI H., MATSUBARA S., OKYERE S.: COMPREHENSION OF AREA'S CONTEXT IN REHABILITATION FROM GREAT DISASTERS A Case Study on Land Readjustment Project of Reconstruction from Great Hanshin-Awaji earthquake in Matsumoto District, Hyogo Ward, City of Kobe, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No.772, pp. 1183-1193, 2020.6 (in Japanese) 杉田美和, 川崎衣里永, 木多道宏, 下田元毅, 辻寛, 松原茂樹, オチエレ セス アサレ: 大災害からの復興における「地域文脈」の解説 神戸市兵庫区松本地区における阪神・淡路大震災からの復興土地区画整理事業を対象として, 日本建築学会計画系論文集, No.772, pp.1183-1193, 2020.6
- 10) SUGITA M., IIDA T., KITA M., TSUJI H., SHIMODA M., MATSUBARA, S., OKYERE S.: STUDY ON AREA'S CONTEXT OF CITY CENTER IN WHICH SEQUENTIAL REDEVELOPMENT PROJECTS HAVE BEEN IMPLEMENTED Analysis of Economic System among Proprietors and Companies in Takamatsu Marugamemachi Shopping Street, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No.775, pp. 1943-1953, 2020.9 (in Japanese) 杉田美和, 飯田大輝, 木多道宏, 辻寛, 下田元毅, 松原茂樹, オチエレ セスアサレ: 連鎖的な再開発事業が成立する中心市街地の「地域文脈」に関する研究 高松丸亀町商店街における地権者・事業主体間の経済システムの分析, 日本建築学会計画系論文集, No.775, pp.1943-1953, 2020.9

【2章】

- 1) Seth, O., Kita, M.: See, This is a very good place: We are doing many things: resident activities and satisfaction in Abese Informal Settlement, La., Journal of Sustainable Development in Africa, Volume 18, No.2, pp.77-100, 2016
- 2) Ono, H. and Kidokoro, T.: Development Patterns in Informal Settlements: Understanding the spatial formation and management of informal settlements in Nairobi (1), Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No.743, pp.83-91, 2018.1 (in Japanese)
- 3) Ono, H. and Kidokoro, T.: Land Delivery Process and Mechanism for Securing Land Tenure in Informal Settlements: Understanding the spatial formation and management of informal settlements in Nairobi (1), Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.84, No.755, pp.179-186, 2019.1 (in Japanese)

- 4) University of Tokyo cSUR-SSD Study Group: SSDs in the World: Points of Urban Renewal, Shokokusha, p.275-327, p.476-477, 2007
 東京大学 cSUR-SSD 研究会編著:世界の SSD:都市持続再生のツボ,彰国社, pp.275-327, pp.476-477, 2007
- 5) Kidokoro, T. and Shima N., et al.: Urban Communities in Asia and Africa -Formation Logic of "Handmade Town" and Practice of Empowerment-, Gakugei Publisher, 2015
 城所哲夫, 志摩憲寿 他, アジア・アフリカの都市コミュニティ-「手づくりのまち」の形成論理とエンパワメントの実践-, 学芸出版社, 2015
- 6) Seth, O., Kita, M.: Rethinking Urban Informality and Informal Settlements Growth in Urban Africa: Literature Discussion, Journal of Sustainable Development in Africa, Volume 17, No.6, pp.101-124, 2015
- 7) UN Habitat. State of the World Cities Report, United Nations Human Settlement Program; UN Habitat: Nairobi, Kenya, 2016
- 8) UN Habitat/AMA.: Participatory Slum Upgrading and Improvement Program; Accra Metropolitan Assembly: Accra, Ghana, 2011
- 9) Ministry of water resources, works and housing, Government of Ghana: National housing policy, 2015
- 10) Local Governance Act, 2016 (Act 936), 2016

【3章】

- 1) Kinoshita, I.: Workshop-Methodology for Resident-centered Town Development, Gakugei Publishing Co., Ltd., 2007 (in Japanese)
 木下勇: ワークショップ-住民主体のまちづくりへの方法論-学芸出版社, 2007
- 2) Children and Town Development Study Group: Town Development Reader 2 Children and Town Development-Adventures of Interest-, Fudosha, 1996 (in Japanese) こどもとまちづくり研究会: まちづくり読本2 こどもとまちづくり-面白さの冒険-, 風土社, 1996
- 3) Housing Research Foundation: The town is a wonderland for children-learning the environment from now on, Fudosha, 1998 (in Japanese) 住宅総合研究財団: まちはこどものワンダーランド-これからの環境学習, 風土社, 1998
- 4) Children's Play and Town Study Group: Three Generations Playground Picture Book-The city is our playground! , Fudosha, 1999 (in Japanese)

子どもの遊びと街研究会:三世代遊び場図鑑一街が僕らの遊び場だ,風土社,1999

5)Kato,H.:PERSONAL IMAGES OF INHABITANTS ON ENVIRONMENTS BY UTILIZING THE IMAGE MAP AND SPATIAL CHARACTERISTICS OF SETTLEMENTS : Structure of urbanization and environmental planning in the marginal area of town and country Part 3,Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.62, No.493, p.185-193,1997 (in Japanese)加藤仁美:「イメージマップ」による個人の環境イメージと集落空間特性:都市・農村のマージナルエリアにおける都市化の構造と環境計画 第3報,日本建築学会計画系論文集.62 巻 493 号, p.185-193, 1997 年

(DOI:https://doi.org/10.3130/aija.62.185_1)

6) Wada,Y.:A Study on living space of children in view of cognitive map, Journal of the City Planning Institute of Japan,Vol.23,p.169-174,1988(in Japanese)和田幸信:イメージマップからみた子供の生活空間とその認識に関する研究,日本都市計画論文集.第23巻,p.169-174,1988年

(DOI : <https://doi.org/10.11361/journalcpj.23.169>)

7) Kitaura,K. and Fujono,J. : The Spatial representation on school children's drawings-analysis of their favorite room's drawings-,Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.74, No.643, pp.1977-1983,2009(in Japanese)北浦かほる, 藤野淳子:小学生の描画にみる空間表象の特徴-「こんな部屋いいな」をテーマとした絵の分析-,日本建築学会計画系論文集.74 巻,643 号,p. 1977-1983,2009

(DOI : <https://doi.org/10.3130/aija.74.1977>)

8) Kuramata,M. and Endo,Y. : Study on community design contest for planning human living values in community building-Cases in Setagaya ward and Minamata city-,Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.433, p.95-104,1992(in Japanese)倉原宗孝,延藤安弘:計画行為における価値づくりに向けてのまちづくりコンクールの有効既に関する考察:東京都世田谷区,熊本県水俣市の場合,日本建築学会計画系論文集.第433巻 p.95-104,1992年

(DOI : https://doi.org/10.3130/aijax.433.0_95)

9) Kurahara,M.,et al. :Study on children's experiential activity to facilitate participation in community building,Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ),Vol.61, No.483,pp.179-188,1996(in Japanese)倉原宗孝ほか:子どもたちの体験活動による住民参加のまちづくり促進に関する考察,日本建築学会計画系論文集.61 巻, 483 号,p.179-188,1996

(DOI : https://doi.org/10.3130/aija.61.179_2)

10) Kurahara, M. : A study on experiential and continuative children's activity as community making-Through the action called "kodomo matikado kaiketutai" for 5 years in Teine ward- , AIJ Journal of Technology and Design, Vol.7, No.12, pp.199-204, 2001 (in Japanese) 倉原宗孝 : 子どもたちの体験的・持続的まちづくり活動の意義と評価-札幌市手稲区における「こどもまちかど解決隊」の5年間の活動を通して, 日本建築学会技術報告書, 7巻, 第12号, pp199-204, 2001 (DOI : https://doi.org/10.3130/aijt.7.199_1)

11) Ishihara, K. and Tabata, E. : A Study on the patterns of place attachment from the viewpoint of experience aspects for university students, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol.85, No.777, p.2297-2305, 2020 (in Japanese) 石原可南子, 太幡英亮 : 大学生を対象とした経験的側面から見る場所への愛着の形成パターンに関する研究, 日本建築学会計画系論文集第85巻777号 p. 2297-2305, 2020年 (DOI : <https://doi.org/10.3130/aija.85.2297>)

12) Yamamoto, G. and Kano, S. : A Study of Process for Developing "Attachment for Community" — Analysis of Practice in "Exploration of a Town", The journal of the Teaching Career Center, Vol. 1, pp. 17-25, 2016. 6 (in Japanese) 山本銀兵, 加納誠司 : 「地域への愛着」形成過程に関する一考察—「町探検」の実践分析を通して—, 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, Vol. 1, pp. 17-25, 2016.

13) Hikichi, H., et al: Attachment to residence: Affect of physical environment and social environment. Proceedings of JSCE D, 65: 101-110. (in Japanese) 引地博之ほか: 地域に対する愛着の形成機構-物理的環境との社会定期環境の影響, 土木学会論文集 D, Vol.65 No.2, 101-110, 2009 (DOI : <https://doi.org/10.2208/jscej.d.65.101>)

謝辞

本研究は、大阪大学大学院 工学研究科地球総合工学専攻 第3領域 建築・都市計画論領域において行われたものです。本研究を行うにあたり、多くの方々のご協力を頂きました。

本研究を遂行するにあたり、大阪大学工学研究科地球総合工学専攻・木多道宏教授には、豊富な知識のもと数々の多様な知見を賜りました。熱心なご指導並びにご鞭撻を賜り、心より感謝申し上げます。

副査である大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻の横田隆司教授、並びに、阿部浩和教授には、副査としてご意見を賜り、ここに感謝の意を表します。

木多研究室の松原茂樹准教授、小島見和助教、杉田美和特任助教、辻寛特任助教、他研究室の皆様には大変お世話になり、心より感謝申し上げます。また、大手前大学建築&芸術学部講師の下田元毅先生には、何度も挫けそうになった場面でも励まし熱心にご指導いただきましたお陰で諦めずに執筆することができました。本当にありがとうございました。

また同期の林和典君とは研究室配属以来6年間共に励まし合い、切磋琢磨することで研究生活を乗り越えることができました。ありがとうございました。

本研究の調査にあたり、アフリカ・ガーナの現地調査において、コーディネーターのEric氏をはじめ、チーフ・クラン長の方々、多くの住民の方にご協力をいただきました。また、あこう絵マップコンクール実行員会の皆様及び5年連続賞の受賞者の皆様には資料提供及びアンケートに快くご協力いただきました。ここに記して感謝を申し上げます。

また博士課程の残りの1年半は、三重県尾鷲市においてNPO 法人おわせ暮らしサポートセンターの木島さん、豊田さん、サポセンの皆様をはじめとする関係者の方々のご理解と支えがあって、地域おこし協力隊をしながらの博士課程という期間を過ごし、励まされながら論文執筆をすることができました。また「土井見世邸」で執筆できたことを大変嬉しく思っております。温かく見守って下さいました皆様と、私の尾鷲のイエでありカゾクである「土井見世」に心から感謝申し上げます。

そして何よりも、これまで応援して下さった両親には心より感謝を申し上げますと共に、「あこう絵マップコンクール」を20年間継続して活動してきたことを心より尊敬しております。実行委員会の皆様の作り上げてきた「あこう絵マップコンクール」は、私の「まちづくり」の原体験でもありをどうしても書き残したいと思っておりましたので、論文にまとめることができ、本当に嬉しく思っています。本博士論文の完成を報告し感謝の印といたします。

末尾ながら、先駆的な研究成果を引用させていただいた多くの文献著書の方々に深く感謝申し上げます。

令和5年1月記